

秋田県文化財調査報告書第248集

県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書II

— 天戸森遺跡 —

秋田県埋蔵文化財センター

1994・3

秋田県教育委員会

秋田県文化財調査報告書第248集

県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書II

—— 天戸森遺跡 ——

1994・3

序

本県には、先人の遺産である埋蔵文化財が数多く残されています。この埋蔵文化財を保護し、後世に伝えてゆくことは、私たちの努めであります。

このたび、県道田山・花輪線道路改良事業に伴い、天戸森遺跡の発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代の竪穴住居跡や土坑などを検出し、捨て場からは、たくさんの土器・石器などが出土し、当時の生活の一端を明らかにすことができました。

本報告書は、これらの調査成果をまとめたものであります。

本書が埋蔵文化財の保護のために広く活用され、同時に郷土の歴史資料として役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査の実施並びに本報告書の刊行に当たり御援助・御協力をいただきました秋田県土木部・鹿角土木事務所・鹿角市教育委員会ならびに関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

秋田県教育委員会

教育長 橋 本 頸 信

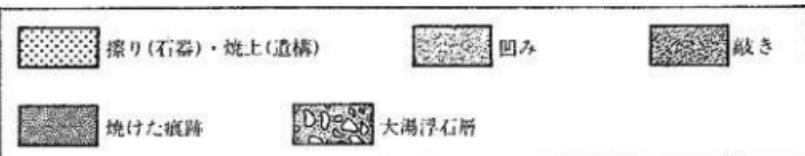
例　　言

1. 本報告書は、県道田山・花輪線道路改良事業に係る鹿角市大戸森遺跡の報告書である。
2. 県道田山・花輪線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査は、昭和57・58年度にも実施され、「県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書－案内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ遺跡－」として昭和59年3月に報告書が刊行されている。
3. 大戸森遺跡は、昭和57年度に鹿角市教育委員会が市立花輪第一中学校の新築移転に伴い、用地内にかかる範囲を発掘調査しており、今回の調査範囲はその北側に隣接している。
4. 本書の執筆は、柴田 鶴一郎が行い、神成栄理子の協力を得た。
5. 陶磁器の鑑定は佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二氏にお願いした。
6. 発掘調査および遺物整理にあたって、下記の方々からご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表す次第である。(敬称略、五十音順)

秋元信夫 小保内裕之 胸井知広 澄川 淳 高橋總司 福岡英雄 藤井安正 三浦圭介
村木 淳 八木光則

凡　　例

1. 各遺構に付している略記号は以下のとおりである。
S I(堅穴住居跡) S K(土坑) SKF(フラスコ状土坑) SK I(堅穴状遺構)
SD(溝状遺構) SN(焼土遺構) SQ(配石遺構) SX(性格不明遺構)
2. 遺構の番号は検出順に通し番号とした。精査段階で欠番となったものもある。
3. 土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に掲った。
4. 採図中の遺物実測図と拓影図は土器・土製品と石器類・陶磁器・鉄製品に分け、それぞれ通し番号とした。石器類の番号にはSを付した。図版中の遺物もそれにしたがった。
5. 石器観察表中の単位は、長さ、幅、厚さがcm、重さがgで、土器観察表の単位はcmである。
6. 文章中および表中の法量の推定値は()で表示した。
7. 石器実測図の1点鎖線は、破断面を表している。
8. 採図中のスクリーン・トーン、シンボルマークは以下のように使い分けた。これ以外のスクリーン・トーン、シンボルマークは各図中に明記した。
9. 石器の石笠と磨製石斧の分類は、佐原 真「石斧論－横斧から縦斧へ－」に掲った。



目 次

序

例言・凡例

目次・挿図目次・表目次・図版目次

第1章 はじめ

第1節 調査に至るまで	1
第2節 調査の組織と構成	1
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 周辺の地形・地質	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の概要	
第1節 遺跡の概観	7
第2節 調査方法	7
第3節 調査経過	8
第4章 調査の記録	
第1節 基本層序	15
第2節 検出遺構と出土遺物	15
1 遺物の分類	
2 縄文時代の遺構・遺物	21
(1) A区の遺構・遺物	21
(2) A区の遺構外出土遺物	49
(3) B区の遺構・遺物	52
(4) B区の遺構外出土遺物	89
3 弥生時代の遺物	89
4 平安時代以降の遺構・遺物	90
(1) 遺構・遺物	90
(2) 遺構外出土遺物	91
第5章 自然科学的分析	
第1節 放射性炭素年代測定	97
第6章 まとめ	98
図版	

挿 図 目 次

第1図 天戸森遺跡と周辺遺跡位置図	v	第18図 A区遺構内出土土器 (3)	38
第2図 天戸森遺跡周辺地形図	5	第19図 A区遺構内出土土器 (4)	39
第3図 工事計画図と調査区	6	第20図 A区遺構内出土土器 (5)	40
第4図 遺構配置図	11	第21図 A区遺構内出土土器 (6)	41
第5図 A区基本層位図 (調査区南端のライン)	12	第22図 A区遺構内出土土器 (7)	42
第6図 A区南東部地形図	13	第23図 A区遺構内出土土器 (8)	43
第7図 B区中央部地形断面図	14	第24図 A区遺構内出土土器 (1)	44
第8図 A区S I 09・SK 08	22	第25図 A区遺構内出土石器 (2)	45
第9図 A区S I 15	24	第26図 A区遺構内出土石器 (3)	46
第10図 S I 16・SK 28	26	第27図 A区遺構内出土石器 (4)	47
第11図 A区S I 19・SK I 24	28	第28図 A区遺構内出土石器 (5)	48
第12図 S I 22・S I 23	29	第29図 A区遺構外一捨て場-出土土器 (1)	53
第13図 A区S N 29・SK	33	第30図 A区遺構外一捨て場-出土土器 (2)	54
第14図 A区S Q配石遺構	34	第31図 A区遺構外一捨て場-出土土器 (3)	55
第15図 A・B区S N 10土器	35		
第16図 A区遺構内出土土器 (1)	36		
第17図 A区遺構内出土土器 (2)	37		

第32図	A区遺構外-捨て場-出土上器 (4)	56
第33図	A区遺構外-捨て場-出土上器 (5)	57
第34図	A区遺構外-捨て場 (6) -・ 遺構出土土器 (1)	58
第35図	A区遺構外出土上器 (2)	59
第36図	A区遺構内-外-捨て場出土土器 (深鉢、浅鉢、壺) ····	60
第37図	A区遺構外出土土製品	61
第38図	A区遺構外-捨て場-出土上器 (1)	62
第39図	A区遺構外-捨て場-出土石器 (2)	63
第40図	A区遺構外出土石器 (1)	64
第41図	A区遺構外出土石器 (2)	65
第42図	A区遺構外出土石器 (3)	66
第43図	A区遺構外出土石器 (4)	67
第44図	A区遺構外出土石器 (5)	68
第45図	B区 S 150・SKF57	70
第46図	B区 S 169・SKF53・SKF54	71

第47図	B区 S K55・SK56・SK58・ SK59・SK60	75
第48図	B区 SK62・SK67・SK70・ SK66・SK152	76
第49図	B区 SK65・SKF68	77
第50図	B区 SX51	79
第51図	B区遺構内出土土器 (1)	80
第52図	B区遺構内出土上器 (2)	81
第53図	B区遺構内出土土器 (3)	82
第54図	B区遺構内出土上器 (4)	83
第55図	B区遺構外出土七器 (1)	84
第56図	A・B区遺構外縄文 (前期・後期) 弥生出土土器	85
第57図	B区遺構内出土石器 (1)	86
第58図	B区遺構内出土石器 (2)	87
第59図	B区遺構内出土砾石器 (3)	88
第60図	A区中央部溝状遺構	92
第61図	A区 S D07溝状遺構出土石器	93
第62図	A・B区出土鉄製品・鉄鋸	94
第63図	A区出土陶磁器 (1)	95
第64図	A区 (2)・B区出土陶磁器	96
付 図	戸戸森遺跡遺構配図・地形図	

目次

第1表 戸戸森遺跡の位置と周辺遺跡一覧

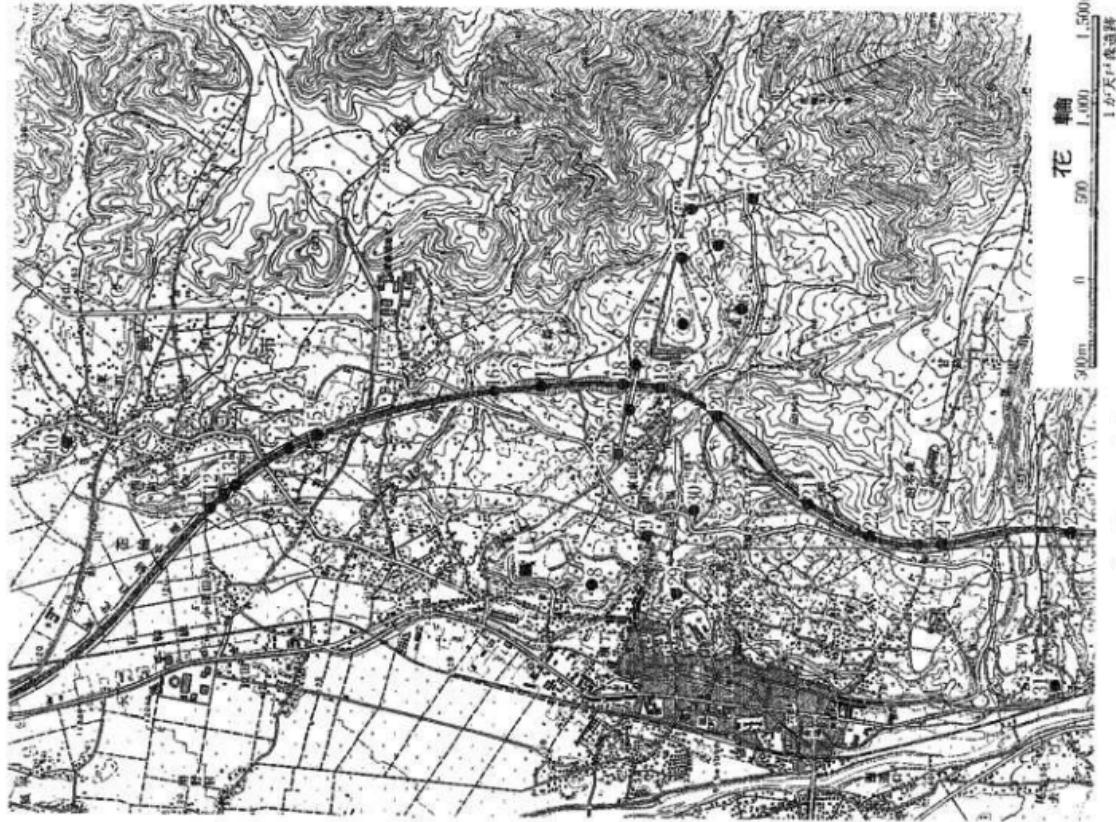
第2表 出土陶磁器一覧 91

図版目次

- 図版1 1 空中写真-1993年7月撮影-
(上北下)
- 2 調査区近景(北東→)
- 図版2 1 A区調査状況-B区平坦部より
(南西)
- 2 A区緩斜面-調査後(東→)
- 3 A区基本層位断面-調査区南端
(東→)
- 図版3 1 A区 S 109・SK08 完掘(南→)
2 A区 S 115 完掘(南東→)
3 A区 S 115炉 完掘(南東→)
- 図版4 1 A区 S 116(東→)
2 A区 S 116炉 完掘(東→)
3 A区 S 119 完掘(東→)
- 図版5 1 A区 S 122 完掘(西→)
2 A区 S 123 完掘(南→)
3 A区 S 123 遺物出土状況(東→)
- 図版6 1 A区 SK25 完掘(北→)
2 A区 S Q26 完掘(北→)
3 A区中央部 溝状遺構(西→)
- 図版7 1 B区平坦部 調査後(南→)
2 B区平坦部 調査状況(北→)

- 3 B区平坦部西端 土層堆積状況
(南東→)
- 図版8 1 S 150・SKF57 完掘(南→)
2 SKF57 完掘(南→)
3 S 170・SKF69 調査状況(南→)
- 図版9 1 B区 SX51 完掘(南→)
2 B区 SX51 中央部土層断面(南→)
3 B区 SX51 土器埋設炉断面(南→)
- 図版10 出土土器 (1)
- 図版11 出土土器 (2)
- 図版12 出土土器 (3)
- 図版13 出土土器 (4)
- 図版14 1 A区遺構内出土石器 (1)
2 A区遺構内出土石器 (2)
3 A区遺構内出土石器 (3)
- 図版15 1 A区遺構内出土石器 (4)
2 A区遺構内出土石器 (5)
3 B区遺構内出土石器 (1)
- 図版16 1 B区遺構内出土石器 (2)
2 B区遺構内出土石器 (3)
3 B区遺構内出土石器 (4)

第1図 天戸森遺跡と周辺遺跡位置図



第1表 天戸森遺跡と周辺遺跡一覧表 (※No.1 と No.7 以降はこれまでに発掘調査された周辺遺跡)

No.	遺跡名	時代・遺構・遺物	No.	遺跡名	時代・遺構・遺物
1	天戸森	縄文・平安・集落跡	17	猿ヶ平Ⅰ	縄文・集落跡
2	東山Ⅰ	縄文・遺物包含地	18	案内Ⅱ	縄文・集落跡
3	東山Ⅱ	縄文・遺物包含地	19	案内Ⅰ	縄文・平安・集落跡
4	赤坂A	縄文・遺物包含地	20	孫右エ門館	平安・集落跡
5	赤坂B	縄文・遺物包含地	21	中の崎Ⅰ	平安・集落跡
6	産土神A	縄文・遺物包含地	22	柏木森	縄文・平安・土坑群
7	産土神C	縄文・遺物包含地	23	明堂長根	縄文・土坑群
8	黒土館	中世・館跡	24	一本杉	縄文・平安・集落跡
9	花輪古館	中世・館跡	25	上葛岡N	縄文・平安・集落跡
10	地羅野館	中世・館跡	26	案内N	縄文・平安・集落跡
11	西町Ⅱ	縄文・中世・堅穴遺構・土坑	27	案内Ⅲ	縄文・弥生・平安・集落跡
12	西町Ⅰ	縄文・弥生・土器・石器	28	案内V	縄文・弥生・平安・集落跡
13	西町Ⅲ	縄文・平安・集落跡	29	花輪館	近世・館跡
14	乳牛館	乳牛平 ² ・妻の神Ⅲとして県教委調査 中世	30	下沢田	平安・集落跡
15	妻の神館	妻の神Ⅰ・Ⅱとして県教委調査 中世	31	玉内	縄文・配石遺構群
16	猿ヶ平Ⅱ	縄文・集落跡			

※鹿角市教育委員会 1993 より転載・改変

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至るまで

県道田山・花輪線は鹿角市花輪から花輪越を通り、岩手県安代町田山に至る道路で、大部分が山岳道路である。このうち、秋田県側の花輪字下タ町と花輪字案内間(全長2.5km)は、幅が狭く、勾配も急であるが、近年沿道に宅地が増えたことから、生活道路としての重要性が増している。加えて国民体育大会冬季大会を平成9年に控えており、その整備は急務となっている。

当初、花輪字案内と赤坂間については、昭和50年代にバイパス道路を建設する計画が作成され、計画路線内に埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、県土木部鹿角土木事務所は、昭和56年6月に文化財保護法に基づき秋田県教育委員会に遺跡調査の依頼をした。秋田県教育委員会はこれを受け、同年7月に遺跡分布調査を行い、4箇所の遺跡を発見し、昭和57・58年度に本調査を実施、昭和59年3月に報告書が刊行された。

その後、この県道バイパス道路が花輪字福士から下タ町まで延伸されることになり、平成2年に遺跡分布調査を行い、周知の遺跡である天戸森遺跡の一部が路線に係ることが確認された。平成3年10月に範囲確認調査が実施され、今回の本調査に至ったものである。

第2節 調査の組織と構成

所 在 地	秋田県鹿角市花輪字陳場 ¹⁴²⁻¹ 外
調査期間	平成5年5月10日～平成5年7月30日
調査面積	4,890m ²
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	柴田 陽一郎（秋田県埋蔵文化財センター調査課文化財主査） 神成 栄理子（秋田県埋蔵文化財センター調査課非常勤職員）
総務担当	佐々木 真（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査） 佐藤 広文（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
調査協力機関	秋田県鹿角土木事務所 鹿角市教育委員会

参考文献

秋田県教育委員会『県道田山・花輪線関係道路発掘調査報告書－案内Ⅲ・Ⅳ・V・VI遺跡－』

秋田県文化財調査報告書第115集 1984（昭和59）年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第226集 1992（平成4）

年

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡周辺の地形・地質

1. 地理的位置（第1・2図）

本遺跡は鹿角市花輪字陳場外に所在し、おおよそ北緯40°12'、東経140°48'の位置にある。遺跡は鹿角市の中央部、JR東日本花輪線陸中花輪駅の北東約1.4kmの距離にあり、国道282号バイパスの通称「高井田通り」から東に折れて下タ町の県道大湯・花輪線と交差してすぐの台地上に立地する。

2. 地形・地質概要（第1・2図）

遺跡の所在する鹿角地方は秋田県の北東部に位置し、北は青森県、東は岩手県と境を接している。本地域の地形は大きくみて東西の山地、花輪盆地内の段丘地形、沖積低地の三つに大別される。

山地は東に標高1,000m内外の奥羽脊梁山脈、西に標高200~350mの高森山地が間近に臨まれ、その山麓間は、北に開けた三角形状を呈し、南北に長く広がっている。この盆地には十和田火山起源の噴出物とその二次堆積物からなる段丘が広く分布している。また、岩手県に源流をもつ米代川は、脊梁山脈を西に流下して盆地に至って西端を北流する。米代川の両岸には4つの段丘面が確認されており、花輪以北の右岸ではその発達が良好で、これら段丘間には沖積地が広がる。盆地の東側には急峻な山々が連なり、それから派生する末端の段丘群は、花輪から毛馬内にかけては、西の米代川方向に向かって舌状に形成された台地となっている。本遺跡が立地している台地もそのようにして形成された段丘群のうちの1つであり、この東側にもいくつかの舌状台地が存在する。さらに、本遺跡の南側には、東側の脊梁山脈の一峰である皮投岳（標高1,122m）に水源を発する福士川が西流し、米代川に注ぐ。

脊梁山脈付近の地質は新第三紀中新世の凝灰岩などグリータフを主体とする火山碎屑岩類と、それら貫く安山岩、石英安山岩が発達している。本遺跡が立地している台地は、米代川右岸の段丘から北西方向に突き出した舌状台地（以下「陳場平台地」と呼ぶ）で、南北760m、東西500mと広大で、中央部で標高170m前後である。陳場平台地は、盆地内の4つの段丘のうち低い方から2番目の鳥越段丘に相当し、洪積世の十和田火山噴出物第1期の軽石流堆積物である鳥越軽石質火山灰層（約12,000年前）が上面で、その下に高市軽石質火山灰が堆積している。

第2節 歴史的環境（第1図・第1表）

鹿角地方の東西山地間には花輪盆地が広がり、そこを北流する米代川の両岸には段丘地形が発達して、右岸に段丘が多い。天戸森遺跡もこの段丘上に立地しており、この段丘面は40mの段丘崖で沖積面と区分され、いわゆる「遺跡面」と呼ばれている。鹿角市内には440ヶ所ほどの遺跡が確認されているが、これは、秋田県内で確認されている遺跡の1割強にあたり、このうちの大部分がこの「遺跡面」に立地し、その標高は150～250mである。

過去において発掘調査された市内の遺跡は大湯環状列石を中心として、天戸森遺跡を含めて70ヶ所ほどの数にのぼっている。このうち、鹿角市の東側を南北に縦走する東北縦貫自動車道建設に先立ち、昭和54年から3年間に35ヶ所の遺跡の調査が、秋田県教育委員会によって実施された。花輪地区では本遺跡の東方1kmが路線となるため、その予定地内の案内I・II遺跡などの15遺跡の発掘調査が実施された。また、県道田山・花輪線関係では前述のように、昭和57・58年に本遺跡の東側台地にある縄文時代を中心とした4遺跡（案内III～VI遺跡）の調査が実施され、さらに同じ東側では鹿角市教育委員会が平成4年に実施した分布調査で、新たに6遺跡が発見されている。このように本遺跡周辺、とりわけ東側台地に遺跡が多く存在する。

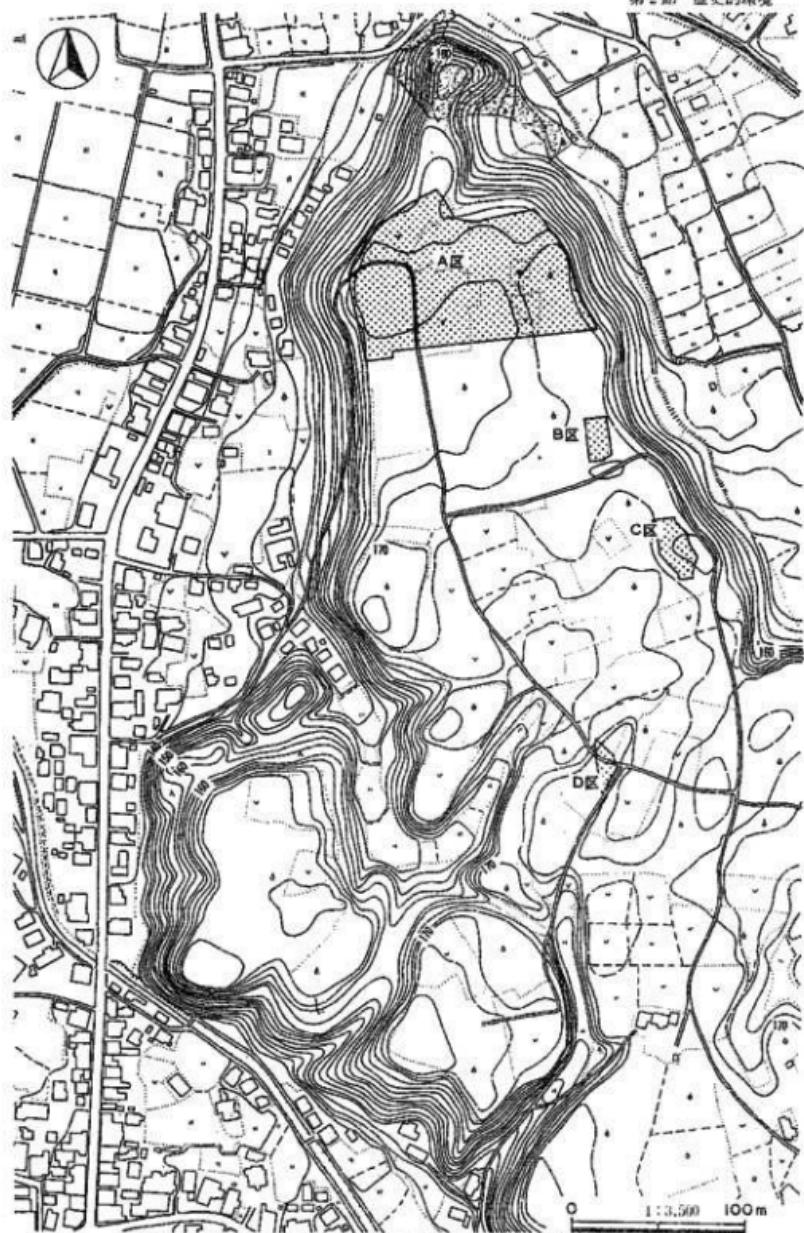
鹿角市内においては縄文時代の古い時期から人々の生活の痕跡を辿ることができる。飛鳥平遺跡からは縄文時代草創期の爪形文土器が出土し、前期の聚落跡として清水向遺跡がある。中期になると遺跡数は増大し、天戸森遺跡（鹿角市教育委員会昭和57年調査）のように140軒もの堅穴住居跡を検出した例もある。後期では、大湯環状列石や高屋館跡のように、配石を伴った遺構や掘立柱建物跡等が検出され、宗教的意味合いが強くなり、玉内遺跡からは、後期末～晩期前半の土器棺墓も検出された。統繩文・弥生時代の遺跡は比較的多いが、遺物が散発的に出土するのみで、その実態は不明な点が多い。古代～中世の遺跡については、秋田県教育委員会の東北縦貫自動車道の発掘調査や、鹿角市教育委員会の発掘調査によって資料が蓄積されてきている。

鹿角市内に所在する中世城館は、鹿角四十二（四十八）館と称されるほど数が多く、現在54ヶ所が確認されている。本遺跡と同台地上の南西には黒土館、南には花輪古館が所在し、自然の沢などの地形を巧みに利用した多郭式の館である。

第2章 遺跡の立地と環境

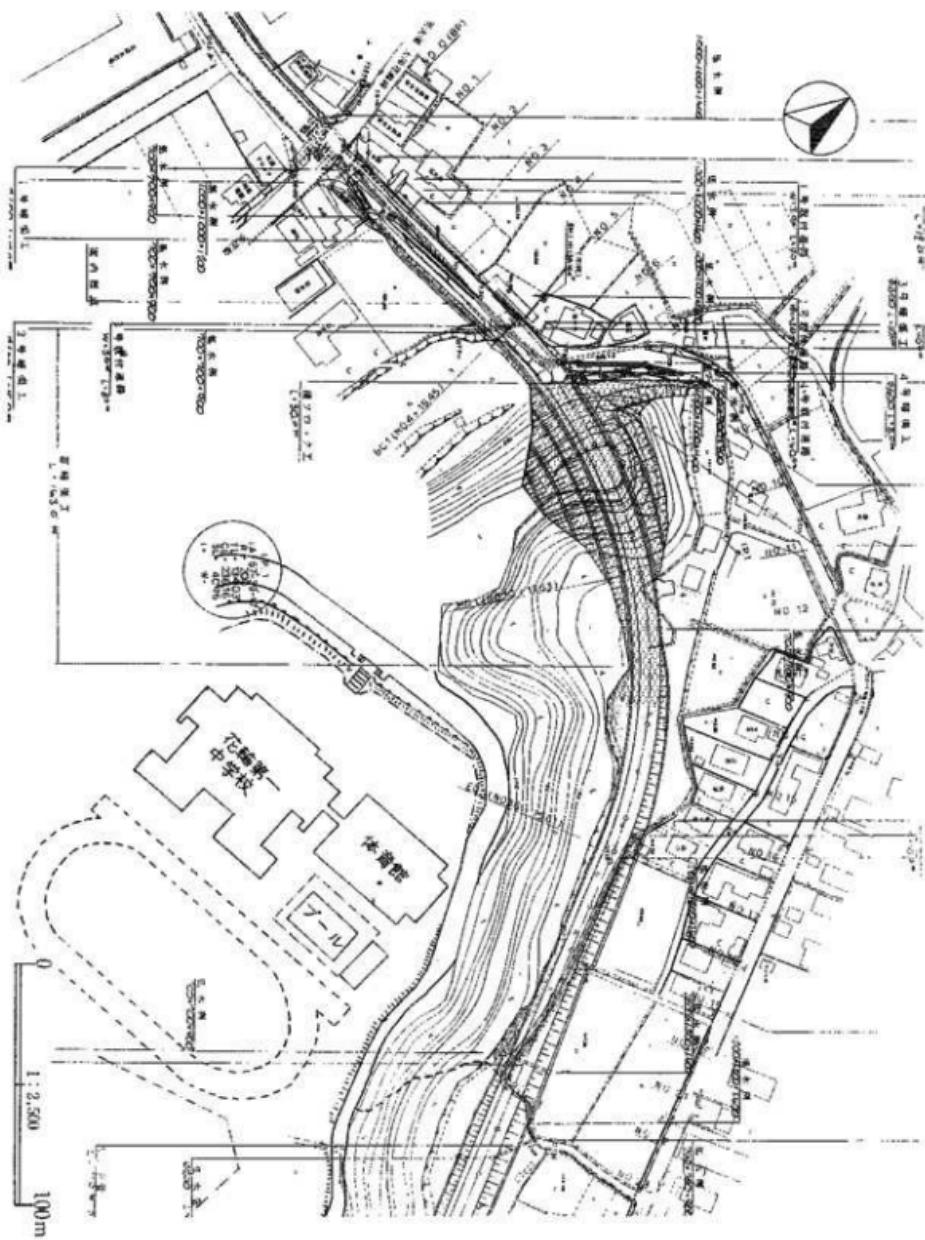
参考文献

- 井上 武・上田良一他 「秋田県総合地質図幅『花輪』」 秋田県 1973（昭和48）年
- 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図（県北版）』 1991（平成3）年
- 秋田県鹿角市教育委員会 『総合運動公園関連遺跡詳細分布調査報告書』 鹿角市文化財調査資料
46 1993（平成5）年
- 秋田県鹿角市教育委員会 『天戸森遺跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査資料26
1984（昭和59）年



天戸森遺跡発掘調査報告書(1985年)に一部加筆・A-D区は鹿角市教育委員会の調査区一

第2図 天戸森遺跡周辺地形図



第3図 工事計画図と調査区

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

天戸森遺跡は、米代川右岸のいわゆる「遺跡面」と呼ばれる、標高170mの台地上に立地している。この台地は南北760m、東西500mと広大で、通称「陳場平台地」と呼ばれている。本遺跡の一部は、昭和57年に鹿角市教育委員会によって、中学校新築移転用地にかかる区域が発掘調査され、縄文時代中期（中葉～末葉）の竪穴住居跡を140軒検出し、本県で最大規模の集落跡であることが判明している。

今回の調査区は、昭和57年調査区（A区）北端の30mほど北側に隣接し、この台地の北側縁辺部にあたる台地上部平坦面から急斜面（以下「B区」と呼ぶ）と、斜面下の北西側緩斜面から平坦部まで（以下「A区」と呼ぶ）で、調査区の長さは115m、A区が幅16m、B区が幅50mで、標高はB区上部平坦面で164.5m、A区平坦面で143.5mで、その比高差は21mである。南西側の台地下には福士川が西流し、西側は市街地となっている。東側台地下は果樹園・水田となっている所が多いが、南側と同様、最近宅地化が急速に進んでいる（第1～3図）。また、「秋田県の中世城館」によれば、B区は黒土館に含まれており、南端部には花輪古館が所在し、「陳場平台地の四周には、2～5段の帯郭が巡らされて、この広大な台地全体が一つの館として構成されていた可能性」が指摘されている。

調査区内は買収済みで、B区は杉林であったが既に伐採されおり、A区は畠・原野であった。

第2節 調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区の設定方法は、調査区内の任意の点1箇所（工事用センター杭No10）を選定し、これをグリッドの起点MA50とした。MA50から磁北を求めて、それから7度30分東へかたよった方向（真北）をグリッドの南北基線とした。この南北基線及びそれと直交する東西基線から、4m×4mのグリッドを設定し、20箇所の杭を仮レベル原点とした。グリッド杭には、東から西に向かって東西方向を表すLT・MA・・・MT・NA・・・NTというアルファベットと、南から北に向かって南北方向を表す46・47・・・50・51の2桁の数字を組み合せた記号を記入し、4m×4mの方眼杭の南東隅をグリッドの名称とした（第4図）。

遺物は、遺構外出土のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、

遺構内出土のものは、出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。基本的に堅穴住居跡は十字に土層観察用のベルトを残し、四分割して調査した。土坑などの規模の小さい遺構などは、長軸に沿って二分割して調査した。調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は、基本的には1/20の縮尺で作図した。遺物出土状況図は1/10もしくは1/20の縮尺で作図した。また、A区は調査終了後に、平板測量によってそれぞれの小区画・層位毎に調査区・等高線などを記入して地形図を作成した。さらに、今回の調査区にはB区に帯郭があり、急斜面も含まれていたことから空中写真測量による地形図の作成も行った。写真撮影は、35mm判のモノクロとリバーサルフィルムを使用した。

室内における整理は、遺構は現場で取った平・断面図より第2原図を作成し、これをトレースした。遺物は洗浄・注記の後に実測図・拓影図の作成、写真撮影を行った。

第3節 調査の経過

平成5年4月21日に鹿角土木事務所と現地立ち会いをし、調査区の再確認、プレハブ設置用地・駐車場用地・排土置場の確保、それらへの進入路の確認などについて協議した。調査は5月10日から7月30日まで実施した。

- 5月10日 本日より調査開始。発掘調査作業員説明会を現地で行った。プレハブが設置され、ベルコン・発電機などの機材も搬入され、埋蔵文化財センターからトラックで資・器材が剝離しプレハブに収納した。
- 5月11日 プレハブ内外の整備、進入路補修などを行う。
- 5月12日 ベルトコンペアードを台地下部の調査区（以下「A区」とする）にセットした。同じA区では、業者委託による表土除去を開始。
- 5月14日 A区で表土除去をしている間、台地上部（以下「B区」とする）で杉の下枝・葉の撤去と粗掘を併行した。業者委託によるグリッド杭打設を開始した。
- 5月18日 B区の粗掘を継続。範囲確認調査のトレンチを再度掘り下げ、土層断面観察と遺構検出作業を行う。B区の帯郭の粗掘も開始。表土除去・グリッド杭打設は今日で終了した。
- 5月19日 表土剥ぎが終了しているA区の粗掘を開始した。
- 5月21日 A区の層位を確認しながらⅠ・Ⅲ層を掘り下げた。この辺は台地下にあり、上部から流されてきた土砂の為、層は複雑な様相を呈し、層位を確認しながらの遺構の検出・遺物採り上げがその後難行することになる。遺物出土量がやや多くなった。

- てきた。
- 5月24日 A区中央部をⅢ層（大湯浮石層）まで掘り下げ。溝跡らしきプランが南から北に伸びているのを確認。遺跡遠景・近景の写真撮影を行う。東側の湿地帯（旧谷地部分）を、平板測量による地形図（等高線図）作成後、排土置場とした。
- 5月27日 A区斜面の粗掘を開始した。斜面下方は表土がことのほか深い。
- 6月3日 A区中央部の土坑と溝状遺構の精査をした。
- 6月7日 A区中央部～斜面のⅢ層を掘り下げ。Ⅳ層で遺物の出土が多くなり、捨場の様相を呈してきた。
- 6月14日 A区斜面のⅡ層と裾部から平坦部にかけて遺物が多く出土する地点を集中的に掘り下げた。縄文中期の遺物が主体である。
- 6月15日 A区の掘り下げ・遺構精査と併行して、B区の粗掘・遺構検出作業を進めた。
- 6月18日 A区斜面の範囲確認調査時のトレンチ掘り下げをして竪穴住居跡らしいプラン（S I 15）を確認。
- 6月23日 A区北東部の1段低い所を掘り下げ。また、東側でも一段低い場所があり、これが北東部に続く“沢”であったようだ。
- 6月28日 A区裾部のⅣ層（黒色土）からは相変わらず遺物が多い。この層で焼土を検出したので半截し、断面図作成・写真撮影を行う。また、溝跡より古い中央部の落込みからは遺物の出土が多く、床面らしい面もあり、竪穴住居跡（S I 15）の可能性も考えられた。
- 6月30日 A区斜面～平坦部の遺構精査を集中的に進めた。併せてB区の本格的な精査に備えて草刈りも始めた。作業員がまだ足りないので鹿角市シルバーハウスセンターに依頼していたが、明日より出勤するとの連絡が入った。
- 7月6日 A区斜面～裾部の遺構を集中的に精査した。裾部の捨場は遺物包含層（Ⅳ層・黒色土）の掘り下げを終了したが、その下から竪穴住居跡2軒（S I 22・23）を検出したので精査を開始した。粗掘・遺構検出作業も併行して行う。
- 7月15日 A区斜面～裾部の遺構精査が進み、竪穴住居跡の平面図作成・写真撮影など、B区では遺構精査を集中的に行う。
ここ2～3日は大雨や雷雨が多く、作業をしばしば中断したり、中止したりした。
- 7月19日 B区は竪穴住居跡・フラット状土坑の精査、斜面中段のトレンチ掘り下げを行う。
- 7月20日 A区では残っていた竪穴住居跡の炉跡や柱穴の精査と平面図の補足をし、全体写真撮影を行う。B区では柱穴の精査、斜面中段の粗掘も開始した。

第3章 発掘調査の要綱

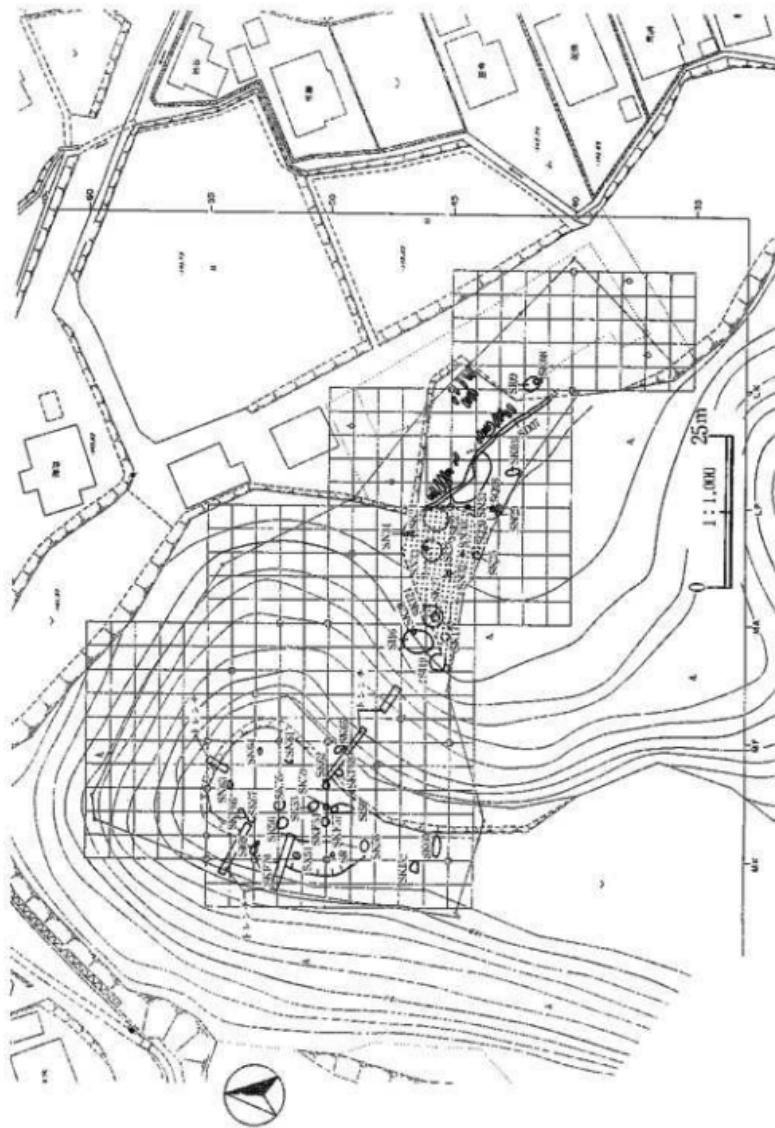
- 7月23日 A区ではベルコン列の下になっていた調査区端部の粗査を開始し、B区は遺構精査を継続した。
- 7月26日 B区の土坑・柱穴などの精査を継続し、新たに平坦部の東端部付近で検出している土坑やフラスコ状土坑（SK65、SKF68）の精査を始めた。
- 7月27日 遺構精査と併行して調査区外へのベルコンの運搬などの撤去準備を行う。
- 7月28日 柱穴を精査していて検出した土坑を半截し、断面図作成・写真撮影などを行う。
- 7月30日 残っていた遺構の掘り下げ・平面図作成を行う。また、写真測量のための空中写真撮影も行った。併せて資・器材の洗浄・梱包、運搬のうち関係者・機関にあいさつ回りをして発掘調査の現場作業を全て終了した。
- この後、8月から秋田県埋蔵文化財センターで遺物・図面の整理作業を行い、報告書を作成した。

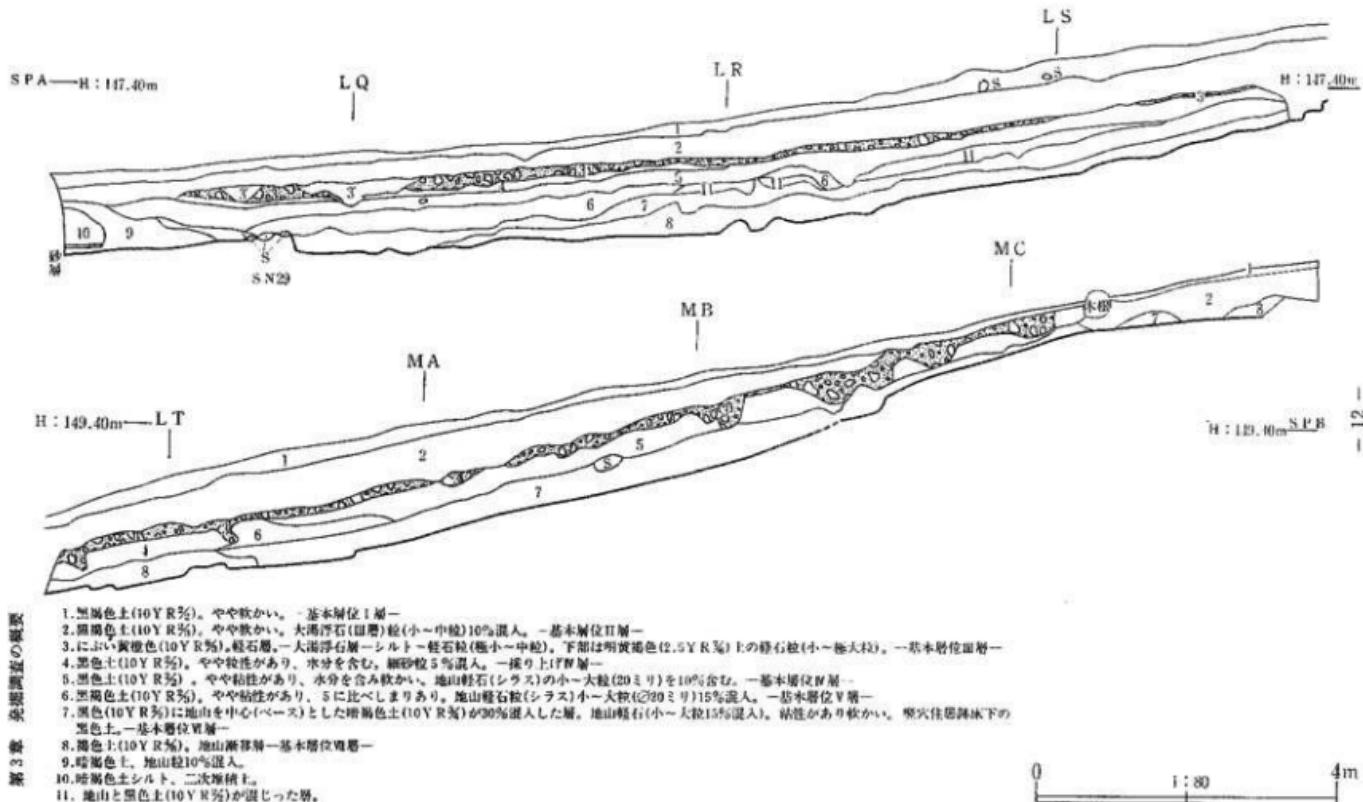
参考文献

秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年

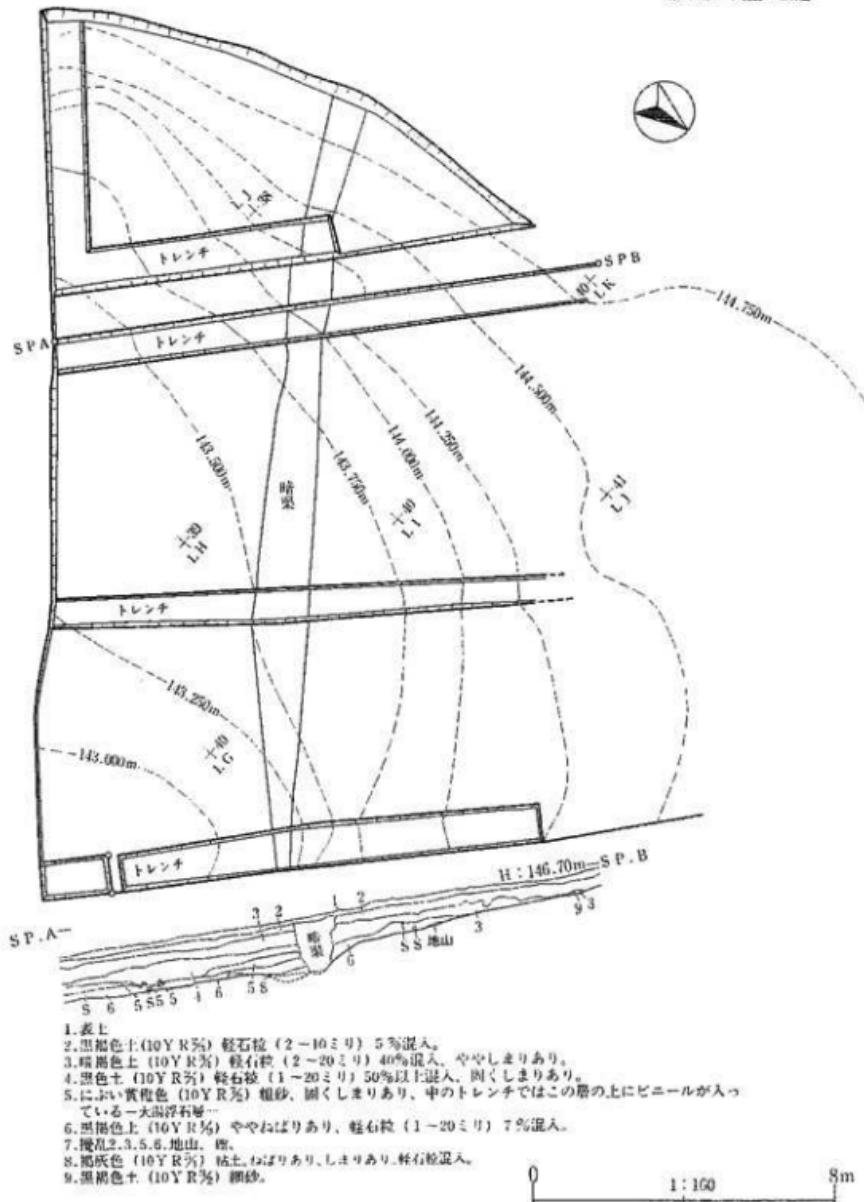
(スクリーン部分は折りたたみ)

第4図 造林記置図(附図)





第5図 A区 基本層位図（調査区南端のライン）



第6図 A区 南東端地形図



第7図 B区中央部 地形横断図（南東～北西）

第4章 調査の記録

第1節 基本層序

今回の調査区は、前述したようにB区の上部平坦面とA区の平坦面との比高差が21mもあり、地形が大きく異なる。そのため、両地区の基本層序を分けて以下に記す。

A区は、台地裾部の緩斜面から平坦部の間で、南・西側急斜面から流れた土砂が厚く堆積している。調査区の南端部の東～西ラインの土層断面（第5図）の観察によれば表土から地山上面までの層厚は西寄りの緩斜面（MC45グリッド杭付近）では0.7m前後である。東側に下った緩斜面～平坦面（L0～LTライン付近）では最高1.5m前後と層厚が増し、特にIV層中からは多くの遺物が出土し、捨て場となっていた。この付近の堅穴住居跡（SII15・22・23）などの埋土上位にはIV層が遺物とともに流入し、住居跡廃棄後に捨て場が形成されたことがわかる。以下では最も層厚のあるLR44グリッド杭付近の層序について記す。なお、各層の詳細については基本層序図（第5図）に記してあるので、ここでは土色と層厚を簡単に記す。

第I層 黒褐色土 表土 層厚8～10cm

第II層 黒褐色土 層厚14～42cm

第III層 にぶい黄褐色土 大湯浮石一層厚6～28cm

第IV層 黒色土 繩文時代の遺物包含層一層厚15～34cm

第V層 黒褐色土 繩文時代の遺物包含層一層厚12～34cm

第VI層 黒色土 層厚10～34cm

第VII層 褐色土 地山漸移層一層厚12～28cm

地山 黄褐色土 鳥越軽石質火山灰層

B区は旧畠地であるが、地山から上の土が杉林伐採後の杉材搬出時に重機によって下枝とともにほとんどが斜面に押されたために、いわゆる「表土」は約10～15cm残されていただけであった。表土は地山と暗褐色土の混土層である。

第2節 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、縄文時代の前期・中期・後期の土器・石器と土製品・石製品および弥生時代の土器、江戸時代以降の陶磁器などが出土している。出土した遺物量は大コンテナ（59cm×38.6cm×20.7cm）で60箱で、その出土地点・層名は、土器については、器形を復原できたもの

は観察表中に、破片については挿図中に記入した。また、石器は全ての点数を観察表中に記入した。

遺構は、縄文時代の堅穴住居跡8軒、堅穴状遺構2基、土坑20基、配石遺構3基、焼土遺構10基、平安時代以降の帯郭、柱穴様ピット、溝状遺構を検出した。以下では、A・B毎に堅穴住居跡、堅穴状遺構、土坑、配石遺構、焼土遺構、帯郭、柱穴様ピット、溝状遺構の順番に記述する。なお、遺構実測図や遺物分布図中に記している遺物出土地点の土器は「R P」、石器類は「R Q」とし、柱穴は「P」と略称した。たとえば土器Iは「R P 1」、柱穴Iは「P 1」とした。また、石器類は、遺物実測図の番号の前に「S」を付して、土器と区別して記述する。図版中の番号もこれにしたがい、実測図と同一番号に統一している。

1 遺物の分類

縄文時代の土器の分類は、遺構内と施場の、ある程度器形・文様構成のわかるものを対象として、時期毎に群に分け、その中で器種毎に口縁部を中心に器形・文様構成から類別し、文様の施文手法などの差異によって細分した。なお、主体を占める中期の土器をI群とし、わずかに出土した前期・後期の土器をそれぞれII群、III群とした。また、弥生時代の土器は5点と僅少であるがIV群とし、器形・文様構成から分類した。石器の分類も、器種毎に群分けしたあと、細分した。ここでは先に遺物の分類基準を示し、後に遺構とその出土遺物について記述する。

(1) 土器

I群土器 縄文時代中期の土器である。

深鉢形土器

1類 波状口縁で、胴部上半から口縁部が外反する円筒形を呈し、胴部から口縁部に貼付した幾何学状の細い粘土紐上に燃紐の側面圧痕文を施文し、粘土紐の間に燃紐の圧痕による瓜形文や刺突文を施文した土器。

2類 平口縁で、やや内湾しながら立ち上がり、口頸部でやや外反する器形である。口頸部には口縁部に平行に粘土紐を貼付して隆帯とし、その隆帯上に竹管状の連続刺突文を施文した土器。口縁部は無文となる。

3類 キャリバー形で、胴部に隆沈線による懸垂文・有棘文を施文した土器。

4類 波状口縁で、肥厚した口縁部に刻目あるいは燃紐の側面圧痕文を施文した土器。器形や沈線文の有無等から細分した。

a種 円筒形を呈し、口縁部下に横位に平行沈線文、その下に沈線で変形胸骨文を施文した土器。

b種 胴部半ばからほぼ真っすぐ立ち上がり、口縁部が外反し、横位に弧状の沈線文を施文

した土器。

c種 脊部半ばからほぼ真っすぐ立ち上がり、口縁部が外反し、胴部に繩文を施文し、沈線を施文していない土器。

5類 波状口縁で、胴部上半でやや内湾し、頸部からわずかに外反する器形である。口縁部には凹線文を施文し、波頂部は渦巻文となる。

a種 繩文地で、胴部上半に平行な沈線や曲線文を施文した土器。

b種 繩文地で、胴部上半に平行な沈線と山形状の沈線を施文した土器。

c種 脊部に繩文のみを施文した土器。

6類 波状口縁で肥厚した口縁部は凹線文風にややくぼみ、波頂部には円形文を施文している。胴部に繩文を施文した土器。

7類 波状口縁で、わずかに外傾しながら立ち上がる器形である。波頂部下には、円形渦巻曲線文が垂下した土器。

8類 平口縁で、底部から脊部半ばまで丸みをもち、脊部半ばから口縁部まではぼまっすぐ立ち上がる器形で、連続刺突文を施文した土器。

a種 口頭部に1条の沈線と2列の連続刺突文が横位に展開し、その沈線下に弧状文と垂下する円形渦巻曲線文を施文した土器。沈線は浅く細い。

b種 口頭部に2列の連続刺突文を施文した土器。

9類 平口縁で、胴部中央に最大径があり、胴部中央から内湾したまま口縁部に至る器形。口縁部は折返し口縁風にやや肥厚し、胴部には継位の長窄円形の区画文、その内外に竹管文を施文した土器。沈線は細く浅い。

a種 口縁部に繩文を施文した土器。

b種 口縁部が無文の土器。

10類 平口縁で、胴部上半に最大径があり、胴部上半から口縁部がやや内湾したまま立ち上がる器形の土器。

11類 脊部上半に最大径があり、胴部上半から内湾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する器形である。胴部上半が無文部となる。

a種 最大径のある部位に横位の沈線を巡らし、沈線下には繩文地に細く浅い沈線を垂下させた上器。

b種 最大径のある部位に横位の沈線を巡らし、その下位には繩文地に細く浅い沈線を垂下させている。無文の上半部にはボタン状突起を貼付し、その周囲に連続刺突文を施文した上器。

c種 最大径のある部位より下方に斜行繩文を施文し、上半部が無文部となる土器。

12類 波状口縁で、「匁」文や倒卵形の窄円文を施文し、その文様間もしくは文様内を磨り消

している土器である。器形によって4細分した。

- a 種 胴部上半から口縁部にかけてやや内傾したあと、大きく外反する器形。
- b 種 胴部は直線的に立ち上がり、口縁部が外反する器形。
- c 種 底部からやや外傾気味に直線的に立ち上がり、胴部上半で緩く内湾しながら口縁部にいたる器形。

d 種 底部からやや外傾気味に直線的に立ち上がり、胴部上半でわずかに内湾しながら直線的に口縁部にいたる器形。

13類 沈線や隆線により横に広がる「S」状文や波状文を施文し、その文様間もしくは文様内を磨り消すか繩文を充填した土器。

- a 種 波状口縁で、胴部に波状文や「S」状文を施文した土器。
- b 種 平口縁で、胴部上半に波状文や「S」状文を施文した土器。

14類 地文以外に文様を有しない土器を一括した。平口縁で斜行繩文のものが多い。胴部下半が欠損しているものが多いが、現存部の器形や地文等から10細分した。

- a 種 胴中央部に最大径があり、胴中央部から胴部上半が内湾し、口縁部が外反する器形。
- b 種 胴中央部がやや張り、胴部上半で内湾し、口縁部が外反する器形で、繩文を施文した土器。
- c 種 胴部上半と口縁部の径がほぼ同じで、底部から緩やかに外傾しながら立ち上がり、胴部上半から内湾し、口縁部が「く」字状に外反する器形。
- d 種 小波状口縁で、胴部上半がまっすぐ立ち上がり、口縁部がわずかに外反する器形。
- e 種 胴部上半から口縁部にかけてわずかに外傾しながら立ち上がる器形。
- f 種 胴部上半から口縁部にかけてほぼまっすぐ立ち上がる器形。
- g 種 底部から口縁部まで外傾しながらほぼ直線的に立ち上がる器形で、口縁部が折返し風に肥厚する小型土器。
- h 種 口縁部が内湾ぎみに立ち上がる器形。
- i 種 口縁部が内傾する器形。
- j 種 口縁部が直線的に外に開く器形で、無文の小型土器。

浅鉢形土器

1類 小波状口縁で、隆沈線による渦巻文と刻目を施文した土器。

壺形土器

1類 平口縁で、口縁部に隆帯を貼付した土器。小破片であるが、胴部が繩文と無文のものが

ある。

- 2類 沈線や陸線により梢円文や曲線的な文様を施文した赤色塗彩の土器。
- 3類 波状口縁の把手付土器。
- 4類 平口縁で無文地に陸帯を貼付した土器。

II群土器 繩文時代前期の深鉢形土器。

- 1類 0段多条の羽状繩文を施文した土器。
- 2類 不整撚糸文や葺瓦状撚糸文を施文した土器。

III群土器 繩文時代後期初頭の土器。

細かく、細い沈線で曲線的な文様を施文した土器。

IV群土器 弥生時代の土器。0段撚りの纏巻繩文を地文として施文した土器。

- 1類 波状口縁で、口縁部に浮線波状文を施文した土器。
- 2類 平口縁で、口縁部から頸部にかけて纏文部と無文部を横位の帯状にして交互に配置した土器。
- 3類 2本1組の沈線を横位に2段施文した土器。
- 4類 地文のみの土器。

以上のように土器を分類したが、I群土器は、深鉢形土器の1類が円筒上層c式に、3類が大木8b式、4類a・b種が円筒上層c式、5類が複林式に比定される。6類は口縁部が凹線文風で、波頂部に円形文を施文しており、複林式の範疇に入ると考えられる。7・8類は中の平Ⅱ式、9~11類は最花式・中の平Ⅲ式、12類は大木9式、13類は大木10式に比定される。

7~11類は從来いわれている型式のそれぞれの特徴に比べ、器形や施文法に違ひのみられるものもあり、型式名についてはなお検討の余地がある。II群上器の1類は前期初頭の長七谷地第Ⅱ群の仲間で、2類は前前期前葉の大木2a式の仲間と考えられる。III群土器は十腰内1式土器である。IV群土器のうち、1類と2類は広義の天王山式と考えられる。

(2) 石器 遺構内外の石器は形態・調整技法などから下記のように分類した。

剥片石器・石斧類

石質は大多数が頁岩であるが、緑色凝灰岩・鉄石英・綠泥片岩を素材としているものもある。

石鎌 形態から、I類：凹基無茎式、II類：平基無茎式、III類：凸基有茎式、IV類：尖基式に4細分した。

石匙 両側縁から抉りを入れてつまみ部を作出し、片面からの加撃によって刃部が作られた石器で、刃部とつまみの中軸線の交わる角度によってI類：縱型 I-A類：ほぼ平行する直線的な2つの側縁をもつもの、I-B類：直線的な1側縁とやや曲線的な側縁をもち一端が尖るもの、II類：横型 刃部が曲線的なもの、III類：斜型 III-A類：刃部が直線的なもの、III-B類：刃部が曲線的なものに細分した。

石錐 断面が、菱形・三角形・凸レンズ状を呈する錐部をもっているが、形態からI類：一端が細くなる剥片を利用して、二次調整を両側縁の表裏面、もしくは背面にのみ施したもの、II類：縱長で一端がやや細くなる剥片を利用して、二次調整を両側縁の背面、もしくは主要剝離面の1側縁にのみ施したもの、III類：あまり形の整っていない三角形様の剥片の2～3辺に二次調整を加えて錐部を作出したものに細分した。

有撮石器 尖頭器の基部に撮（つまみ）のついた形態で、うすい凸レンズ状の断面形を呈し、表裏面のほぼ全面に二次調整を施す。

石鎧 平面形が短冊形・梢円形などを呈し、一端に刃部が作出された石器である。I類：平面形が梢円形を呈し、九刃・片刃、II類：平面形が梢円形を呈し丸刃・両刃、III類：平面形が短冊形を呈し直刃・片刃に細分した。

搔器 分厚い剥片に急角度の刃部を作出したもので、片面調整が多い。I類：裏面（大部分が主要剝離面）が反っているもの、II類：裏面（大部分が主要剝離面）が反っていないものに細分した。

削器 大小の剥片の側縁に連續的な二次調整によって刃部を作出した石器で、二次調整は片面からだけのものが圧倒的に多いが、刃部の形状などからI類：縱長の剥片の側縁に刃部を作出したもの、II類：不整な梢円形・円形を呈する剥片の側縁に弧状の刃部を作出したもの、III類：不定形状剥片の1ないし2側縁に緩い弧状の刃部を作出したものに細分した。

ピエス・エスキュー 剥片の上下端に加撃して、上下辺が平行になるようにしたものである。

異形石器 三日月形を呈した小型のもので、両面とも丁寧な調整剝離を施しているもの。

磨製石斧 刃部の形状から、I類：円刃・両凸刃、II類：円刃・弱凸強凸片刃に細分した。

砾石器類

石質は大多数が安山岩であるが、凝灰岩・玄武岩・流紋岩・砂岩を素材としているものもあ

る。

半円状扁平打製石器 半円状あるいは細長く、扁平な礫を素材とし、下辺部に機能面を要している石器である。I類：素材の全縁辺を打ち欠いたもの、II類：素材の1縁辺を打ち欠いて刃部を作出したものに細分した。

石錘 長楕円形の素材の長軸に抉りをもつものである。

石棒 細長い素材の全面に擦りを加えて成形したもので、断面形はほぼ円形である。

凹石 磨材の面に敲打による凹みをもつもので、I-A類：凹面が両面のもの、I-B類：凹面が両面で、周縁に擦った痕跡をもつもの、II-A類：凹面が片面のみで、周縁に擦った痕跡をもつもの、II-B類：凹面が片面のみで、一端に敲打痕をもつものに細分した。

擦石 ほぼ椭円形もしくは長方形を呈する礫の表面全てが擦られているものである。I-A類：椭円形の素材全面に擦った痕跡をもつもの、I-B類：椭円形の素材全面に擦った痕跡をもち、長軸の一端に敲打痕をもつもの、II類：長方形の素材全面に擦った痕跡をもつものに細分した。

石皿 平面形が略方形のやや薄手の自然石の片面にわずかな凹みをもっているものである。

台石 大きな河原石を素材として「作業台」的に使用したものと考えられる。

敲石 細長い自然礫の一端に敲打痕を有するものである。

2 繩文時代の遺構・遺物

遺物が出土していない遺構もあるが、遺構の形態、検出した層位、周辺の出土土器や遺構の分布などから縄文時代に属すると判断した遺構もある。

(1) A区の遺構・遺物

①堅穴住居跡

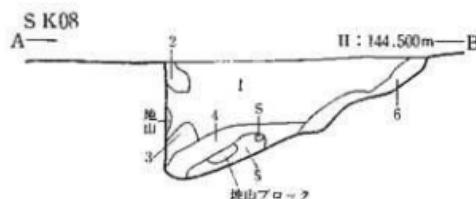
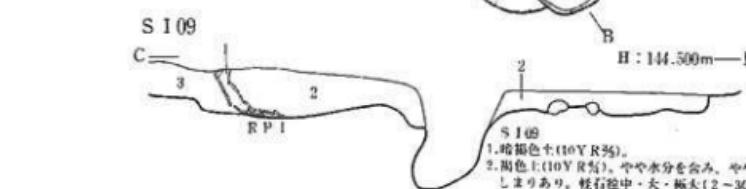
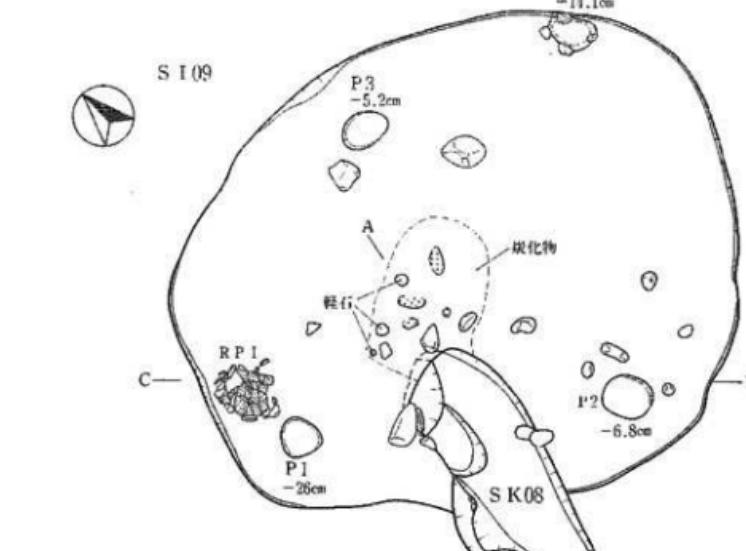
S109堅穴住居跡（第8図、図版3）

L J41グリッドに位置し、V層で確認した。SK08と重複するが、本遺構が古い。平面形は楕円形で、規模は長軸3.96m、短軸3.41mで、面積は10.1m²である。

壁は、斜面寄りの南西側で残りがよく、北側の壁はわずかに残る。既高は南西側で0.32m、北側で0.13mである。床面は平坦でしまっている。既溝は検出されなかった。柱穴は、壁寄りに4本（P1～P4）配置されている。柱の径は0.22～0.32mで、深さは0.06～0.23mである。

本遺構内の床面中央部からやや西寄りに、1.07×0.68mの範囲で炭化物が広がり、その中に焼土塊や、長さが0.09～0.14mの扁平な礫が散在していることから、この位置に炉が構築されていた可能性が高い。

遺物は土器が4点出土した。土器（第16図）の1は波状口縁で、肥厚した口縁部は凹線文風

P4
-14.1cm

S K 08

1. 黒褐色土(10Y R 5%)。やや水分を含み軟かくやや粘性あり。地山鉄石の小～大粒10%混入。
2. 黑褐色土(10Y R 5%)。鉄石の小～中粒10%混入。
3. 2と同じ色。やや水分を含み軟かい。鉄石の小～中粒5%混入。
4. 黑褐色土(7.5Y R 5%)。水分を多く含み軟かく粘性あり。鉄石の小粒5%混入。
5. 黑褐色土(10Y R 5%)。水分を多く含み軟かく粘性あり。鉄石の小～中粒5%混入。
6. 黑褐色土(10Y R 5%)。ややしまりあり。鉄石の小～中粒5%混入。



第8図 A区 S I 09・S K 08

にややくぼみ、波頂部には円形文を施文している（I-6類）。床面上から出土した。埋土中からは2~4が出土した。2は無文で、3は横下する平行沈線を施文している。4は沈線による曲線文を施文した土器である。

遺構の構築時期は、出土土器から、櫻林式期と思われる。

S I 15堅穴住居跡（第9図、図版3）

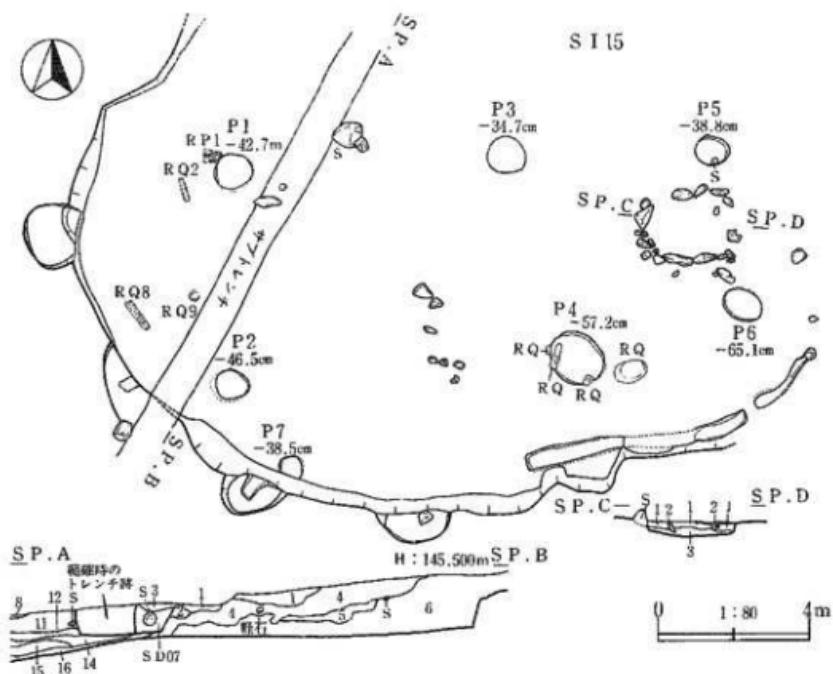
LM43・44、LM43・44、LO43・44グリッドに位置し、V層で確認した。SD07と重複しているが、本遺構が古い。北東側半分の壁は消失しているが、平面形は長椭円形で、規模は長軸10.3mである。

壁高は南側で0.65mである。床面は平坦であるが、しまりがない。壁溝は南東部に4.0m検出され、その幅は0.10~0.26mである。柱穴は、7本検出された。主柱穴はP1~P6と考えられ、その規模は0.39~0.76mである。

炉は南東側の櫻寄りP5とP6の間に石開炉を検出した。がの平面形は椭円形で、その規模は長軸1.40m、短軸1.05mである。

本遺構外の西~南壁の外縁部3ヶ所に、平面形が半月形、断面形「浅皿」状の凹みがある。その規模は径0.86~0.92m、深さ0.12~0.26mであるが、その用途・機能は不明である。

遺物は土器が324点、石器・剣片が80点出土した。土器（第16~18図）の5・6は波状口縁で、胴部上半から口縁部が外反する円筒形を呈し、胴部から口縁部に貼付した幾何学状の繩、粘土紐上に燃紐の側面圧痕文を施文し、粘土紐の間に燃紐の圧痕による瓜形文や刺突文を施文した土器である（I-1類）。7は底部からやや外傾気味に直線的に立ち上がり、胴部上半で緩く内窪しながら口縁部にいたる器形で文様間の地文を磨り消した土器である（I-12-c類）。8は平口縁で、胴部上半に最大径があり、胴部上半から口縁部がやや内窪したまま立ち上がる器形で、繩文地で、口縁部と胴部下半が無文部となる土器である（I-10類）。埋土中と床面上から出土した。その他、14~21・23~28の小破片も出土している。埋土中からの出土が多いが、9・14・18は床面上やビット中からの出土である。9は隆線の上下を沈線で区画し、14は横位の2条の平行沈線下に、沈線を弧状に施文している土器である。18は波状口縁で、「匂」文内に刻目や網文を充填し、その周間を無文とした土器である。石器は、石鏃、石匙、有撮石器、削器、ビエス・エスキュー、敲石と微小剝離痕のある剣片である（第24~26図）。石鏃は2点出土し、S1は凹基無茎式（1類）、S2は尖基式（N類）である。石匙は2点で、S3は擬型ではなく平行する直線的な2つの側縁をもち（I-A類）、S4は横型で刃部が曲線的である。石鏃は3点で、S6は一端が細くなる剣片を利用して、二次調整を1側縁の表裏面にのみ施したもの（1類）、S7・S8は綫長で一端がやや細くなる剣片を利用して、二次調整を主要剝離面の1側縁にのみ施したもの（2類）である。有撮石器は1点（S9）出土しており、



- S I 15
 1.褐色土(10Y R 5%).火燐浮石、明黃褐色土(10Y R 5%)
 まじり。
 2.褐色褐色土(7.5Y R 5%).軽石、(30ミリ)1ヶ混入。や
 やしまりなし。
 3.褐色土(10Y R 5%),やや固いしまり。
 4.褐色土(7.5Y R 5%),軽石、(1~50ミリ)40%混入。
 ややしまりあり。
 5.暗褐色土(10Y R 5%),軽石粒、(2~10ミリ)30%混入。
 6.褐色土(10Y R 5%),軽石、(2~50ミリ)30%混入。
 7.黒褐色土(10Y R 5%),しまりあり。
 11.黒褐色土(10Y R 5%),しまりあり。鐵(5ミリ位)混
 入。
 12.褐色土(7.5Y R 5%),粘性あり。固くしまりあり。
 褐色土(7.5Y R 5%)混入。軽石粒(1~5ミリ)40%混入。
 14.褐色土(10Y R 5%),軽石粒(2~20ミリ)40%混入。や
 や粘性あり。しまりあり。
 15.黒褐色土(10Y R 5%),軽石粒(1~10ミリ)30%混入。
 ややしまりなし。
 16.明黃褐色土(10Y R 5%),輕石粒(2~5ミリ)7%混入。
 やや粘性あり。しまりなし。

- S I 15^b
 1.純土、明黃褐色土(7.5Y R 5%)。しまっているがやや粘性
 あり。
 2.黒褐色土(10Y R 5%),一根の根乱。
 3.暗褐色土(10Y R 5%),地山小~中粒30%、燒土中粒50%
 混入。

第9図 A区 S I 15

尖頭器の基部に撮（つまみ）のついた形態で、うすい凸レンズ状の断面形を呈し、裏裏面のはば全面に二次調整を施したものである。前器は12点出土しており、S10・S11は縦長の剥片の側縁に刃部を作出したもの（I類）、S12～S14は不整な橢円形・円形を呈する剥片の側縁に弧状の刃部を作出したもの（II類）、S15～S20・S22は不定形状剥片の1ないし2側縁に直線的な緩い弧状の刃部を作出したもの（III類）である。ビエス・エスキューも1点出土しており、S21は剥片の上下端に加擊して、上下辺が平行になるようにしたものである。微小剝離痕のある剥片は4点である（S23～S26）。敲石は1点（S27）で、分厚い剥片の一端に敲打痕を残している。

遺構の構築時期は、出土土器から、縄文時代中期後半と思われる。

S116堅穴住居跡（第10図、図版4）

MA44・45、MB44・45グリッドに位置し、N層で確認した。SK28と重複しているが、本遺構が新しい。平面形は橢円形で、規模は長軸5.02m、短軸4.38mで、面積は15.4m²である。

壁は斜面で構築されているため西壁が高い。標高は西壁で0.76m、東壁で0.09mである。床面は平坦でしまっている。柱穴は、主柱穴と思われるものが4本（P1～P4）、北壁寄りと炉周辺に配置されている。規模は径0.23～0.30m、深さ0.30～0.41mである。他に支柱穴と思われるものが、炉周辺に8本配置されている。そのうちP5・6はやや規模が大きく、径0.20～0.21m、深さ0.16～0.25mで、他のものは径0.10～0.15m、深さ0.06～0.19mである。

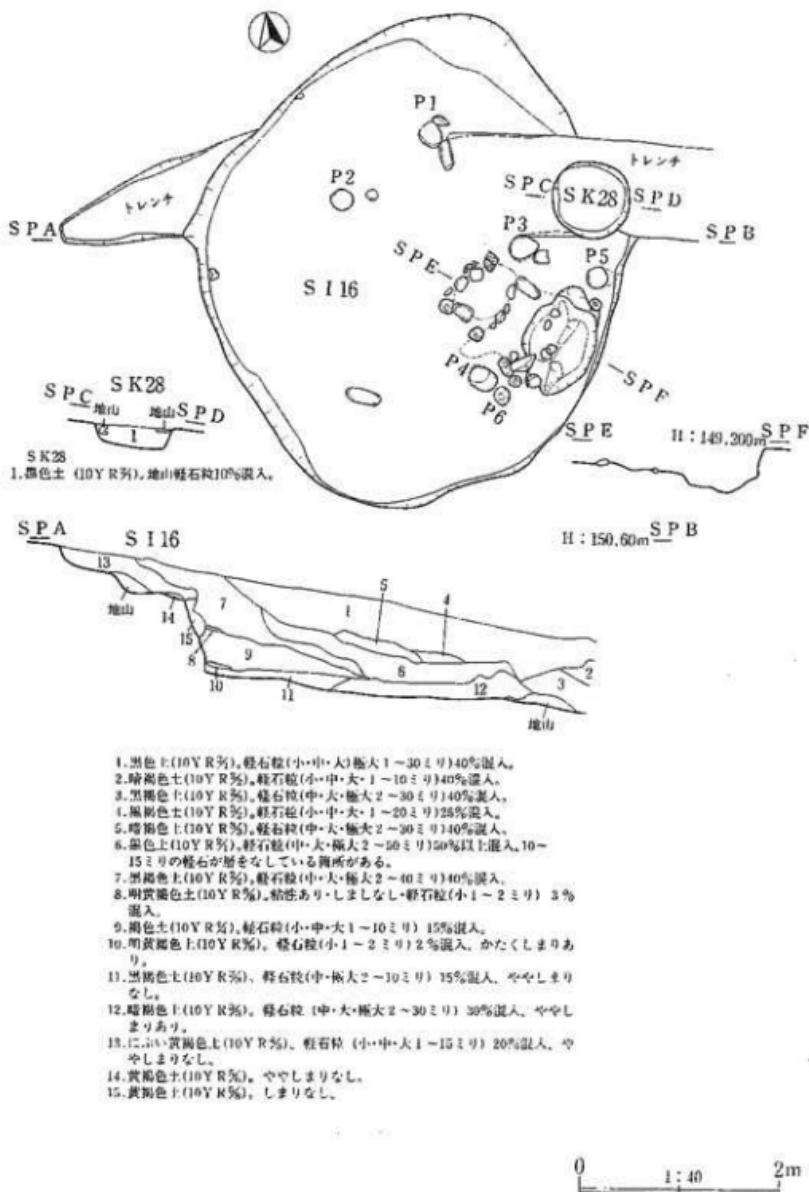
炉は東側の壁寄りP3とP6の間に「右開複式炉」を検出した。炉の平面形は橢円形で、その規模は長軸0.69m、短軸0.47m、長さ0.07～0.21mの扁平な礫を配している。掘込部の規模は長軸1.13m、短軸0.73mである。

遺物は埋土から土器が187点出土した。土器（第18～20図）の29は円筒形を呈し、口縁部下に横位に平行沈線文、その下に沈線で変形胸骨文を施文した土器で、埋土下位より出土した（I-4-a類）。30・31は平口縁で、胴部中央に最大径があり、胴部には継位の長楕円形の区画文、区画文の間には竹管文を施文している。口縁部には縄文を施文している土器である（I-9-a類）。34・35は平口縁で、胴部上半に「S」状文を施文した土器である（I-13-b類）。30～36は炉内・外から出土した。38は底部から口縁部まで外傾しながらほぼ直線的に立ち上がる器形である（I-14-G類）。39は波状口縁で、口縁部には凹線文を施文し、波頂部は渦巻文となる。胴部には縄文を施文した土器である（I-5-c類）。その他40～48も埋土から出土した。

遺構の構築時期は、縄文時代中期の大木10式期と考えられる。

S119堅穴住居跡（第11図、図版4）

MB45グリッドに位置し、N層で確認した。平面形は橢円形で、規模は長軸2.58m、短軸2.18



第10図 S I 16・SK 28

mで、面積は4.2m²である。

壁は、斜面に構築されているため、南東側の壁はない。壁高は西側で0.64mである。床面は平坦でややしまっている。柱穴は、北壁際の床面に1本配置されている。径は0.22m、深さ0.16mである。

炉は南東側に石門炉を検出した。炉の平面形は東側が開口する「コ」字形で、その規模は1辺0.50mである。

遺物は土器が床面上から10点出土した。土器（第20図）の49は波状口縁を呈し、胴部に波状文を施した土器（I-13-a類）で床面から出土した。その他に、50～52の土器底部が床面や埋土中から出土している。

S I 22堅穴住居跡（第12図、図版5）

L P 45グリッドに位置し、V層で確認した。S D07と重複し、本遺構が古い。平面形は梢円形で、規模は長軸4.75m、短軸3.90mで、面積は15.8m²である。

壁は、S D07と重複しているため北東側の壁はない。壁高は西側で0.66mである。床面はやや凹凸があり、軟らかい。柱穴は、中央部やや壁寄りに4本（P 1～P 4）配置されている。その規模は径0.22～0.26m、深さ0.23～0.54mである。

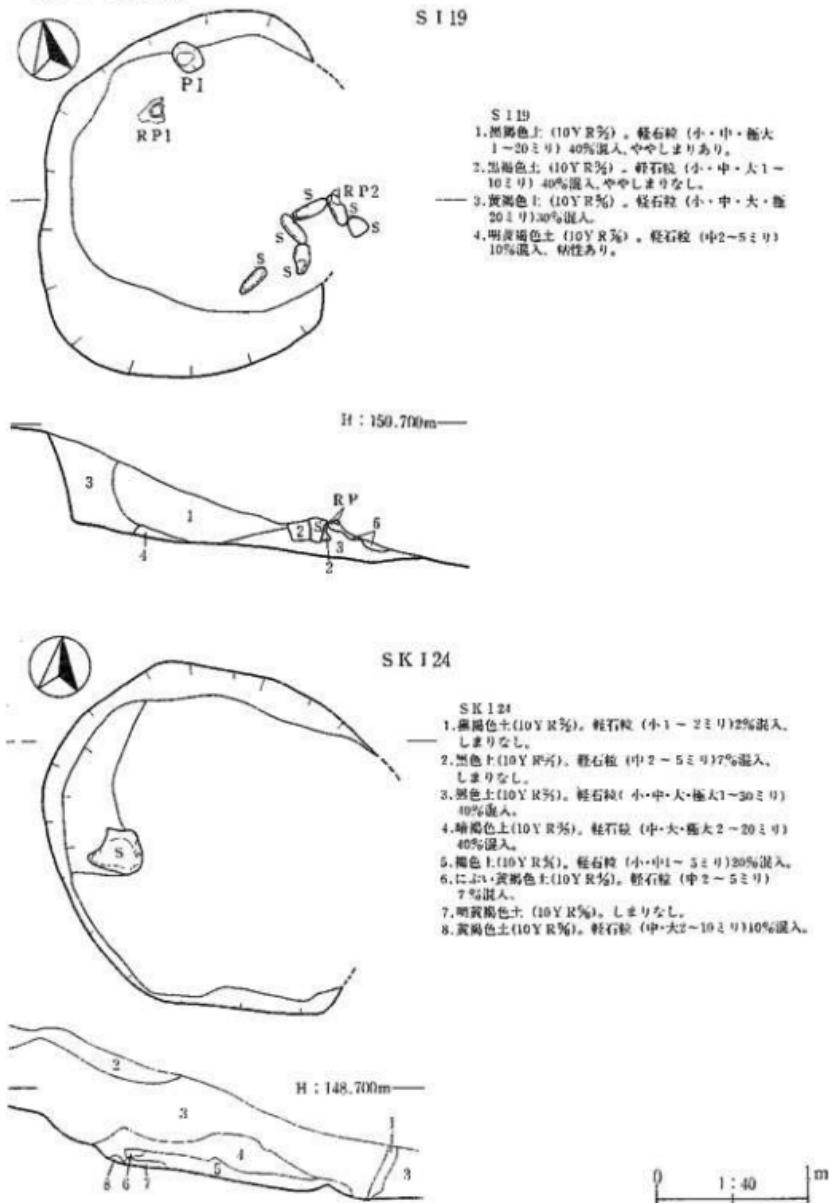
炉は北東側の壁寄りP 3とP 4の間に「石圓復式炉」を検出した。炉の平面形は梢円形で、その規模は長軸0.74m、短軸0.50mで、0.11～0.30mの扁平な縁を配している。掘込部の規模は、長軸0.59m、短軸0.35mである。

遺物は土器・土製品が305点、石器・剝片が21点出土した。土器（第22図）の53は小波状口縁で、胴部上半がまっすぐ立ち上がり、口縁部がわずかに外反する器形である（I-14-e類）。55は頸部から上が無文部で内傾している。58は縄文地で口縁部がやや肥厚し、無文となるものである。60は胴部に縦位の梢円形の区画文を施している土器で、63は曲線的な文様（梢円形文か）内に竹管文を施している土器である。その他、54～65、ミニチュア土器（66）、68・69・71が出土している。上製品では、円盤状土製品（67）（第21図）が出土した。石器は石鏃、削器、微小剝離痕のある剝片である（第27図）。石鏃は1点で、S 28は平基無茎式（II類）である。削器は6点で、S 29・S 32・S 33は縦長の剝片の側縁に刃部を作出したもの（I類）、S 34・S 35は不整な梢円形・円形を呈する剝片の側縁に弧状の刃部を作出したもの（II類）、S 30は不定形剝片の両面の2側縁に緩い弧状の刃部を作出したもの（III類）である。他に微小剝離痕のある剝片が1点（S 31）ある。

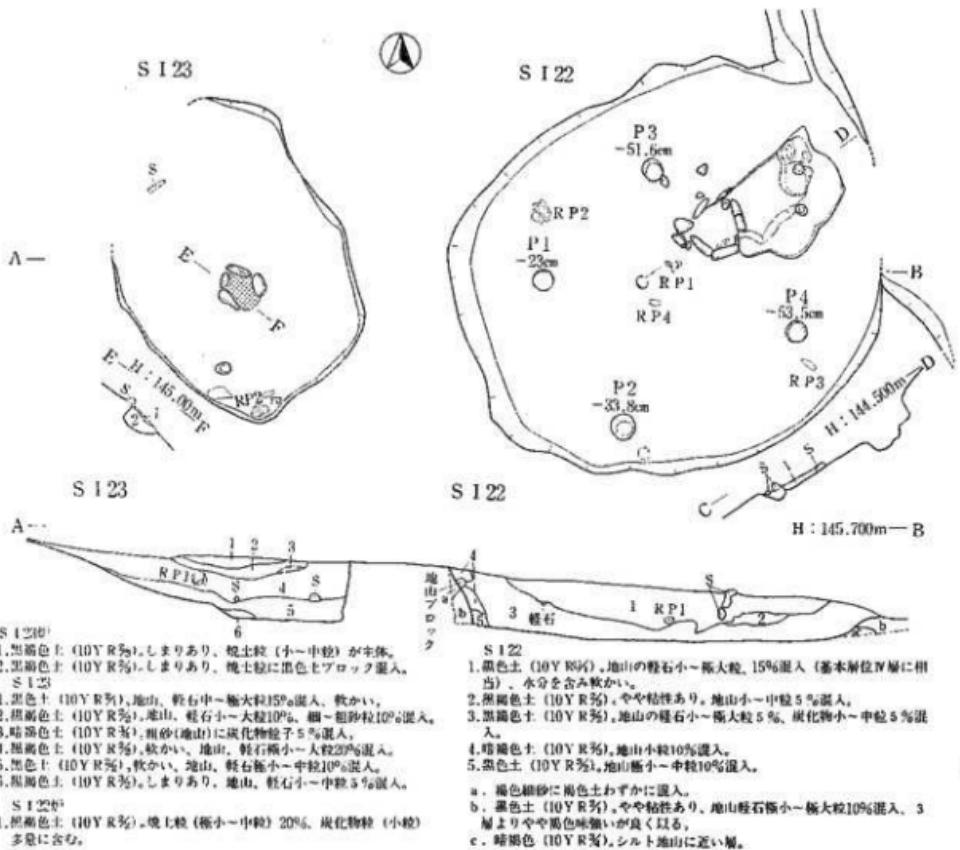
遺構の構築時期は、炉の形態や出土土器から縄文時代中期後葉と思われる。

S I 23堅穴住居跡（第12図、図版5）

L P 45グリッドに位置し、V層で確認した。平面形は梢円形で、規模は長軸3.28m、短軸2.36



第11図 A区 SI 19・SK 124



第12回 S I 22・23堅穴住居跡

mで、面積は5.7m²である。

壁は、斜面に構築されているため、北西側の壁はない。壁高は南側で0.62mである。床面はやや凹凸があり、やや軟らかい。柱穴は、南壁寄りに1本配置されている。規模は径0.16m、深さ0.15mである。

炉は中央部のやや南側に石窯炉を検出した。炉の平面形は南東側が開口する「コ」の字状で、0.15~0.26mの扁平な自然礫を配している。その規模は1辺0.40mである。

遺物は土器が178点、石器・剝片・自然石が24点出土した。土器（第22図）70は胴部上半と口縁部の径がほぼ同じで、底部から緩やかに外傾しながら立ち上がり、胴部上半から内窪し、口縁部が「く」字状に外反する器形の粗製土器である（I-14-C類）。72は口頭部に1条の沈線と2列の連続刺突文が横位に展開し、その沈線下に弧状文と垂下する円形渦巻曲線文を施文した土器（I-8-a類）である。73・74は粗製土器で、73は口縁部が内傾する器形で（I-14-I類）、74は胴部上半から口縁部にかけてほぼまっすぐ立ち上がる器形である（I-14-F類）。石器は、搔器、石鎌、削器、微小剝離痕のある剝片である（第27・28図）。搔器は2点で、S36は裏面が反っているもの（I類）、S37は裏面が反っていないもの（II類）である。石鎌は1点で、S41は凸基有茎式（III類）である。削器は2点で、S38は綫長の剝片の片面1側縁に刃部を作出したもの（I類）、S39は不整な梢円形を呈する剝片の両面の2側縁に弧状の刃部を作出したもの（II類）である。他に微小剝離痕のある剝片が1点（S40）、自然石が1点（S42）ある。

②堅穴状遺構

S K I 24堅穴状遺構（第11図）

L T 45グリッドに位置し、V層で確認した。SQ18、SK27と重複しているが、SK27より新しく、SQ18より古い。東側の壁は消失しているが、平面形は円形と思われ、規模は現存部の推定径2.22mである。壁高は西側で0.71mである。底面は平坦でややしまっている。柱穴や壁溝・炉は検出されなかった。

遺物は土器が42点、石器が2点出土した。土器（第22図）の75はSKF25とSQ18から出土した破片とも接合した。胴部上半から口縁部にかけてわずかに外傾しながら立ち上がる器形の粗製土器である（I-14-f類）。口縁部がやや肥厚している。76は波状口縁で、胴部半はからほほ真っすぐ立ち上がり、口縁部が外反する器形で、横位に弧状の沈線文を施文した土器である（I-4-b類）。77はSQ18から出土した破片とも接合し、胴部上半が欠損している粗製土器である。85はSKF25出土の破片と接合した口縁部破片で、口縁に沿って2本1組の細い粘土紐を2組貼付している。石器は石鎌と石鎌が各1点である（第28図）。S41は凸基有茎

式（Ⅲ類）の石錐である。S 43は縦長の剥片の1端を細くして錐部とした（Ⅱ類）石錐である。遺構の構築時期は、出土土器から円筒上層e式期である。

③土坑

S K 03土坑（第13図）

L M42グリッドに位置し、第V層で検出した。平面形は不整梢円形、断面形は鍋底状を呈する。規模は長軸1.63m、短軸0.92m、深さ0.47mである。

遺物は、土器片が1点（第23図）出土した。78は胸部の小破片で、縄文地で、部分的に繩文を磨り消している。

遺構の構築時期は、出土土器から縄文時代中期後半と思われる。

S K 08土坑（第8図）

L J 41グリッドに位置し、第V層で検出した。S I 09と重複し、本遺構が新しい。平面形は長梢円形、断面形はいびつな「U」字状を呈する。規模は長軸1.77m、短軸0.63m、深さ0.68mである。

遺物は、上器が27点出土した。土器（第23図）の79は連続刺突文と沈線による懸垂文を、80は沈線で横円形の区画文を施文した土器である。81は口縁部破片で1条の粘土紐が横走している。82は沈線で縦位の区画文を施文し、沈線間を磨り消している。

遺構の構築時期は、出土土器から、縄文時代中期後半と考えられる。

S K 17土坑（第13図）

MA 45グリッドに位置し、第V層で検出した。平面形は梢円形、断面形はビーカー状を呈する。規模は長軸1.2m、短軸1.07mである。遺物は出土しなかった。

S K F 21土坑（第13図）

L Q 46グリッドに位置し、捨て場の第V層で検出した。平面形は不整梢円形、断面形は浅皿状を呈する。規模は長軸1.37m、短軸1.03mである。

遺物は、土器片が1点（第23図）出土した。84は平行沈線と弧状文を施文した櫛林式と思われる上器である。

S K F 25フラスコ（袋）状土坑（第13図・図版6）

L Q 43グリッドに位置し、第V層で検出した。平面形はほぼ円形、断面形は袋状を呈する。規模は開口部径0.94m、底部径1.10m、深さ0.97mである。

遺物は、土器が35点出土した。土器（第23図）の85は、S K 124出土の破片と接合した口縁部破片である。86は波状口縁で、口縁部に刻目と粘土紐の貼付があり、波頂部下に沈線が見られる土器で、円筒上層e式に比定される。

S K27土坑（第13図）

L T45グリッドに位置し、S K I 24の底面で検出した。平面形は円形、断面形は浅皿状を呈する。規模は径0.95m、深さ0.18mである。S K I 24構築時の貼床などは確認されなかった。遺物は出土しなかった。

S K28土坑（第13図）

M A46グリッドに位置し、S I 16の床面で検出したが、土層断面の観察でS I 16より新しいことがわかった。平面形は円形、断面形は鍋底状を呈する。規模は径0.77m、深さ0.22mである。遺物は出土しなかった。

④配石遺構**S Q18配石遺構（第14図）**

L T45グリッドに位置し、S K I 24の上面（第IV層中）で検出した。長さ0.07~0.23mの扁平もしくは角礫が1.20×1.80mの範囲に不規則に並んでおり、礫の下には焼土・炭化物が0.30mほど堆積している。

遺物は土器が3点、石器が1点（第28図）出土した。土器（第23図）の77はS K I 24出土破片と接合した粗製深鉢形土器である。87・89は粗製の深鉢形土器で、87は波状口縁、89は平口縁で、口縁部がやや肥厚し、わずかに外反する。石器は削器（S 44）で、縦長の剝片の両面の側縁に刃部を作出したもの（I類）である。

S Q20配石遺構（第14図）

L Q43グリッドに位置し、第V層上面で検出した。S K F 25に近接している。長さ0.08~0.28mの角礫が0.94×1.15mの範囲に不規則に並んでいた。礫の下に遺構は検出できなかった。なお、本遺構の北0.75mに石棒が横倒しになって出土した（第28図S 45）。

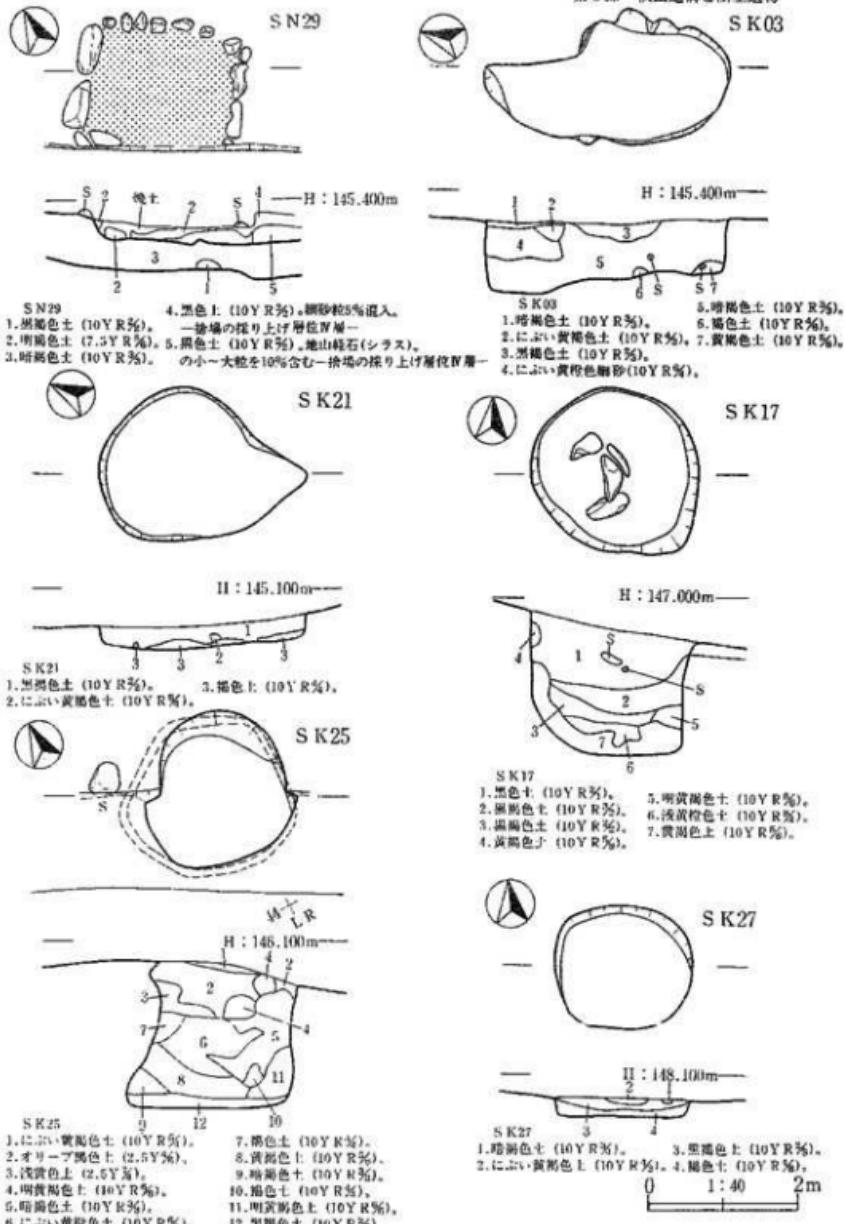
S Q26配石遺構（第14図・図版6）

L P43グリッドに位置し、第V層上面で検出した。長さ0.30~0.40mの3個の細長い自然礫を横に並行させており、その0.25m南には、0.13~0.33mの3個の自然礫が並んでいた。礫の下に遺構は検出できなかった。遺物は出土しなかった。

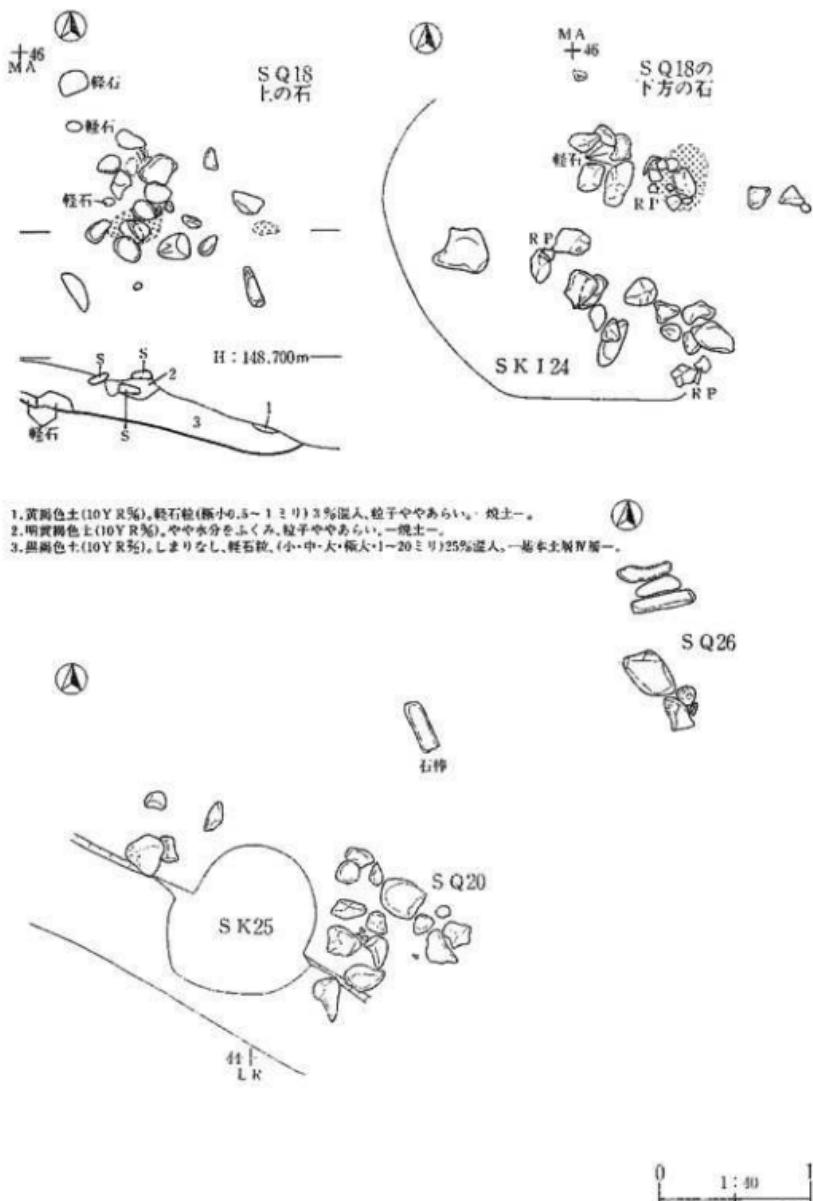
⑤焼土遺構**S N29焼土遺構（第13図）**

L Q43グリッドに位置し、第V層上面で検出した。S Q26の南側に隣接している。1辺が調査区外であるが、0.08~0.34mの自然礫を並べており、長方形の石窯炉と思われる。炉内には焼土が0.06mの厚さで堆積していた。長軸は現存長1.19m、短軸は0.09mである。遺物は出土

第2節 検出遺構と出土遺物

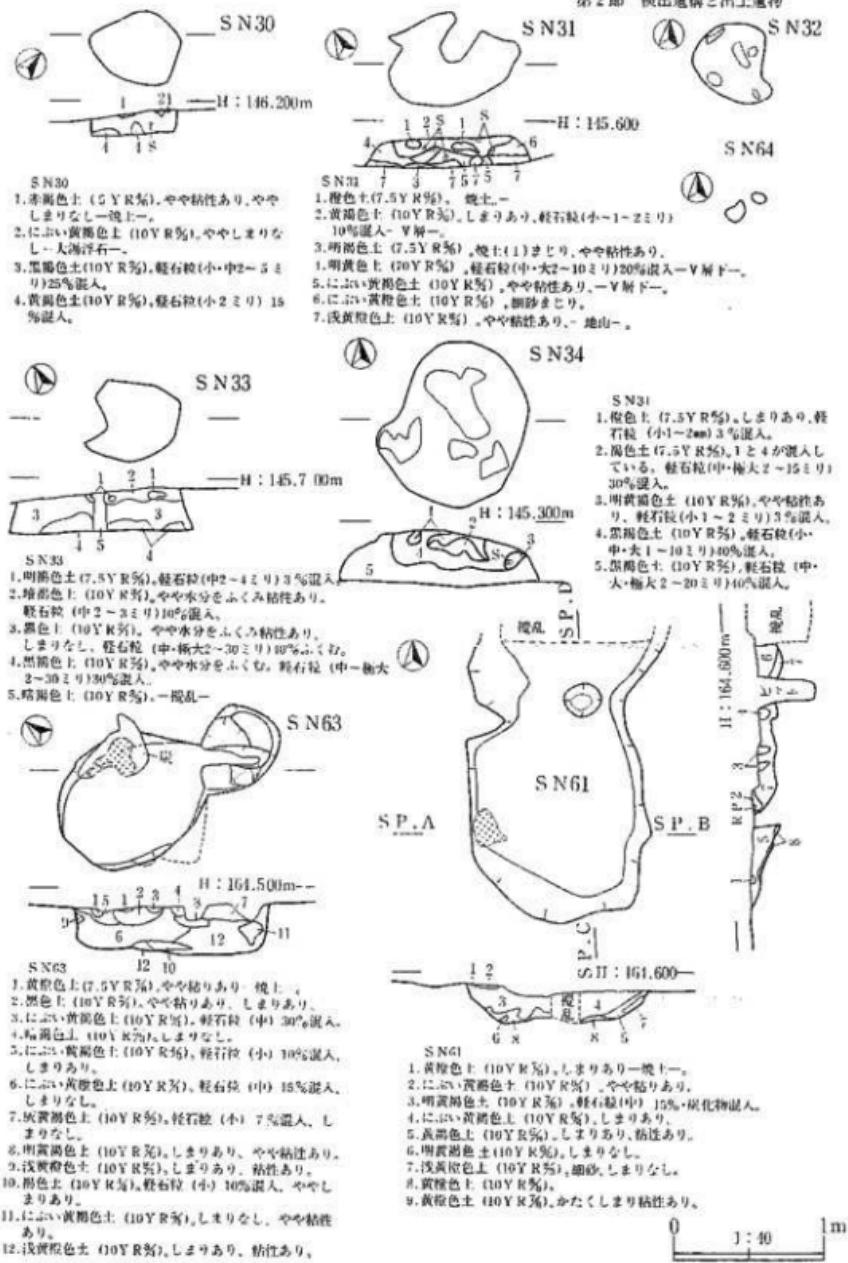


第13図 A区 SN29・SK土坑



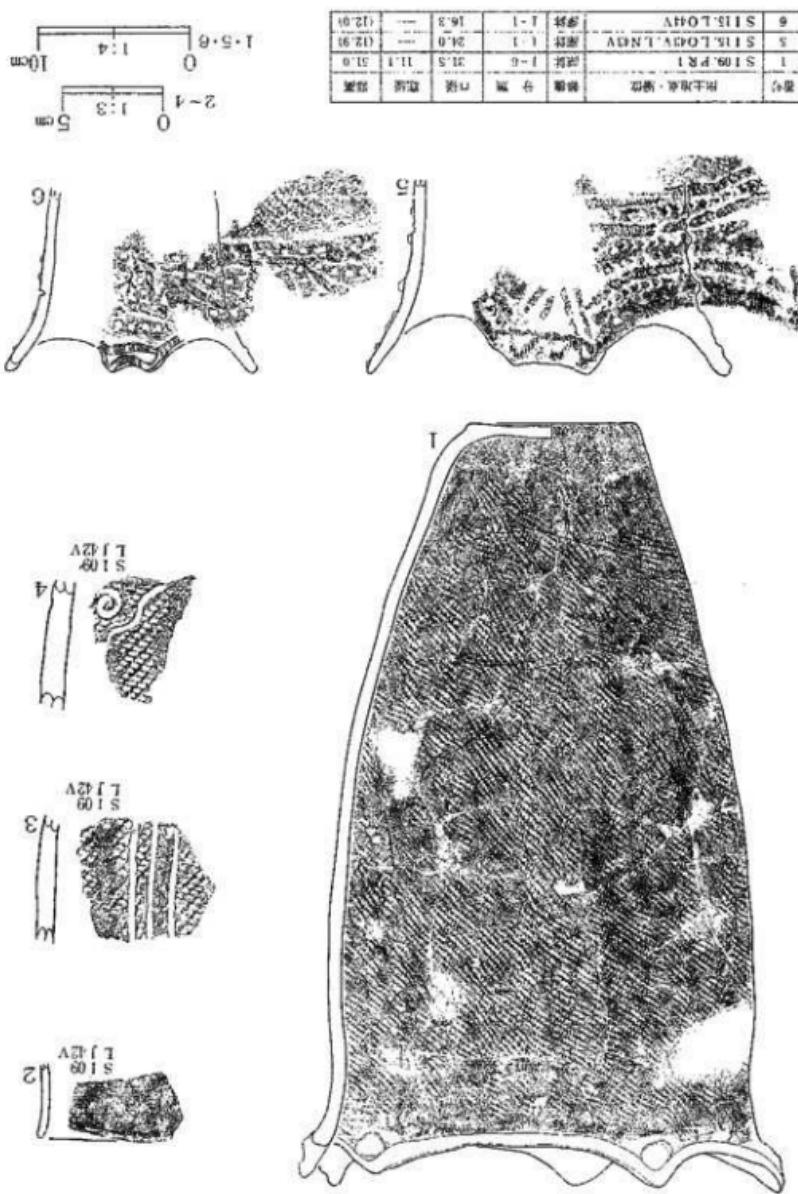
第14図 A区 S Q配石造構

第2節 掘出遺構と出土遺物

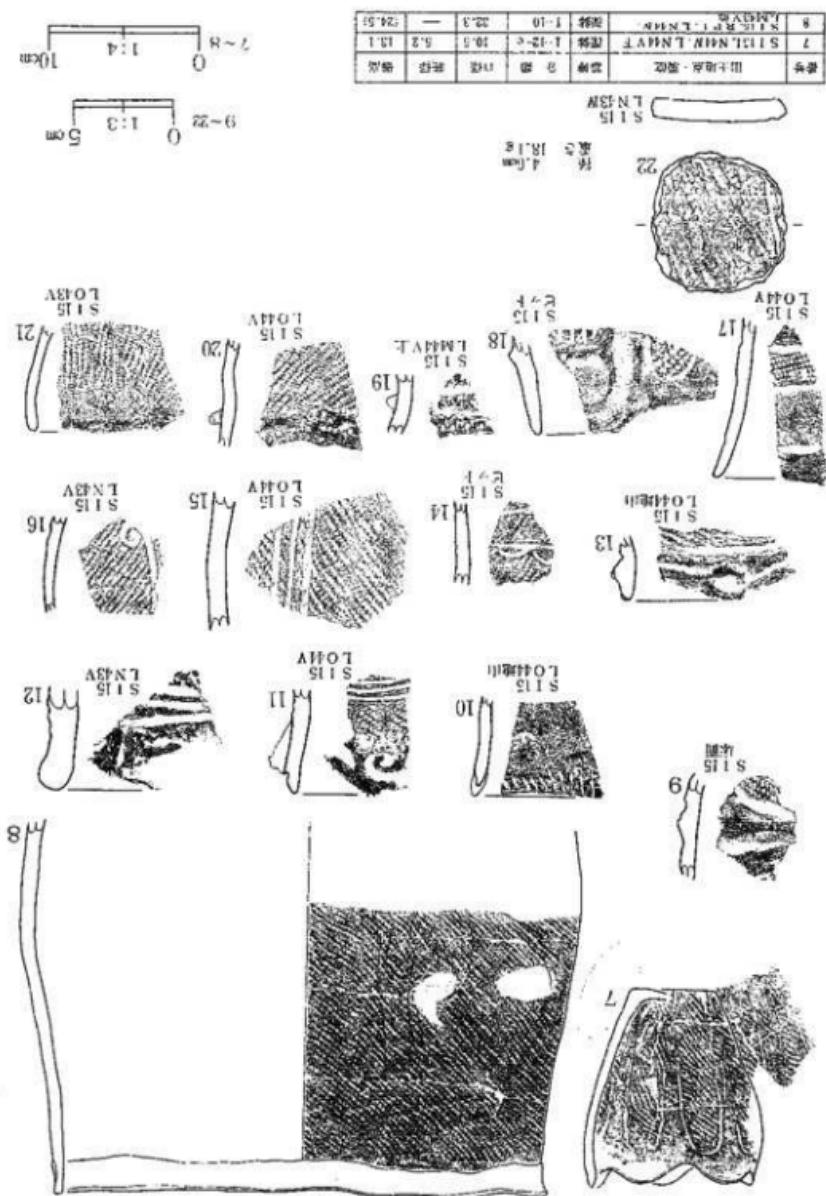


第15図 A・B区 S N焼土遺構

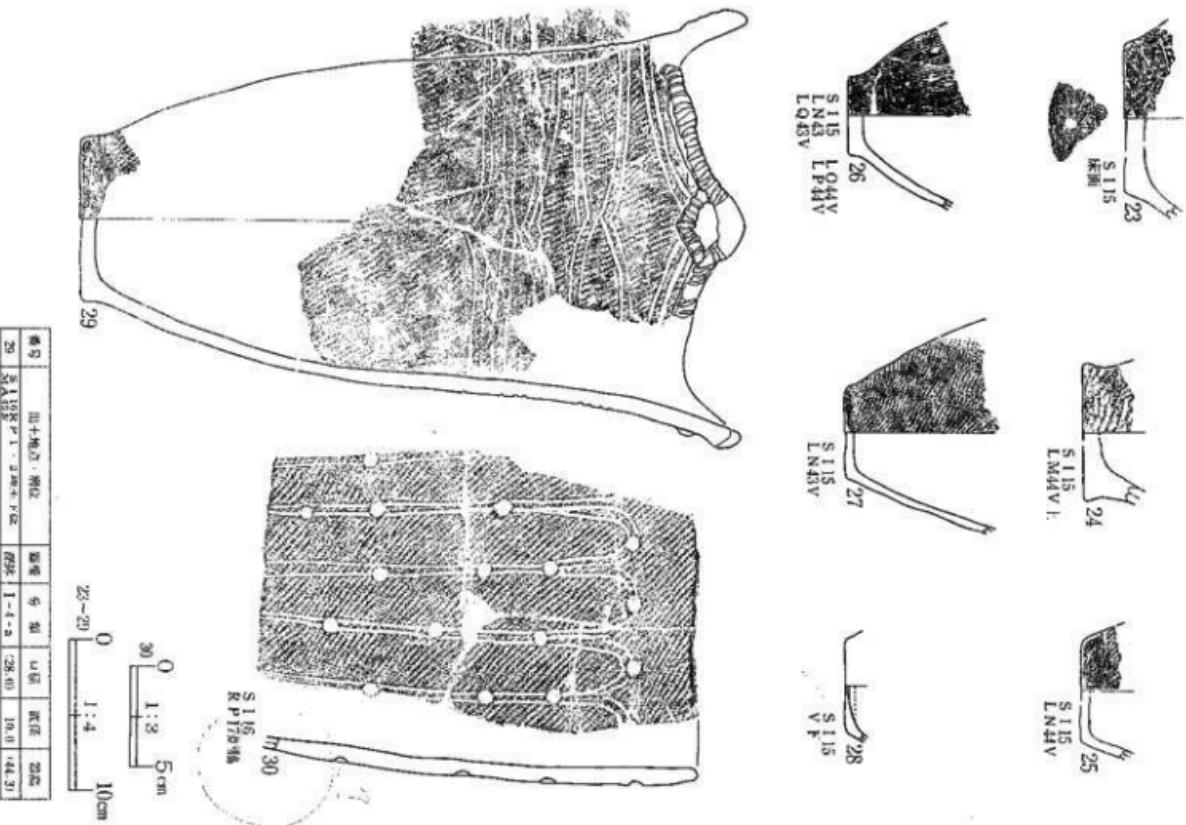
第16圖 A區 遺構內出土土器(1)



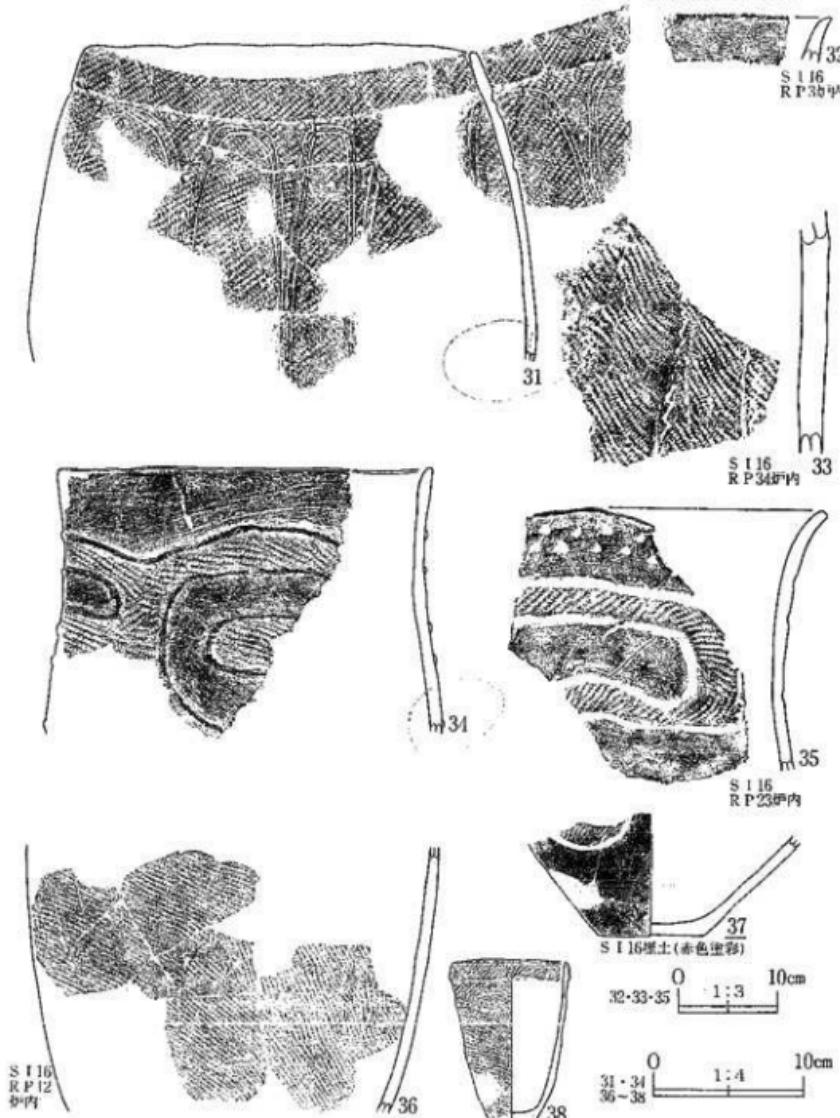
第17图 A区 遗物内出土土器(2)



第二圖 遺物內出土土器

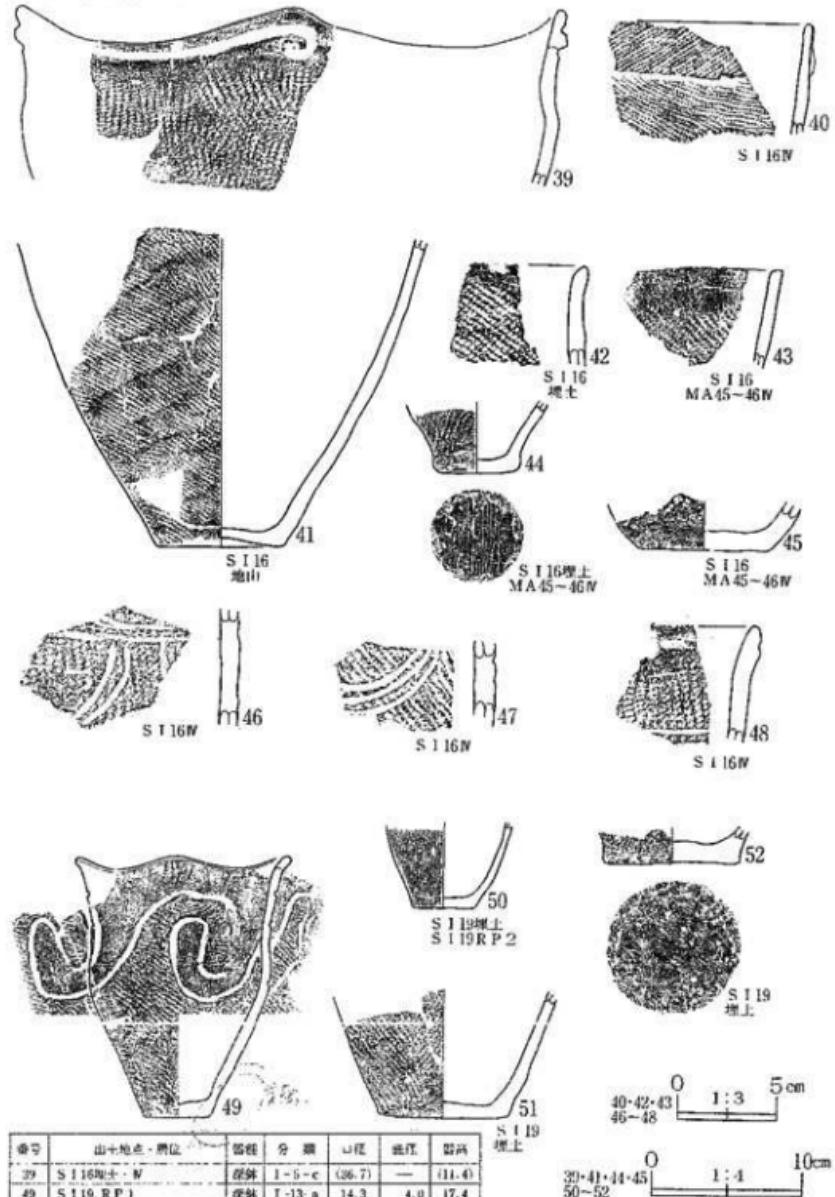


第18図 A区 通構内出土土器(3)



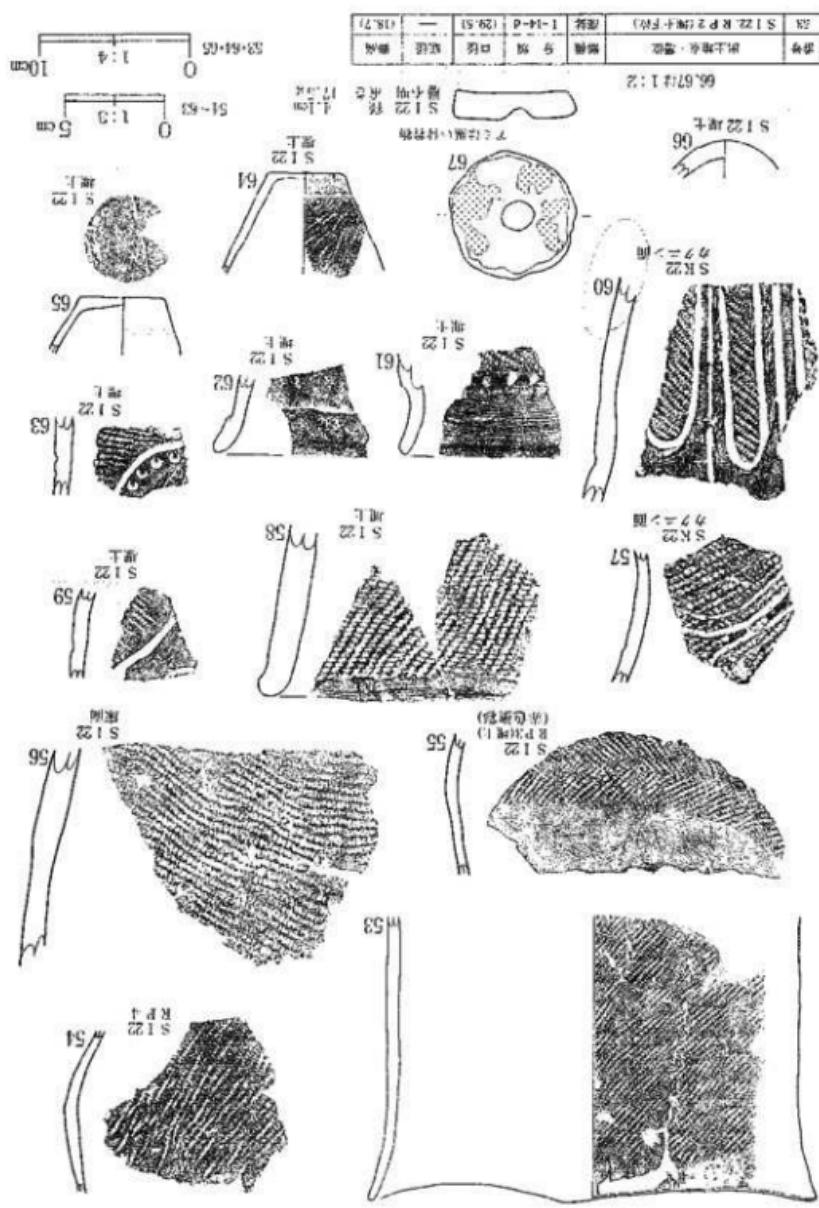
番号	出土地点・層位	器種	分類	口径	底径	高さ
31	S I 16 R P 23炉内	陶片	1-9-a	28.8	—	(21.2)
34	S I 16 R P 24炉内, 388号	陶片	1-13-b	12.51	—	(17.5)
37	S I 16 塗土, S I 16N	陶器	1-13	—	6.6	(6.7)
38	S I 16 塗土, L Y 05P	陶片	1-14-b	6.6	2.4	10.6

第19図 A区 遺構内出土土器(4)

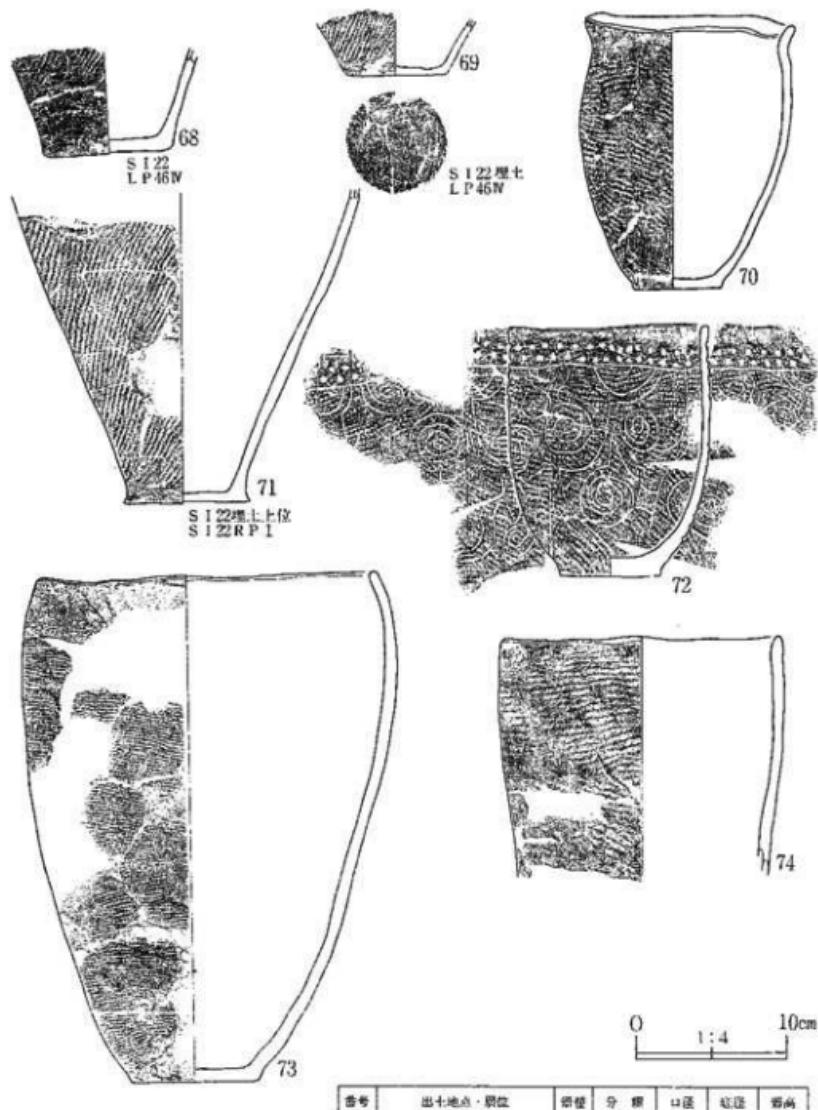


第20図 A区 造構内出土土器(5)

第21圖 A區 遷都內出土土器(6)

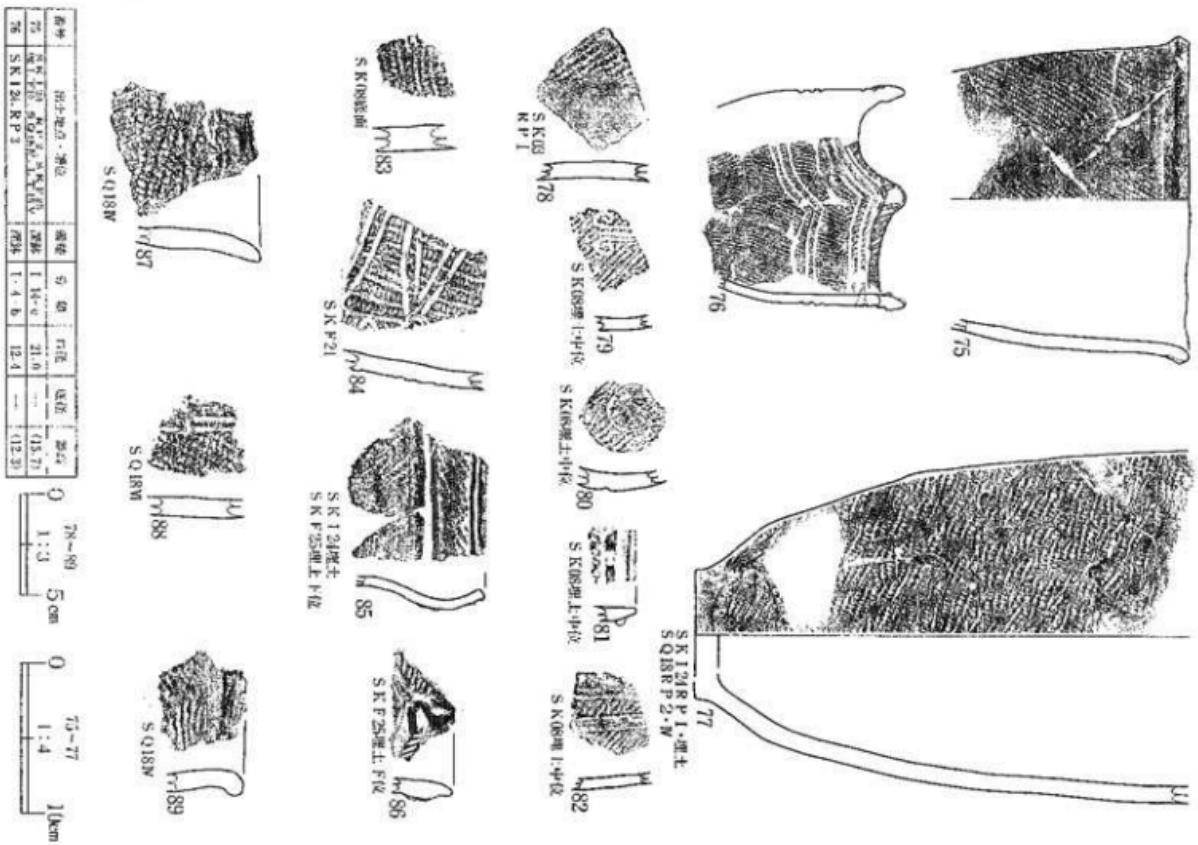


第22圖 遷都內出土土器(7)

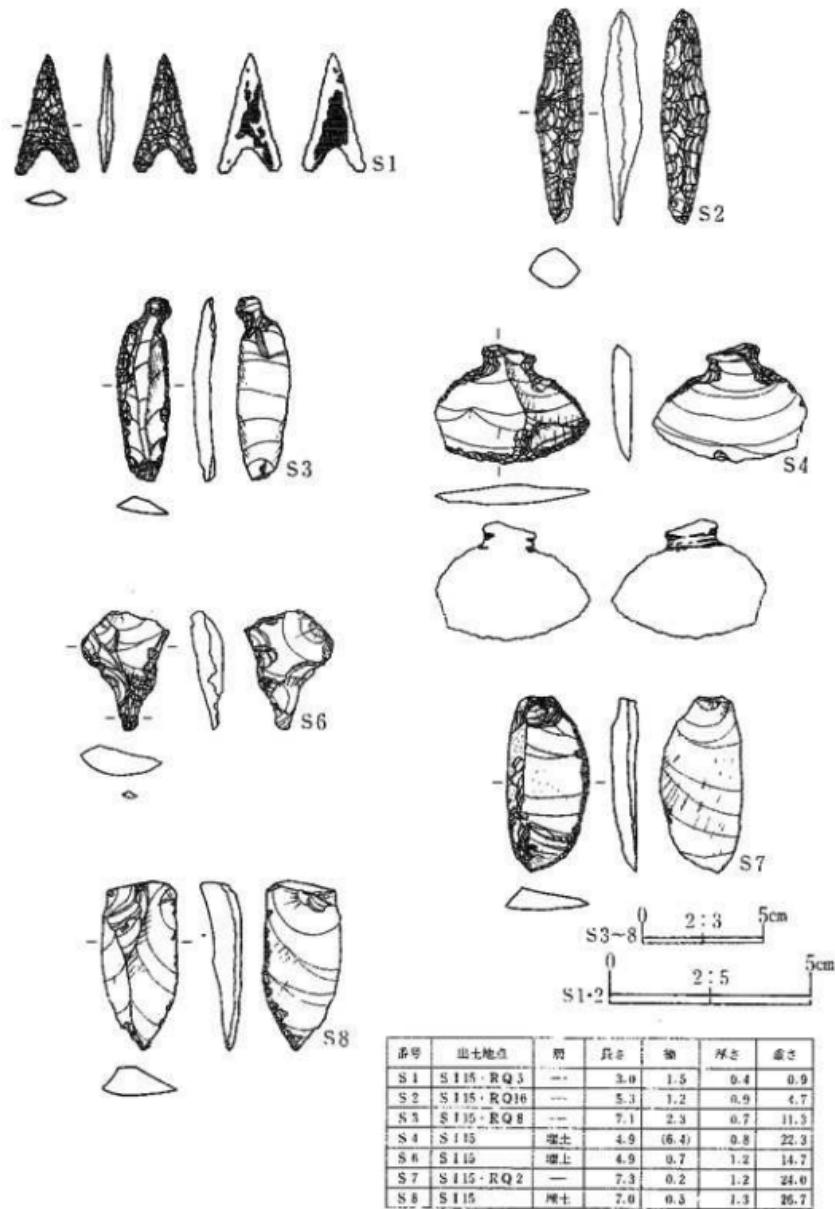


番号	出土地点・部位	器種	分類	口径	底径	高さ
70	S 122. R P 1	陶器	1-14 c	14.2	5.8	17.4
72	S 122. R P 1 (底)	陶器	1-8-a	13.2	6.5	16.8
73	S 122 墓土上位	陶器	1-14-1	22.5	8.5	33.9
74	S 122 墓土上位	陶器	1-14-f	18.2	—	(15.9)

第22図 A区 遺構内出土土器(7)

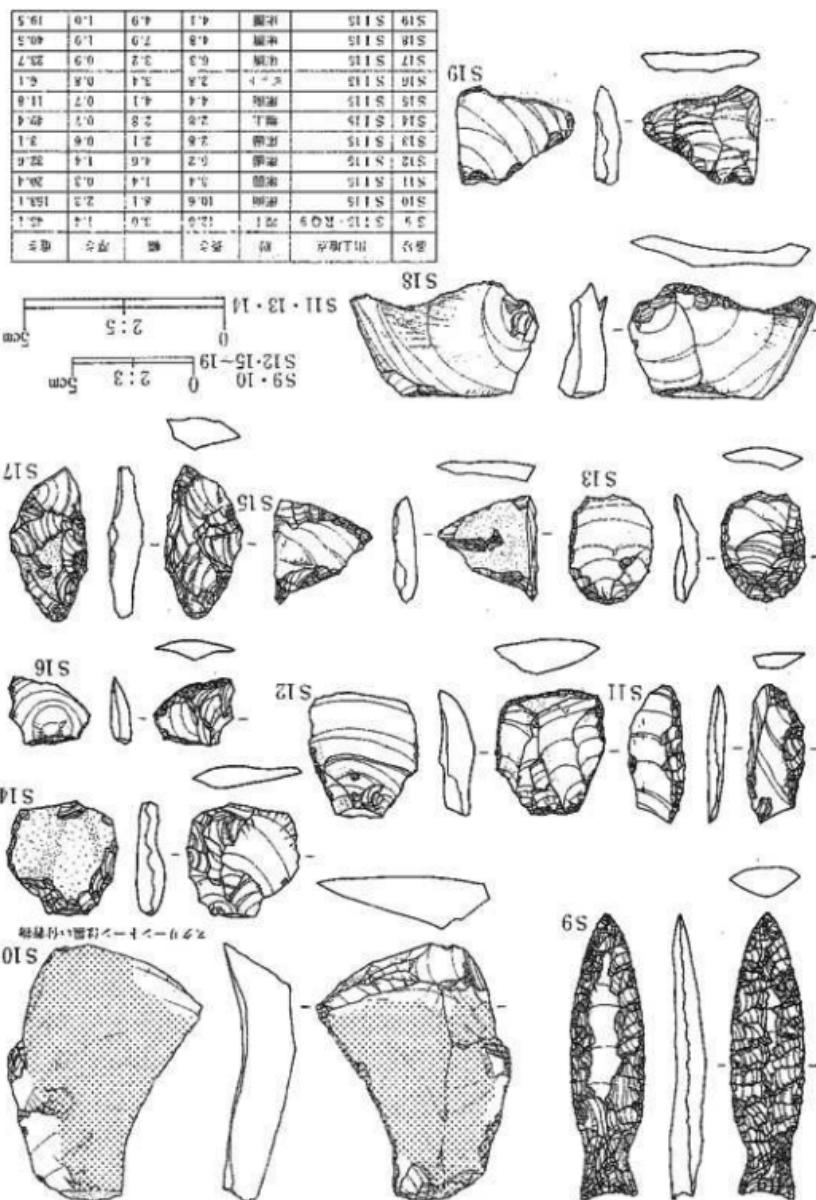


第23図 A区 遺構内出土土器(8)

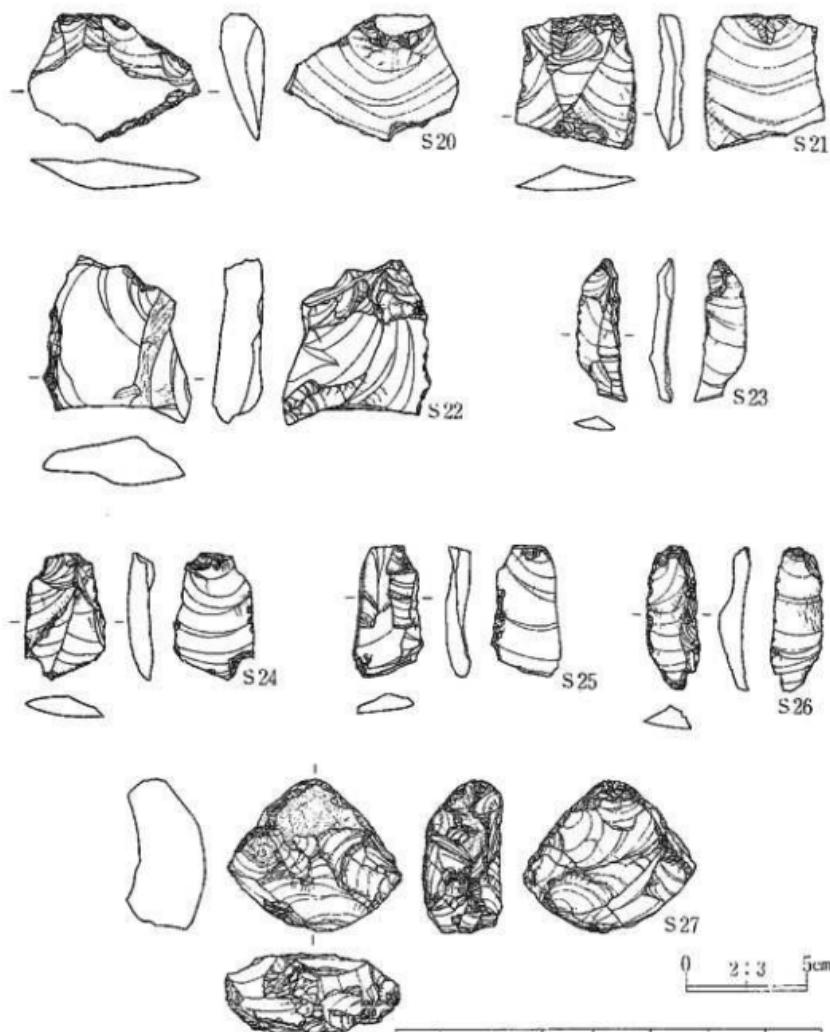


第24図 A区 造構内出土石器(1)

圖25圖 A區 遺跡內出土石器(2)

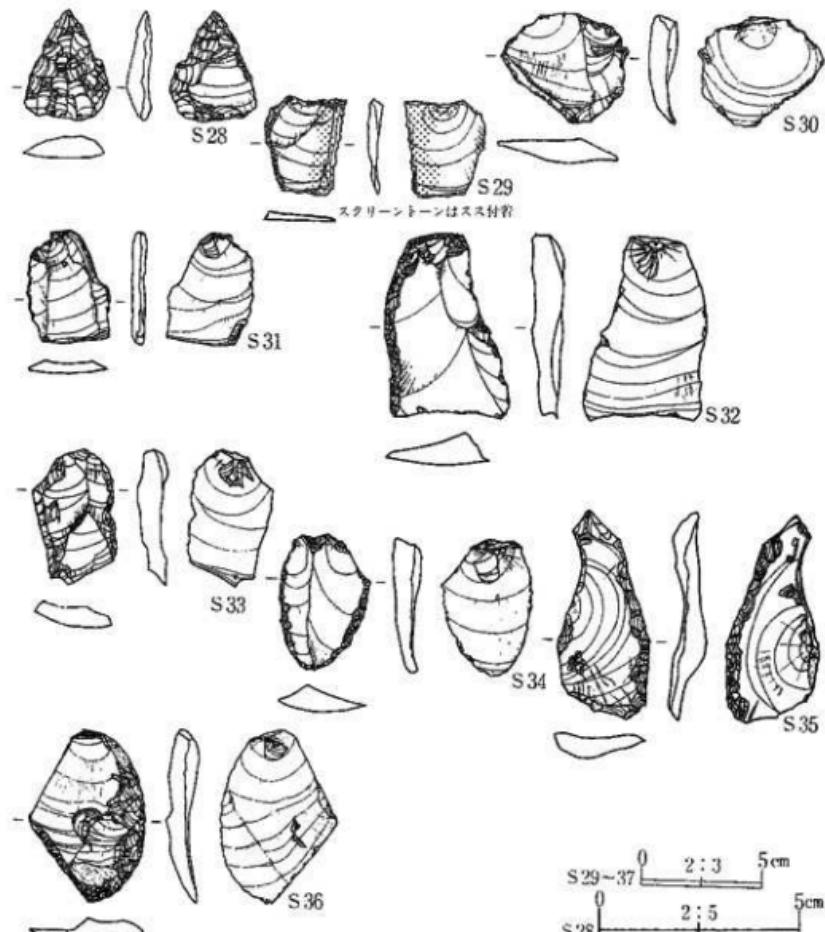


第25圖 遺跡內出土石器(2)



番号	出土地点	型	長さ	幅	厚さ	重さ
S20	S 115	理上	5.3	7.2	1.8	46.4
S21	S 115	理上	5.6	5.0	1.0	30.0
S22	S 115	理上	6.3	6.1	1.0	81.0
S23	S 115	底面	6.0	2.1	0.7	67.3
S24	S 115	底面	5.5	3.3	1.0	14.8
S25	S 115	底面	5.4	2.9	0.9	10.3
S26	S 115	底面	6.0	2.2	1.0	10.2
S27	S 115	理上	6.4	7.2	3.2	160.4

第26図 A区 造構内出土石器(3)



番号	出土地点	研	長さ	幅	厚さ	重さ
S28	S 116・RO 1	—	2.7	2.1	0.6	2.8
S29	S 116	堆土	4.1	3.1	0.4	5.4
S30	S 116	堆土	4.5	3.1	1.1	20.5
S31	S 116	堆土	4.7	3.4	0.5	10.4
S32	S 122	堆土	7.7	4.3	1.1	40.6
S33	S 122	堆土	5.7	3.4	1.1	16.5
S34	S 122	堆土	5.6	3.7	1.0	19.4
S35	S 122	堆土	8.6	3.8	1.1	28.0
S36	S 123	堆土	5.7	3.8	0.7	35.5
S37	S 123	堆土	6.1	3.1	1.0	68.8

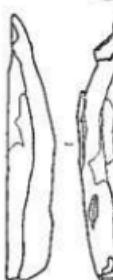
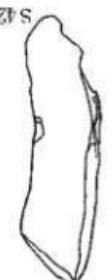
第27図 A区 遺構内出土石器(4)

第28圖 A區 遺構內出土石器(5)

番号	地層標記	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S45	SQ20-HQ1	—	9.8	4.4	11.2	10.7
S46	SQ20	層下	3.5	0.9	2.0	0.500
S47	SQ20	層上	6.7	3.5	1.2	0.50
S48	SQ20	層上	11.2	3.4	2.0	1.5
S49	SQ20	層上	11.2	3.4	0.4	1.3
S50	SQ20	層上	7.0	6.6	1.5	0.50
S51	SQ20	層上	4.8	4.7	1.3	0.30
S52	SQ20	層上	9.0	7.1	1.5	0.40

S38~40 0 2:3 5cm 0 2:5 5cm S41

又分一物付属 S45



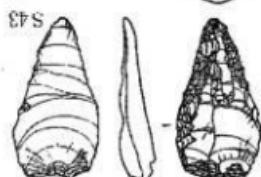
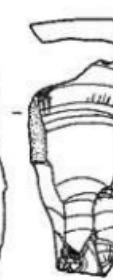
S41



S39



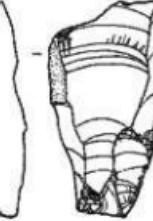
S38



S43

S44

S45



しなかった。

S N30焼土遺構（第15図）

L Q44・L R44グリッドに位置し、捨て場の第IV層中で検出した。平面形は梢円形を呈し、長軸0.58m、短軸0.48mである。焼土の厚さは0.02~0.04mである。遺物は出土しなかった。

S N31焼土遺構（第15図）

L O44・L P44グリッドに位置し、捨て場の第IV層中で検出した。平面形は不整梢円形を呈し、長軸0.88m、短軸0.61mである。焼土の厚さは0.05~0.07mである。遺物は出土しなかった。

S N32焼土遺構（第15図）

L R45グリッドに位置し、捨て場の第IV層中で検出した。平面形は不整梢円形を呈し、長軸0.58m、短軸0.51mである。土層断面図は作成していないが、第IV層中に径0.03~0.15mの焼土塊が多くみられた。遺物は出土しなかった。

S N33焼土遺構（第15図）

L Q45グリッドに位置し、捨て場の第IV層中で検出した。平面形は不整円形を呈し、径0.67mである。土層断面図は作成していないが、第IV層中に径0.04~0.10mの焼土塊が多くみられた。遺物は出土しなかった。

S N34焼土遺構（第15図）

L Q46グリッドに位置し、捨て場の第IV層中で検出した。平面形は不整梢円形を呈し、長軸1.10m、短軸0.95mである。焼土の厚さは0.09~0.14mである。遺物は出土しなかった。

（2）A区遺構外出土遺物

基本層序の項で述べたように、台地裾部の緩斜面から平坦部に至る第V層には多量の遺物が包含されており、捨て場が形成されていたことがわかった。ここでは捨て場出土遺物から先に記し、その後に捨て場を除く遺構外出土遺物の順に記載する。

①捨て場

第IV層と第V層から土器・石器が出土したが、第V層は遺物の包含量が少なく、集中度も低いことから、第V層を捨て場の堆積層と判断した。多量に出土した第V層でも時期毎の平面的な広がりや、集中の特に顯著な箇所は確認できなかつた。

235・236（第56図）はRとLの0段多条の縄を交互に回転させ羽状縄文を施文している土器（II-1類）である。口唇部はヘラ状工具で平滑に仕上げている。内面は横位・縱位の調整痕をもつ。色調は暗褐色で、胎土は砂粒とわずかな纖維を含む。138（第34図）は底部から緩やかに外傾しながら立ち上がりて口縁部にいたり、口縁部が短く外反する器形である。口縁部は

幅30ミリの無文部となり、胴部には原体幅30ミリ～35ミリの1段の縄による横位の不整撚糸文を1単位、その下には原体幅40ミリ～50ミリの1段の縄による横位の葺瓦状撚糸文を8単位施文した土器である。胴部外面の粘土紐接合部付近にはわずかに凹凸がみられる。口唇部はヘラ状工具で平滑に仕上げており、内面は横位・斜位の調整痕をもち、胎土は細砂粒が全体に、口縁部の剥落部分にはわずかに纖維の混入がみられる。色調は外面上半は暗褐色、下半が明褐色で、内面上半は暗赤褐色、下半が黒褐色で、焼成は大変良好である（II-2類）。

90～138（第29～34図）はI群の土器である。90は平口縁で、やや内窵しながら立ち上がり、口頭部でやや外反する器形である。口頭部には口縁部に平行に粘土紐を貼付して隆帯とし、その隆帯上に竹管状の連続刺突文を施文した土器である（I-2類）。91・107は波状口縁で、肥厚した口縁部に刻目あるいは撚紐の側面圧痕を施文している。胴部半ばからほぼ真っすぐ立ち上がり、口縁部は外反して、胴部に繩文を施文した土器である（I-4-c類）。92はキャリバー形で、胴部に隆沈線による懸垂文・有隣文を施文した土器である（I-3類）。93は波状口縁で、わずかに外傾しながら立ち上がる器形である。波頂部下には、円形渦巻曲線文が垂下した土器である（I-7類）。94は胴部上半に最大径があり、胴部上半から内窵しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する器形で、最大径のある部位より下方に斜行繩文を施文し、上半部が無文部となる土器である（I-11-c類）。95は胴部上半に最大径があり、胴部上半から内窵しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する器形である。胴部上半が無文部となる土器である（I-11類）。96は波状口縁で、胴部上半から口縁部にかけてやや内傾したあと、大きく外反する器形で、「匁」文と倒卵形の横円文を施文し、その文様間を磨り消した土器である（I-12-a類）。97・126・127は波状口縁で、底部からやや外傾気味に直線的に立ち上がり、胴部上半でわずかに内窵しながら直線的に口縁部にいたる器形で、「匁」文と倒卵形の横円文を施文し、その文様間を磨り消している土器である（I-12-d類）。98は平口縁で、胴部上半に沈線により横に広がる波状文を施文し、その文様間の地文を磨り消した土器である（I-13-b類）。99は胴部下半のみの残存であるが、沈線により横に広がる「S」状文を施文し、その文様内を磨り消した土器である（I-13類）。100・102は胴中央部がやや張り、胴部上半で内窵し、口縁部が外反する器形で、縄文地の粗製土器である（I-14-b類）。101は胴中央部に最大径があり、胴中央部から胴部上半が内窵し、口縁部が外反する器形で、縄文地の粗製土器である（I-14-a類）。103は胴部上半から口縁部にかけてほぼまっすぐ立ち上がる器形で、縄文地の粗製土器である（I-14-f類）。104は口縁部が直線的に外に開く器形で、無文の小型土器である（I-14-k類）。105は波状口縁で、胴部半ばからほぼ真っすぐ立ち上がり、口縁部が外反する器形で、肥厚した口縁部に撚紐の側面圧痕、胴部上半には横位に弧状の沈線文を施文した土器である（I-4-b類）。106は円筒形を呈するものと思われ、口縁部

下に横位に平行沈線文を施し、その下方に沈線で変形胸背文を施した土器である（I-4-a類）。108~114は波状口縁で、肥厚した口縁部に刻目あるいは撻紐の側面圧痕を施した土器である（I-4類）。115~121は波状口縁で、胴部上半でやや内窪し、頸部からわずかに外反する器形で、口縁部には凹線文を施し、波頂部は渦巻文となる。115~119は繩文地で、胴部上半に平行な沈線や曲線文を施した土器である（I-5-a類）。120は繩文地で、胴部上半に平行な沈線と山形状の沈線を施した土器である（I-5-b類）。121は胴部に繩文のみ施した土器である（I-5-c類）。122・123は平口縁で、底部から胴部半ばまで丸みをもち、胴部半ばから口縁部まではほぼまっすぐ立ち上がる器形で、口縁部下に2列の連続刺突文を施した土器である（I-8-b類）。124・125は波状口縁で、胴部は直線的に立ち上がり、やや口縁部が外反する器形で、「匁」文と倒卵形の横円文を施し、その文様内を磨り消した土器である（I-12-b類）。他に128~137の土器底部が出土した。

237（第56図）は無文地に、浅く細い沈線による曲線的な文様を施した土器（Ⅲ群）である。

240は2本1組の平行沈線を横位に2段施している土器（N-3類）である。241・242はO段撻りの繩巻繩文を斜位、縱位に施した土器（N-4類）である。

石器は、石匙、石箇、削器、敲石、微小剝離痕のある剝片、凹石、擦石、石皿が出土した。石匙は2点で、S46は直線的な1側縁とやや曲線的な側縁をもち先端が尖り（I-B類）、S47は刃部が直線的（III-A類）である。石箇は2点で、S48は平面形が横円形を呈し刃部が丸刃・両刃（II類）、S49は平面形が短冊形を呈し刃部が直刃・片刃（III類）である。削器は2点で、S51は縦長の側縁に刃部を作出（I類）し、S54は不定形状剝片の両面の1ないし2側縁に直線的な刃部を作出したもの（III類）である。敲石は2点で、S52・S53は分厚い剝片の一端に敲打痕を残す。微小剝離痕のある剝片が1点（S55）、凹石も2点出土した。S56は凹面が両面のもの（I-A類）、S57は凹面が片面のみで、周縁に擦った痕跡をもつ（II-A類）。擦石は1点で、S58は長方形の素材全面に擦った痕跡をもつ（II類）。石皿は1点（S59）で、平面形が略方形のやや薄手の自然石の片面にわずかな凹みをもっている。

②捨て場を除く遺構外

遺物は土器・ミニチュア土器・土偶・円盤状土製品、石器が出土した。土器（第34~36図）の140は最大径のある胴部上半に横位の沈線を巡らし、その下位には繩文地に細く浅い沈線を垂下させている。上半部は無文で、口縁部下にボタン状突起を貼付し、その周囲に連続刺突文を施した土器（I-11-b類）である。142は平口縁で、口縁部が内窪ぎみに立ち上がる器形の粗製土器（I-14-h類）である。143は剝中央部に最大径があり、剝中央部から胴部上

半が内窓し、口縁部が外反する器形で、縦位に綾格文を施す土器である（I-14-a類）。他に、ミニチュア土器は、いづれも底部のみで平底である。土偶は、上下が欠損しているが、断面形は橢円形である。片面上部の両側に細く浅い沈線が円形に巡り、表裏に縦文を施す。円盤状土製品は、いづれも土器の胴部を打ち欠いて円形に加工したものである。石器は石鎌、石匙、石錐、石箆、搔器、削器、異形石器、磨製石斧、石錘、石棒、半円状扁平打製石器、擦石、台石あわせて62点（第40図S60～第44図S121）出土している。石鎌は4点で、S60～S62は凹基無基式（I類）、S63は凸基有基式（III類）である。石匙は5点で、S64は縦型でほぼ平行する直線的な2つの側縁に刃部をもち（I-A類）、S65は横型で刃部が曲線的（II類）、S66～S68は斜型で刃部が曲線的なもの（III-B類）である。石錐は4点（S69～S72）で、不整な三角形様の剥片に二次調整を加えて錐部を作出したもの（III類）である。石箆は2点（S73・S74）で平面形が橢円形を呈し、刃部が丸刃・片刃（I類）である。搔器は2点で、S76は裏面が反っているもの（I類）、S75は裏面が反っていないもの（II類）である。削器は6点で、S77・S80は綾長の剥片の片面の側縁に刃部を作出したもの（I類）、S79・S81は不整な橢円形を呈する剥片の片面（S81）、両面（S79）の側縁に弧状の刃部を作出したもの（II類）、S82・S83は不定形な剥片の両面の（S83）側縁（S82）に直線的もしくは緩い弧状の刃部を作出したもの（III類）である。異形石器は1点（S84）で、三日月形を呈した小型のもので、両面とも丁寧な調整剥離を施しているものである。黒曜石製、磨製石斧も1点（S85）で刃部が円刃・両凸刃（I類）である。石錘は1点（S86）で長橢円形の素材の長軸に抉りをもつ。石棒は1点（S87）で、細長い素材の全面に擦りを加えて成形したもので、断面形はほぼ円形である。半円状扁平打製石器は1点（S88）で素材の全縁辺を打ち欠いたもの（I類）である。擦石は4点（S89～S92）で、橢円形の素材全面に擦った痕跡をもつもの（I-A類）である。他に図示していないが、大きな河原石を素材として「作業台」的に使用したものと考えられる台石が、A区のS122の東隣、SD07の脇から1点出土した。

他に陶磁器が8点（第63図、第2表）出土している。

（3）B区の遺構・遺物

堅穴住居跡2軒、堅穴状遺構1基、土坑13基、焼土遺構3基、性格不明遺構2基を検出した。B区の上部平坦面は削平されており、遺構の検出面はほとんどが地山面である。

①堅穴住居跡

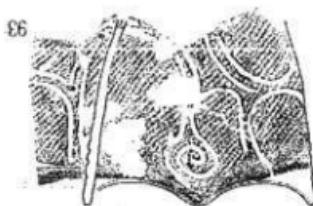
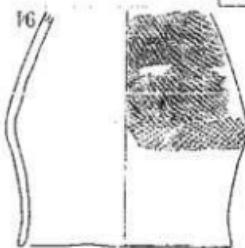
S150堅穴住居跡（第45図、図版8）

MH49グリッドに位置する。削平や搅乱により壁がだいぶ消失しており、本来の形状は不明である。床面にはかなり凹凸がある。床面には焼土があり、その周囲に長さ0.08～0.22mの自

第29圖 A區 遺跡內一堵土器(1)

號	出土地點·層位	編號	名稱	長	寬	高	備註
94	L.T.SRN	9294	—	—	—	—	(15.5)
95	L.P.SRN	9295	1-7	15.0	—	—	(12.9)
96	L.R.SRN.L.R.SRN	9296	1-3	(33.7)	(22.6)	27.6	(33.6)
97	L.Q.SRN	9297	1-1-2	(30.0)	(15.6)	—	(30.7)

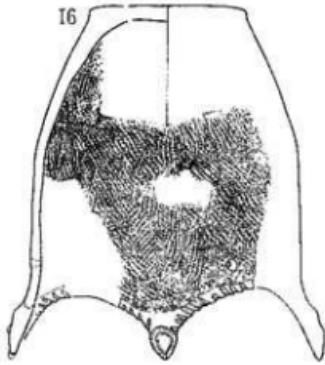
1:4
0
10cm



92



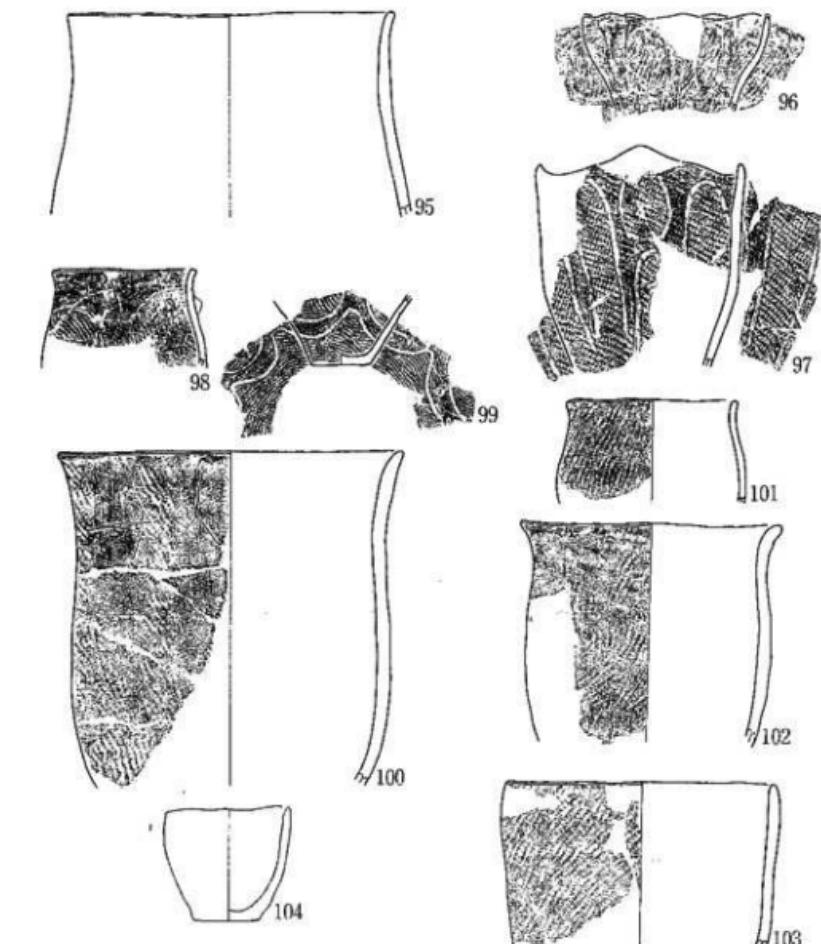
94



95



第29圖 掘出遺跡內出土器物

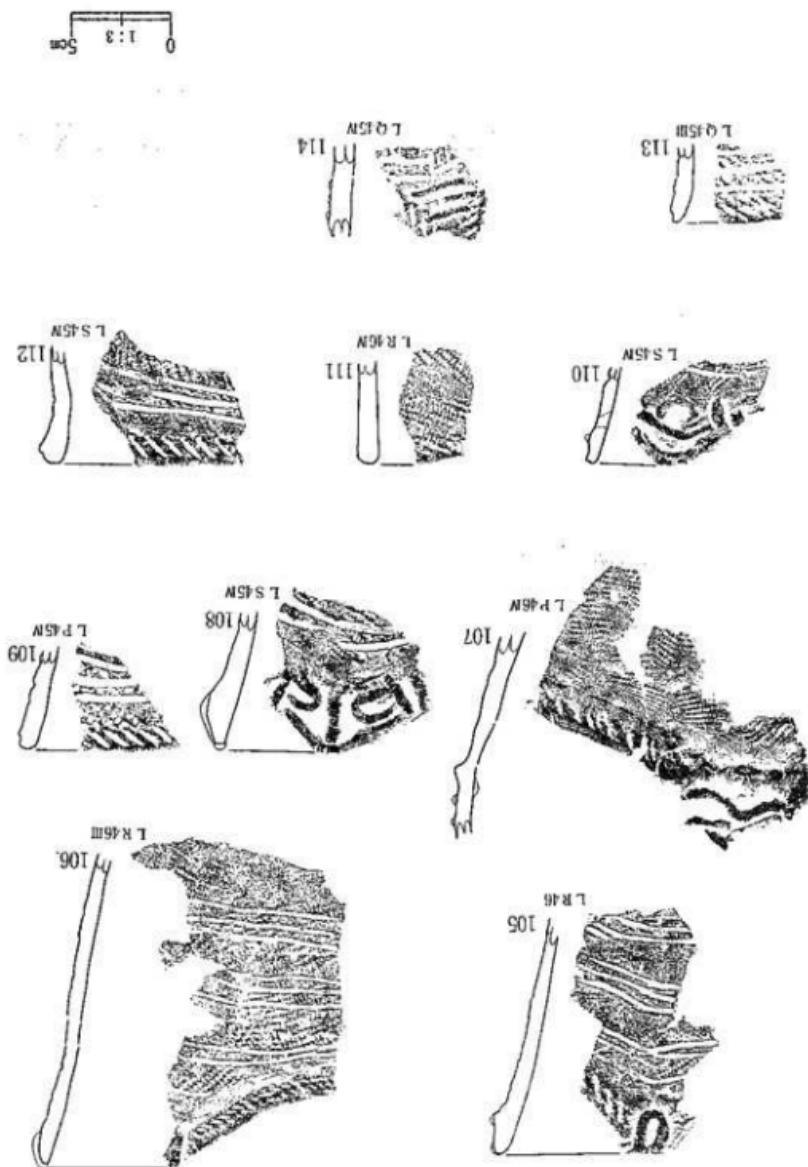


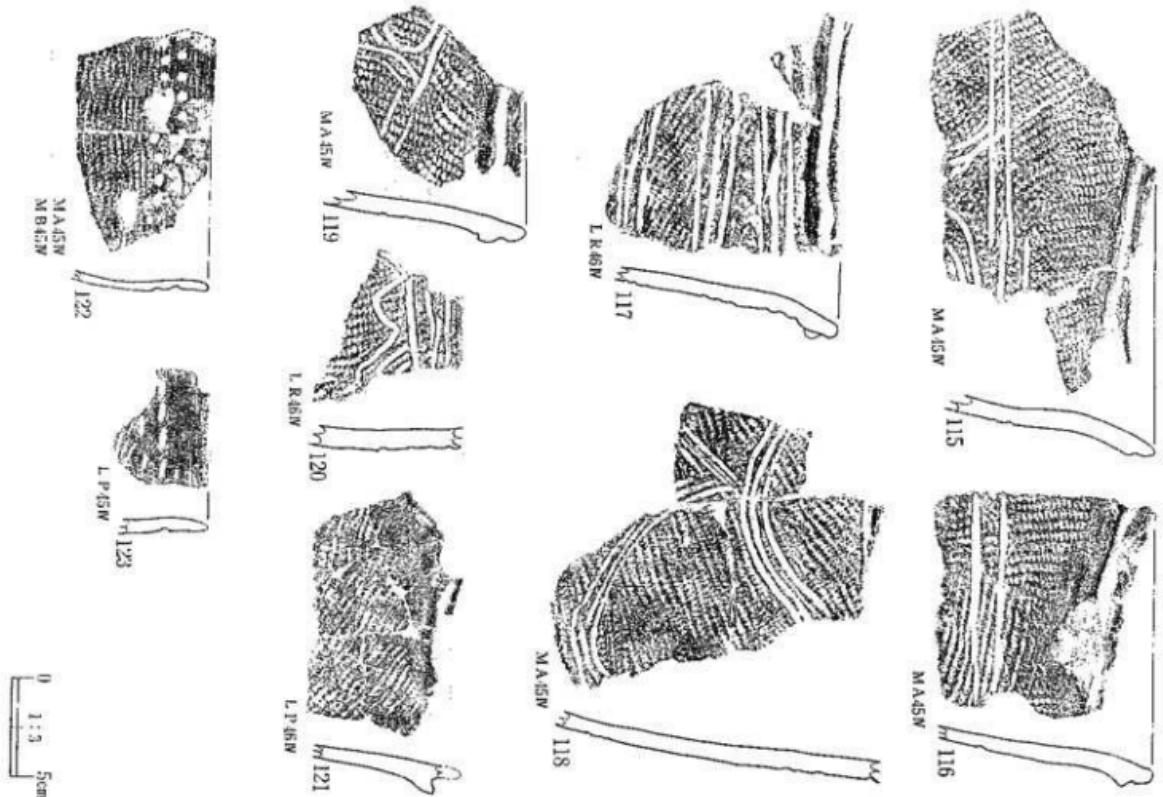
番号	出土地点・透位	器種	分類	口径	底径	器高
95	L.P45N. II	深鉢	I-11	21.5	—	(13.5)
96	L.Q40N.	深鉢	I-12-a	12.3	—	(6.2)
97	MA45N	深鉢	I-12-a	(13.4)	—	(13.4)
98	熱田場	深鉢	I-13-b	9.5	—	(6.5)
99	L.S45N	深鉢	I-13	—	3.8	(4.6)
100	L.P43N.-43V	深鉢	I-14-b	22.6	—	(22.0)
101	L.S44N	深鉢	I-14-a	11.0	—	(7.0)
102	MB45II上	深鉢	I-14-b	17.0	—	(14.5)
103	L.Q43N	深鉢	I-14-f	17.5	—	(10.8)
104	MA46N	深鉢	I-14-j	8.2	4.0	7.3

0 1:4 10cm

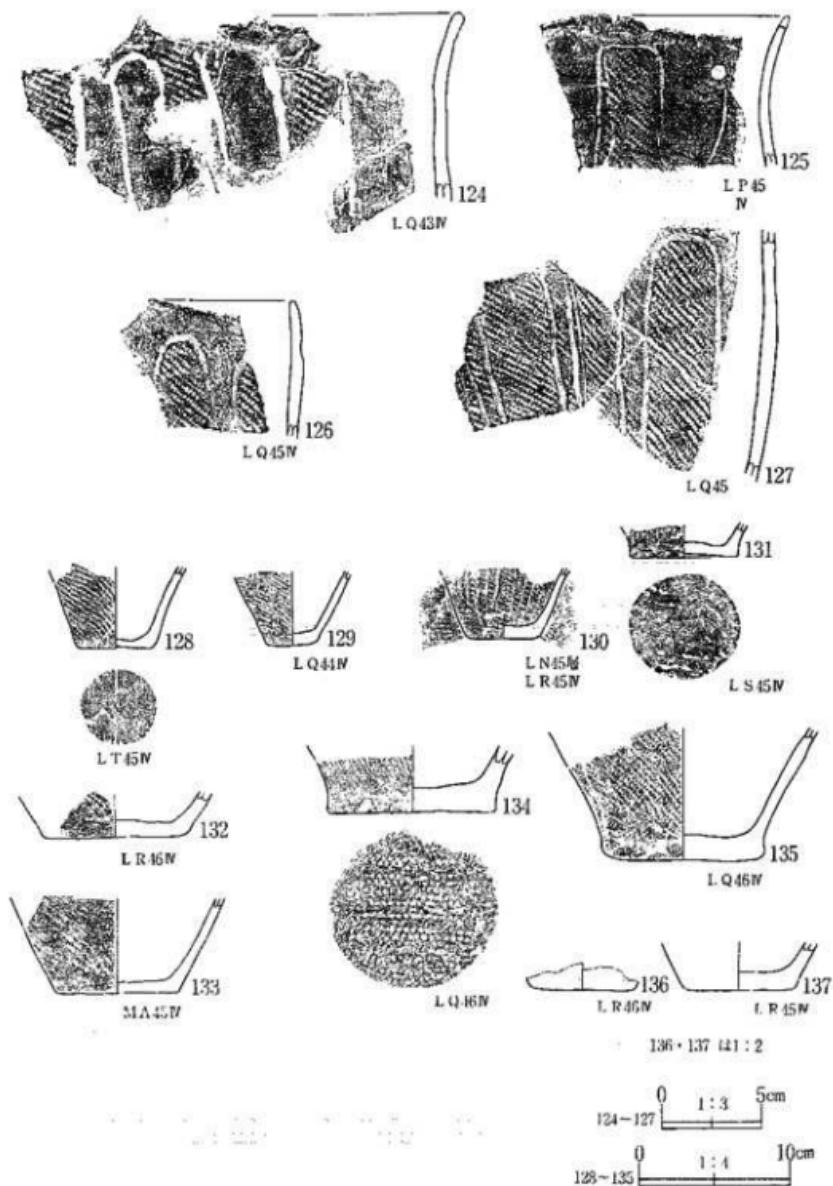
第30図 A区 遺構外-捨て場一出土土器(2)

第31圖 A区 遷拂外一捨て器一出土土器(3)

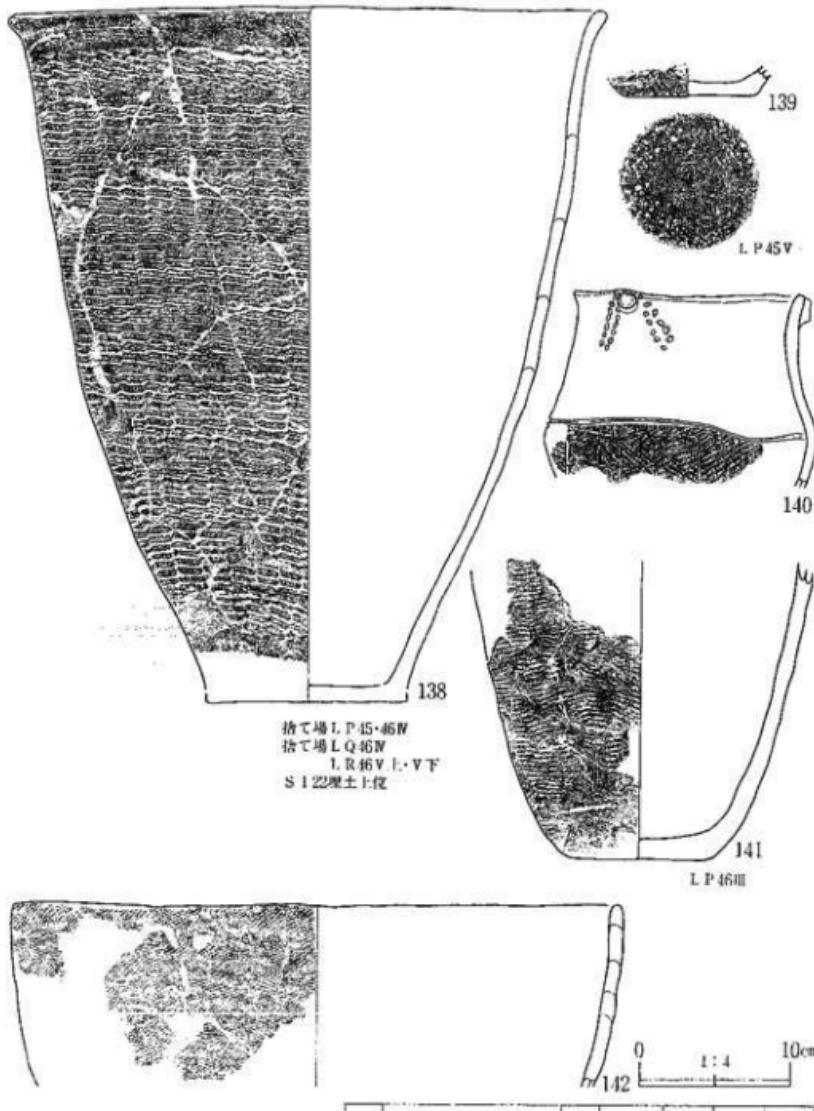




第32図 A区 造様外一捨て場一出土土器(4)



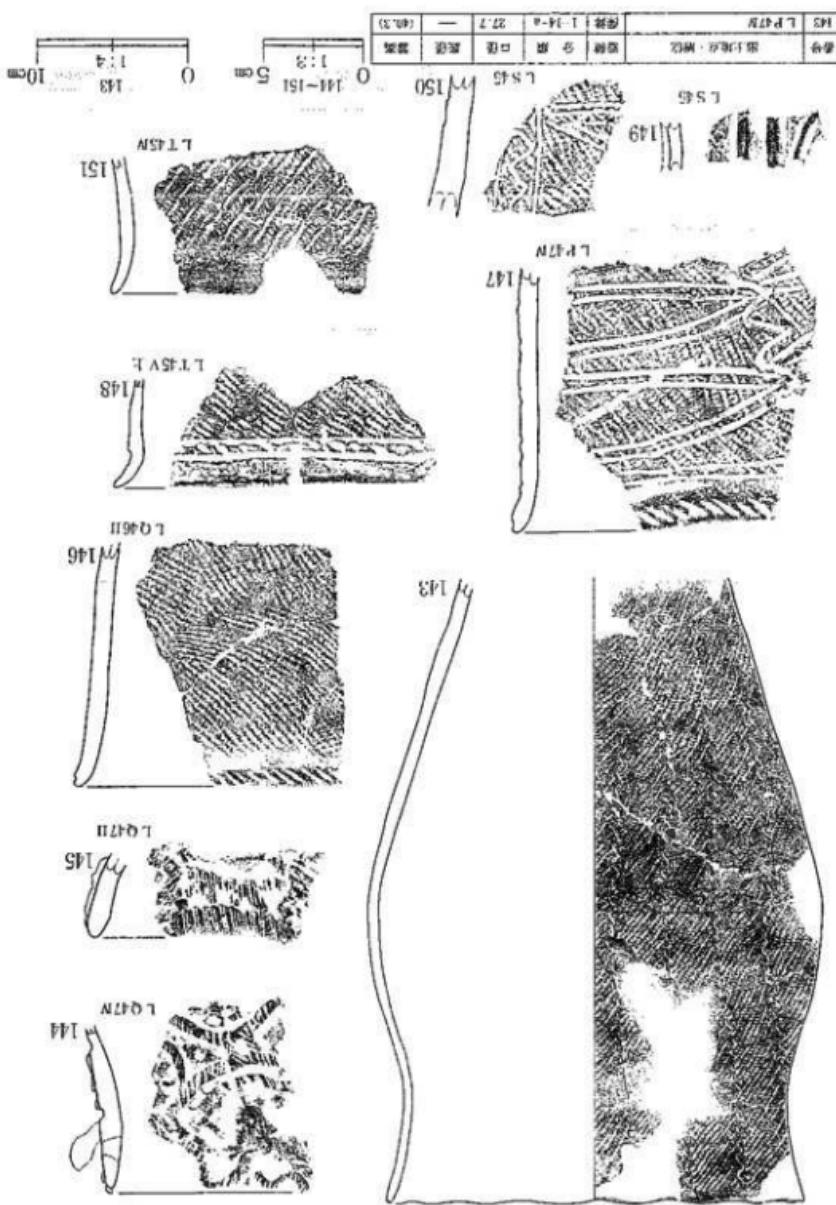
第33図 A区 遺構外一捨て場一出土土器(5)

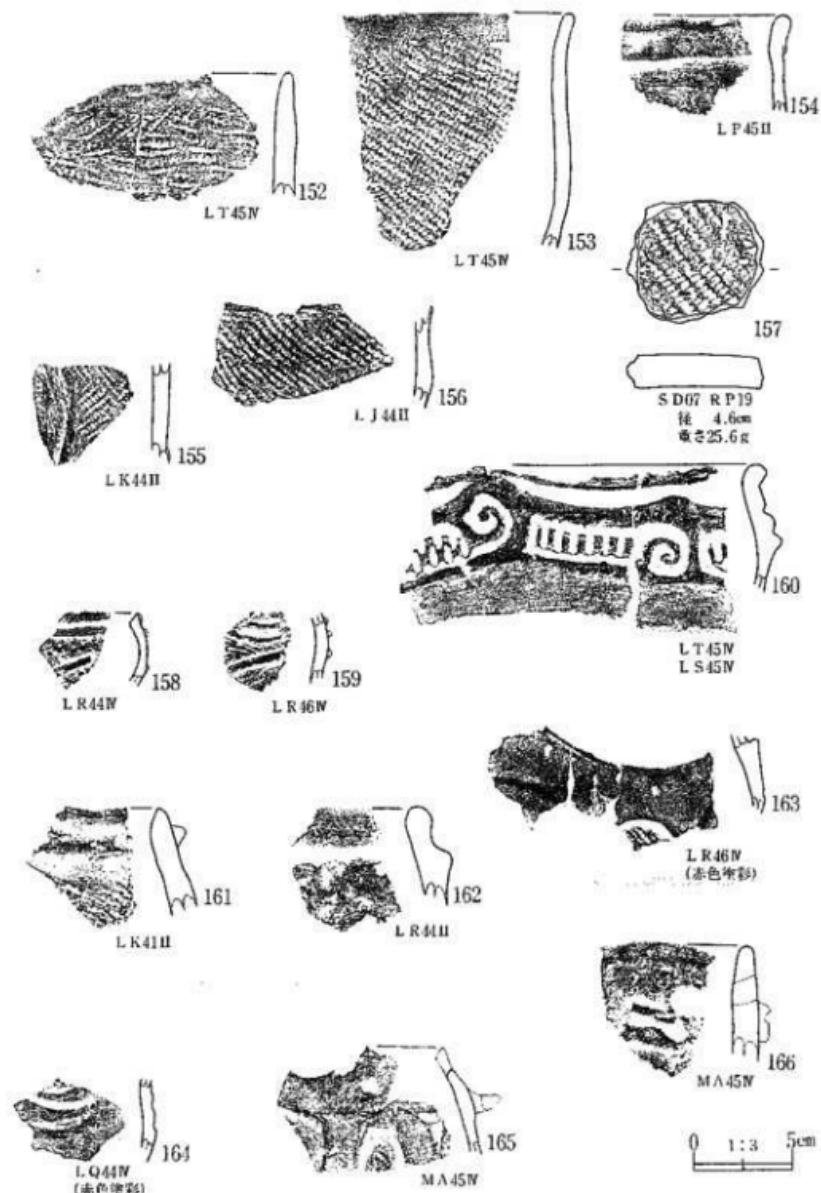


番号	出土地点・層位	鉢輪	分類	口径	底径	高さ
138	挖て場地	深鉢	B-2	(39.5)	13.0	(46.5)
140	L.P 47W	深鉢	I-11-b	(5.0)	—	(12.5)
142	L.R 46	深鉢	I-14-h	40.8	—	(12.0)

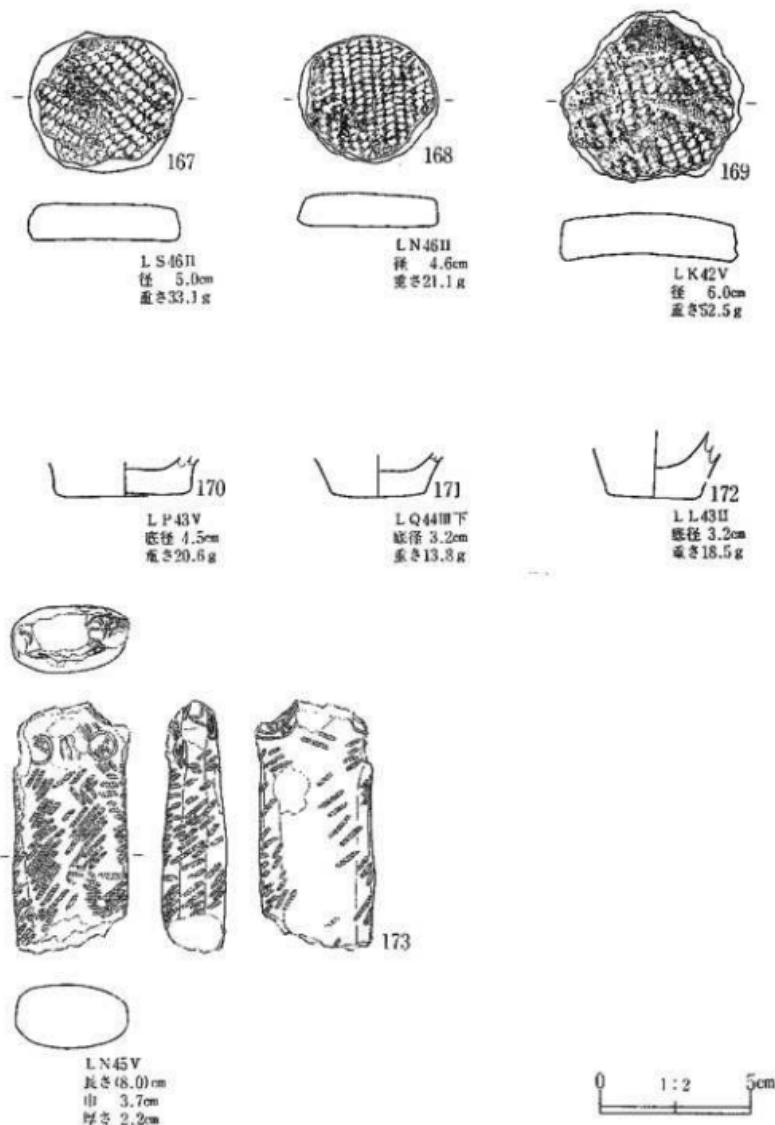
第34図 A区 遺構外・捨て場(6)・遺構外出土土器(1)

第35圖 A區 鐵器出土工具(2)

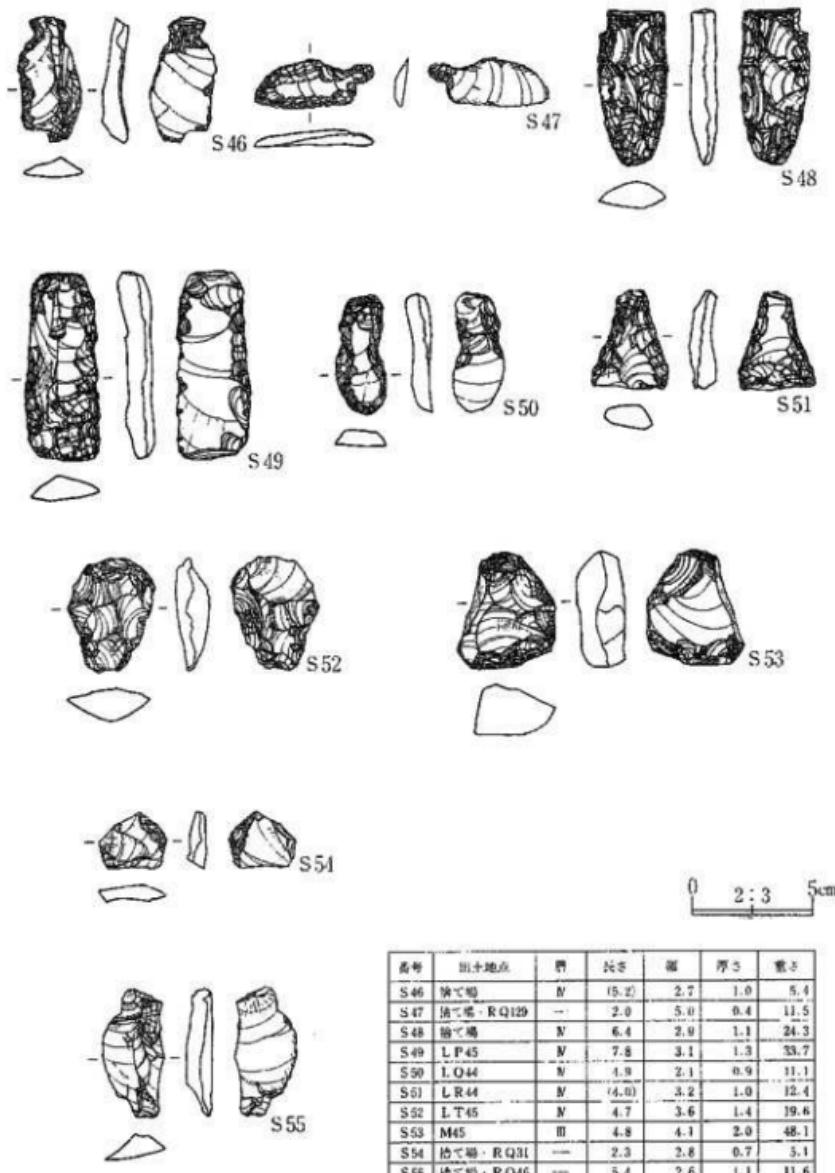




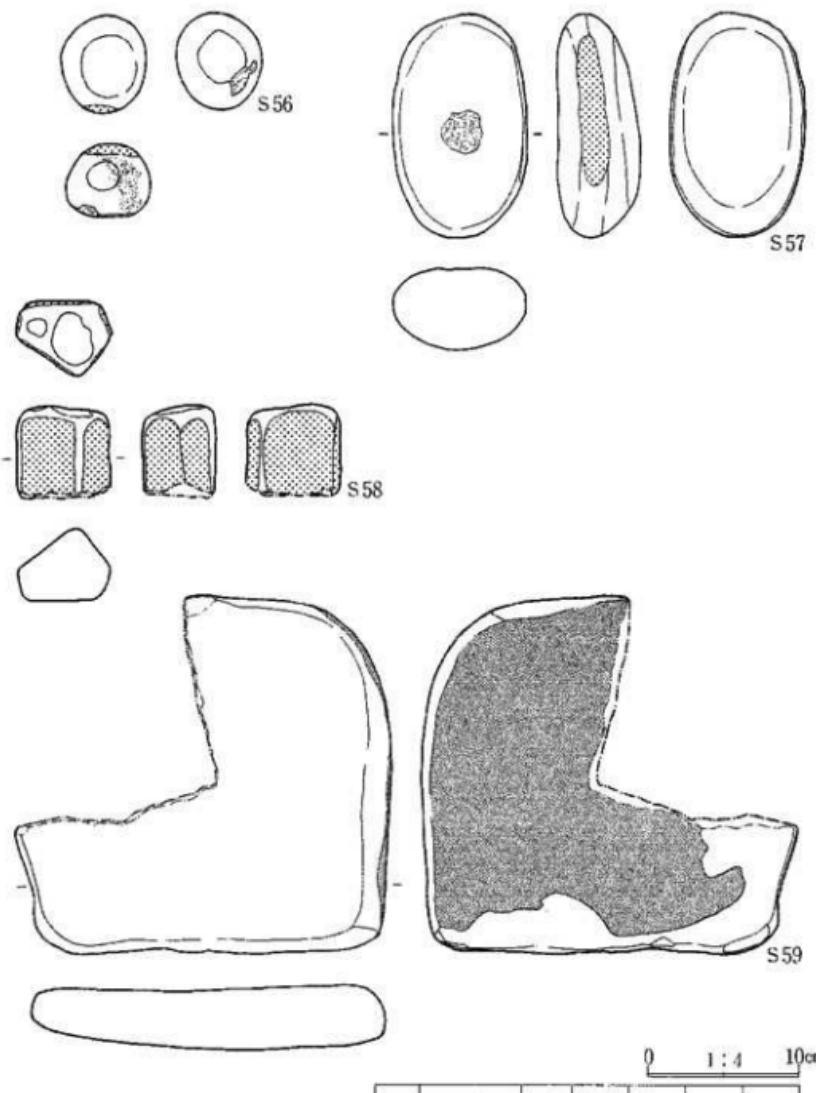
第36図 A区 造構内・外、捨て場出土土器(深鉢、浅鉢、壺)



第37図 A区 造構外出土土製品



第38図 A区 遺構外一(捨て場)-出土石器(1)

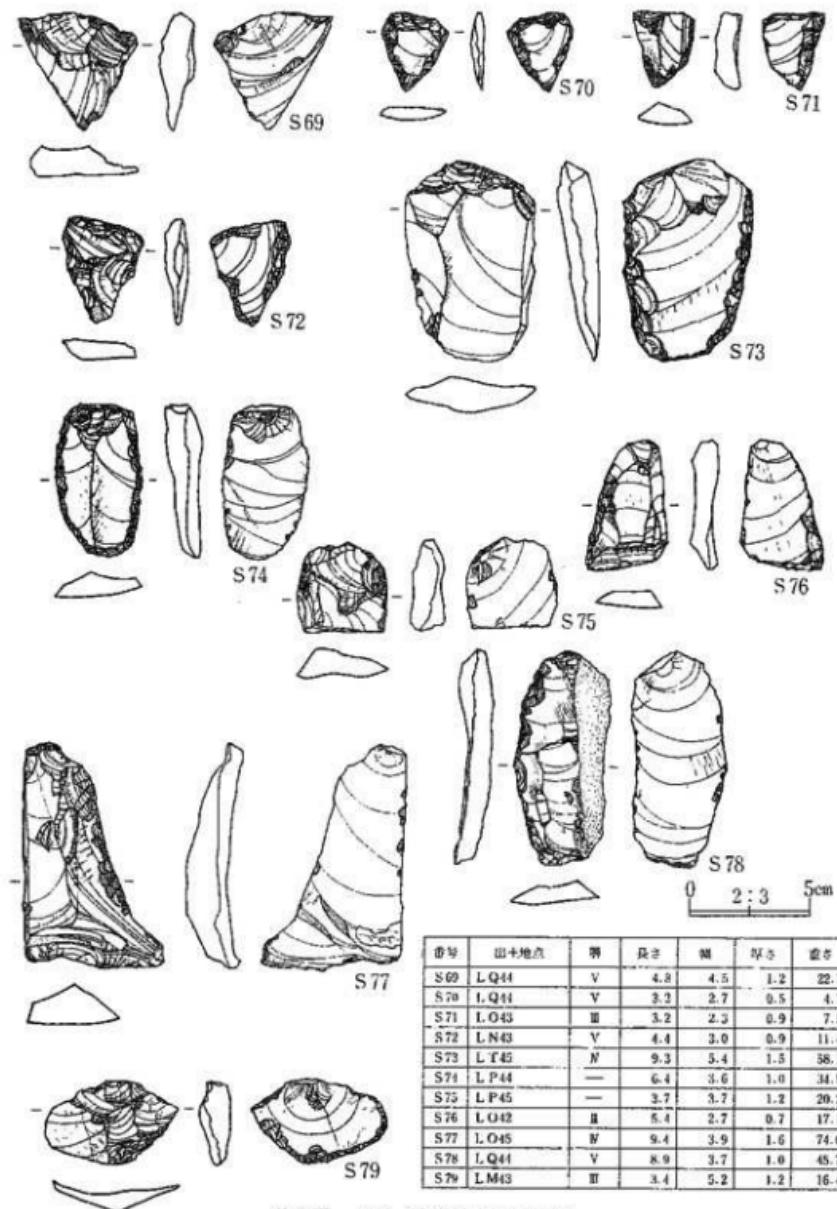


番号	出土場所	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S 56	捨て場	Ⅲ	6.4	5.6	5.0	263.8
S 57	L.S 44	Ⅲ	14.8	9.9	5.6	1,062.1
S 58	L.R 45	Ⅲ	(6.1)	6.3	4.9	263.1
S 59	捨て場	Ⅲ	23.8	25.1	3.9	3,250.0

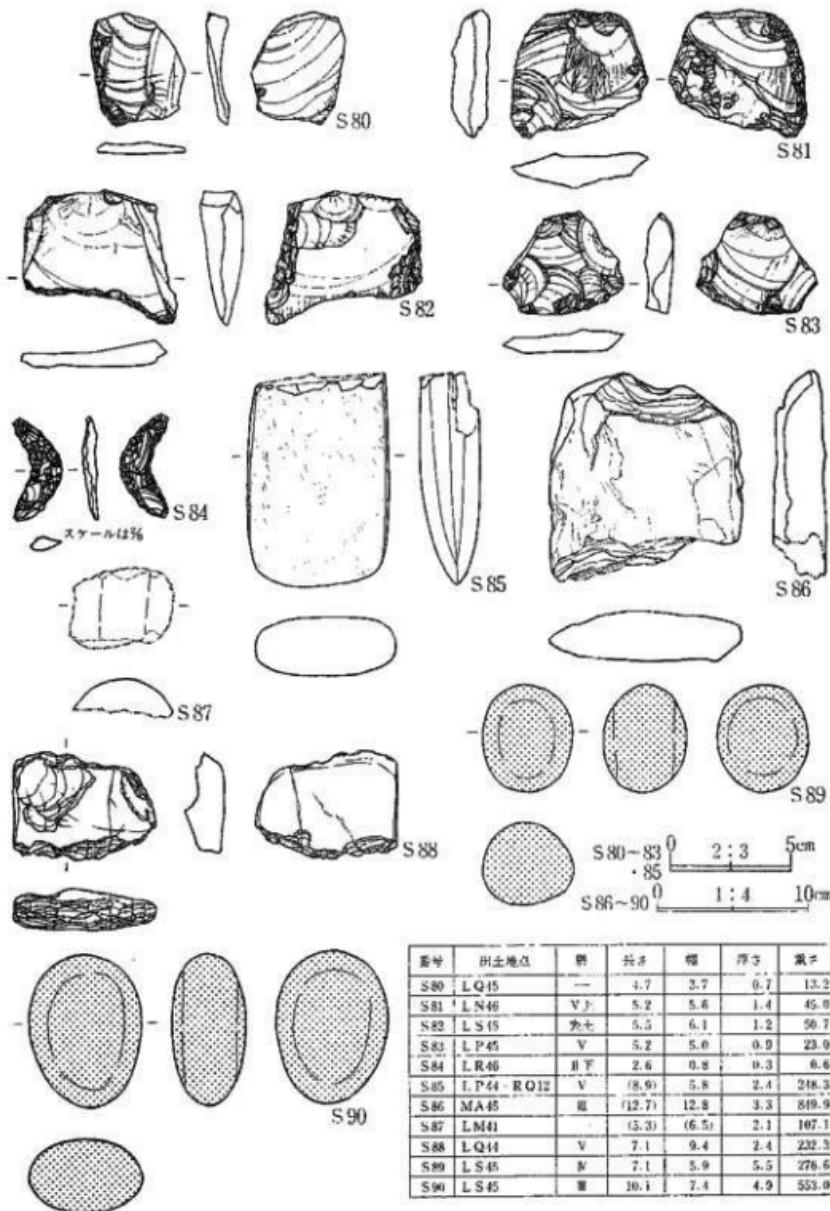
第39図 A区 造構外一(捨て場)ー出土石器(2)



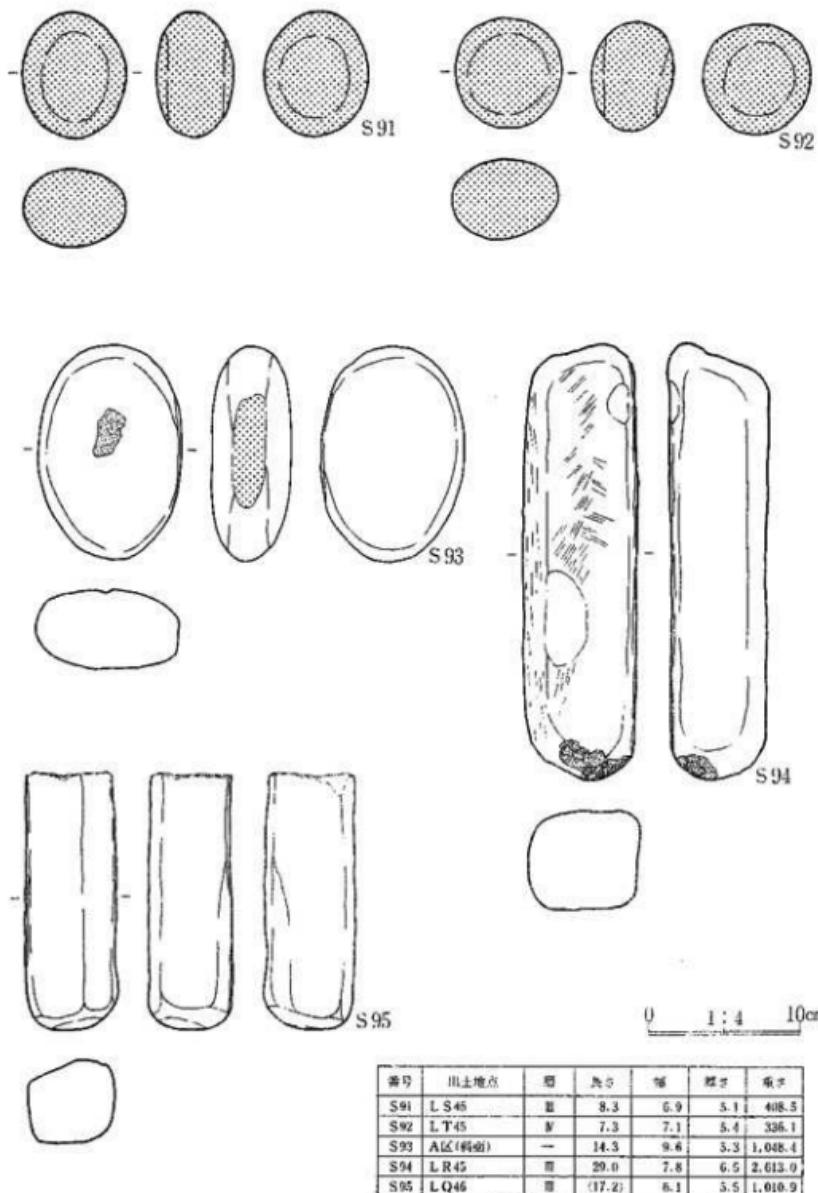
第40図 A区 造構外出土石器(3)



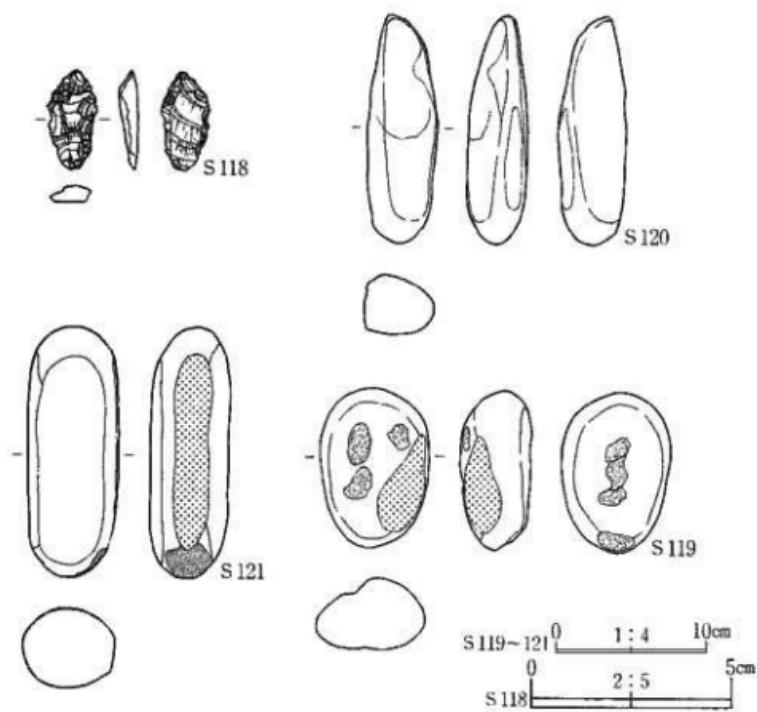
第41図 A区 遺構外出土石器(4)



第42図 A区 造構出土石器(5)



第43図 A区 遺構外出土石器(6)



第44図 A区 遺構外出土石器(7)

番号	出土場所	形	長さ	幅	厚さ	重さ
S118	MG50	V	2.5	1.0	0.4	1.3
S119	L L41	—	10.6	7.2	4.7	69.6
S120	MG50	V	15.2	4.6	3.9	381.1
S121	L L41	—	16.6	6.0	5.2	747.6

然礫が散在していた。鍊の半分は原位置を保っていないと思われるが、石壠炉であった可能性が強い。柱穴は、炉の東側に1ヶ所配置されている。径は0.27m、深さ0.17mである。

遺物は、土器が87点出土した。土器（第57図）の174は土器下半部で、底部から直線的に立ち上がる器形である。176・177は磨消繩文を施した土器で、176は沈線による曲線的な文様を施している。

遺構の構築時期は、出土土器から繩文時代中期後葉と思われる。

SI 69堅穴状居跡（第46図、図版8）

MJ 52グリッドに位置する。SX51を精査中に確認したもので、台地平場の縁辺に構築されていたもので、削平や擾乱によって壁は消失している。SKF70と重複しているが、本遺構が新しい。

床面には凹凸があるが炉と柱穴を確認した。長さ0.09~0.20mの自然礫が、0.30×0.43mの梢円形に堆積する焼土の周間に散在していることから石壠炉であったと思われる。柱穴は、炉の北東1.76mのところに1本検出した。径0.22m、深さ0.35mである。

遺物は土器が25点、石器が2点出土した。土器はいずれも炉周辺の床面から出土した。土器（第51図）の178（RP3）は胴中央部に最大径があり、胴中央部から胴部上半が内窪し、口縁部がやや外反する器形である（I-14-a類）。179（RP2）は梢円形と思われる沈線による曲線的な文様の中に繩文を充填している赤色塗彩の土器である。180（RP1）は土器の下半部である。石器は石錐と削器が各1点（第57図）である。S96は一端が細くなる縦長の剝片を利用して、二次調整を両側縁の背面上のみ施した石錐（I類）である。S97は縦長の剝片の両面の側縁に刃部を作出した削器（I類）である。

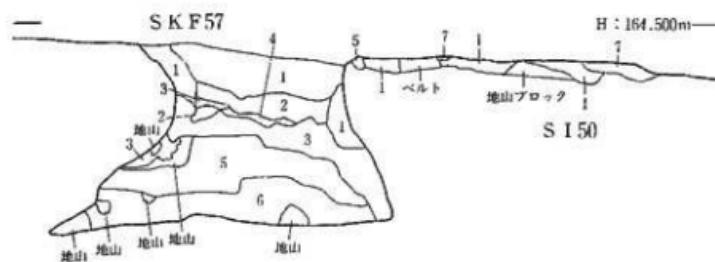
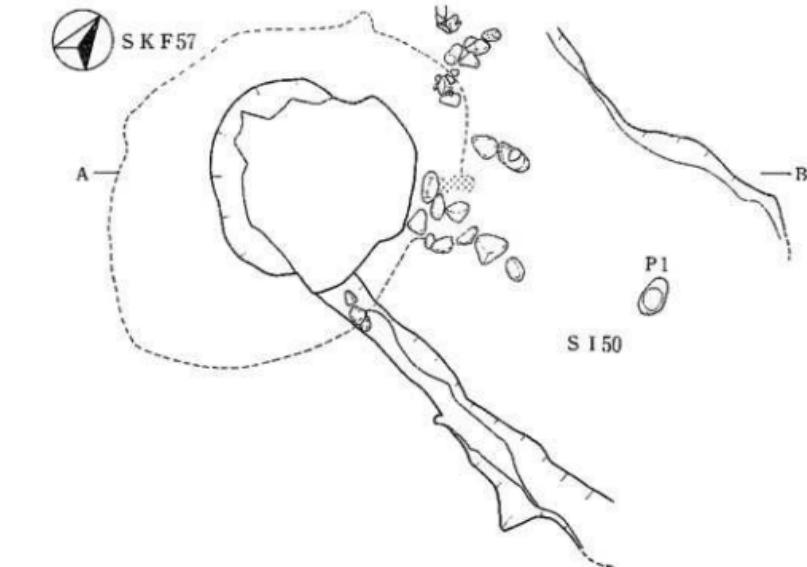
遺構の構築時期は、出土土器から、大木10式期と思われる。

②堅穴状遺構

SK 152堅穴状遺構（第48図）

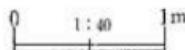
MK46グリッドに位置する。平面形は不整隅丸方形で、断面形は東側が凸レンズ状、西側が凹皿状となる。規模は1辺の長さ2.08m、深さ0.34mである。底面にはあまり凹凸がない。

遺物は土器が56点、石器・剝片が6点出土した。土器（第51図）の181は胴部上半に最大径があり、胴部上半から内窪しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する器形である。胴部上半～口縁部は無文部となり、最大径のある胴上半部に横位の沈線を巡らし、沈線下の繩文地に細く浅い沈線を垂下させた土器である（I-11-a類）。182～184は口縁部破片で、やや肥厚した口縁部は無文部となる。183はやや肥厚した無文の口縁部下に縦位の梢円形の区画文を施し、竹管文を付加した土器である。184は胴部に浅く細い沈線を垂下させている。石器は右

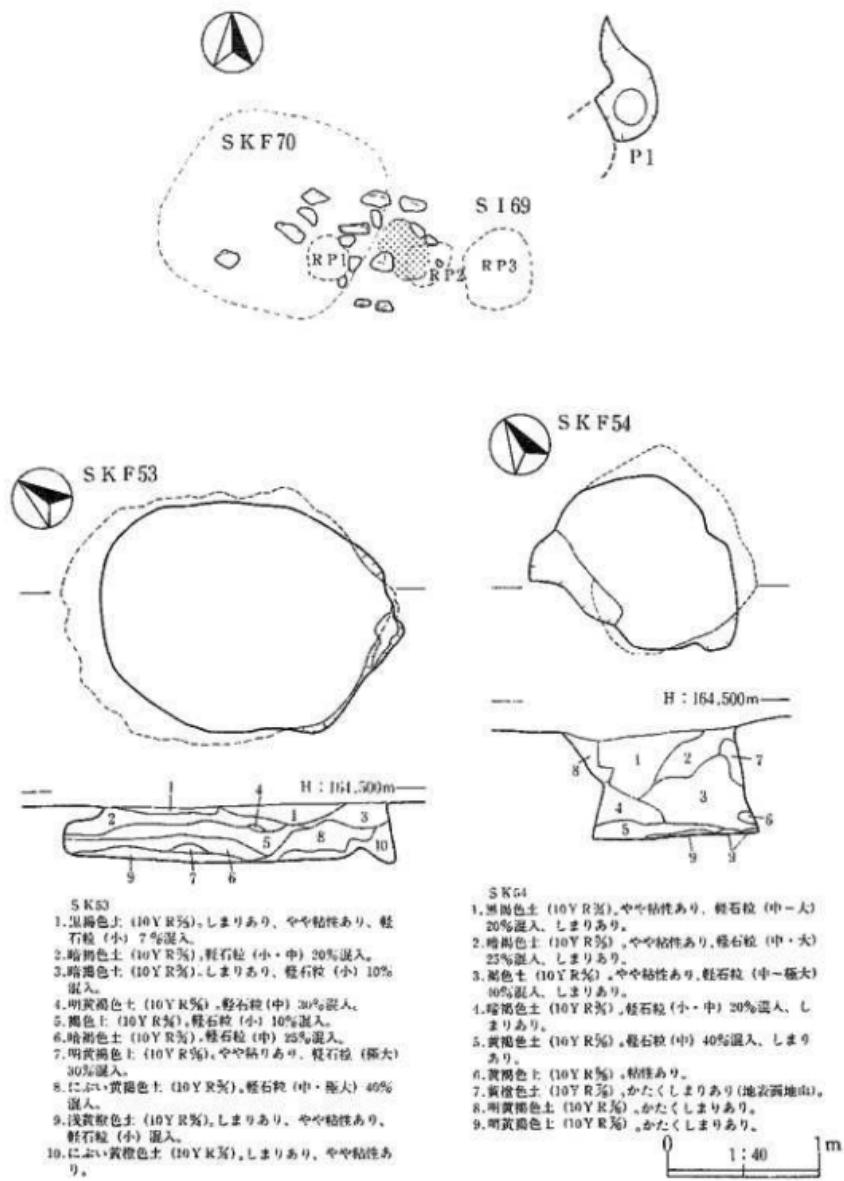


SKF57・S I 50

- 1.暗褐色土 (10Y R 5%).シルト。しまり強い。粘り無し。極小地山粒多い。極小地山ブロック 2%。極小軽石粒多く混入。
- 2.明黄褐色土 (10Y R 5%).シルト。しまり強い。地山粒多量。地山ブロック (極大) 30% 混入。粗石粒 (極大) 1% 混入。粘りなし。
- 3.黒褐色土 (10Y R 5%).シルト。しまりやや強い。地山粒多量。地山ブロック (中) 25% (極大) 1% 混入。炭化物 (小) 1% 混入。粘りなし。
- 4.明褐色土 (7.5Y R 5%).ブロック包含層。しまり硬質。地山粒少し。地山ブロック少し混入。炭化物 (小) (田舎よりは大きい) 混入 3%。焼土。
- 5.暗褐色土 (10Y R 5%).シルト。しまりやや強い。地山粒多量。地山ブロック (小) 40% (極大) 20% 混入。地山ブロック (10Y R 5%)。
- 6.暗褐色土 (10Y R 5%).シルト。しまり強い。地山粒ごく少し混入。粘りなし。
- 7.黒褐色土 (10Y R 5%).シルト。しまり強い。地山粒ごく少し混入。粘りなし。



第45図 B区・S I 50・SKF57



第46図 B区 S I 69・SKF 53・SKF 54

匙が1点（第57図S98）で、直線的な側縁とやや曲線的な側縁をもち一端が尖るもの（I-B類）である。

遺構の構築時期は、出土土器から、縄文時代中期後葉と思われる。

③土坑

S K F53 フラスコ（袋）状土坑（第46図）

MH50グリッドに位置する。平面形は橢円形で、上部が削平されたと思われるが、断面形は袋状を呈する。規模は開口部径1.55×1.90m、底部径1.69×2.20m、深さ0.37mである。底面は平坦である。

遺物は、土器が2点（第52図185・186）出土した。いずれも小破片で、縄文のみを施文している。

S K F54 フラスコ（袋）状土坑（第46図）

MH44グリッドに位置する。平面形は不整橢円形を呈する。断面形は頸部が明確に残るフラスコ状を呈する。規模は開口部径1.03×1.43m、底部径1.18×1.30m、深さ0.49mである。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 55 土坑（第55図）

MH52グリッドに位置する。平面形は橢円形で、断面形は東側が浅皿状であるが、西側はやや深くなり袋状を呈する。規模は開口部径1.63×1.83m、底部径1.70×2.15m、深さ0.17～0.48mである。底面は西側にかなり凸凹があるが、東側は平坦である。

遺物は、土器が2点（第52図187・188）出土した。いずれも小破片であるが、187は口縁部で、無文の赤色塗彩の上器である。188は縄文のみ施文している土器である。

S K 56 土坑（第47図）

MH51グリッドに位置する。平面形は橢円形を呈する。断面形は西側が鍋底状、東側が袋状を呈する。規模は開口部径1.39×1.87m、底部径1.74×2.53m、深さ0.95mである。底面はやや凹凸がある。遺物は出土しなかった。

S K F57 フラスコ（袋）状土坑（第45図・図版8）

MH49グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈する。断面形はフラスコ状を呈する。規模は開口部径1.38m、底部径2.04×1.37m、深さ1.19mである。底面は平坦である。

遺物は土器が91点、石器・剣片が13点出土した。土器（第52図）の190は平口縁で、胴部中央に最大径があり、胴部中央から内窓したまま口縁部に至る器形である。口縁部は折返し口縁風にやや肥厚し、無文である。胴部には細く浅い沈線による長橢円形の区画文、その内外に竹管文を施文した土器である（I-9-b類）。他に189、193～195が出土している。189は土器

の底部である。193～195は胸部に長椭円形の区画文を施文しているもので、194・195の口縁部は無文部となっている。石器は石匙が1点（第57図S105）で、横型で刃部が直線的（III-A類）である。

遺構の構築時期は、出土土器から、縄文時代中期後葉と思われる。

S K 58土坑（第47図）

M J 48グリッドに位置する。平面形は不整椭円形を呈する。断面形は浅皿状を呈する。規模は長軸1.44m、短軸1.21mである。底面は平坦である。遺物は出土しなかった。

S K 59土坑（第47図）

MH50グリッドに位置する。平面形は椭円形を呈する。断面形は浅皿状を呈する。規模は長軸1.03m、短軸0.94m、深さ0.15mである。底面にはかなり凹凸がある。遺物は出土しなかった。

S K 62土坑（第48図）

MG54グリッドに位置し、平面形は不整椭円形、断面形は浅皿状を呈する。規模は長軸1.52m、短軸0.92m、深さ0.35mである。底面は西側半分にかなりの凹凸がある。遺物は出土しなかった。

S K 65土坑（第49図）

斜面のMF49グリッドに位置する。平面形は長椭円形を呈する。斜面上部に向かって掘られた遺構で、西側ではオーバーハングしているが、東側は壁が無い。規模は開口部径0.63～0.7m、底部径0.7×0.92m、深さ0.74mである。底面にはやや凹凸がある。

遺物は土器が21点、石器が5点出土した。土器（第52図）の196は底部である。197は波状口縁を呈し、口縁部がわずかに外反する。口縁部から継位の「匂」文か椭円文と思われる文様を施文し、文様内には充填縄文や刺突文がみられる。198は縄文地に横位の平行沈線を施文し、199は赤色塗彩された無文の土器である。石器は削器、磨製石斧が各1点（第57図）である。S99は継長の剥片の片面の側縁に刃部を作出した削器（I類）である。S100は刃部の形状が円刃・両凸刃（I類）の磨製石斧である。

遺構の構築時期は、出土土器から、縄文時代中期末葉と思われる。

S K F 66フラスコ（袋）状土坑（第48図）

M I 53グリッドに位置する。平面形は不整椭円形を呈し、断面形は頸部が明確に残るフラスコ状を呈する。規模は開口部径1.47×1.83m、底部径1.82×2.45m、深さ0.81mである。底面はほぼ平坦である。

遺物は、土器が19点出土したが、いずれも副部の小破片である。土器（第52図）の200は縄文のみの施文、201は無文である。

遺構の構築時期は、出土土器から、縄文時代中期後半と思われる。

S K 67土坑（第48図）

M I 53グリッドに位置する。平面形は橢円形を呈し、断面形は鍋底状を呈する。規模は長軸1.23m、短軸1.02m、深さ0.29mである。底面はほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

S K F 68フラスコ（袋）状土坑（第49図）

平坦部の東側肩部MG 49グリッドに位置する。遺構の下部まで削平されているため本来の形状を留めていない。平面形は隅丸方形を呈し、断面形は袋状を呈する。規模は開口部径2.03m、底部径2.48m、最深1.09mである。底面は平坦である。

遺物は土器が38点、石器・剝片が12点出土した。土器（第53図）の204は波状口縁で、胴部に「S」状文を施し、文様間の縄文を磨り消した土器である（I-13-a類）。202~206は小破片である。202・203は頸部から上が内窵して無文部となっており、203は頸部と胴部の境に1条の沈線と刺突文を巡らしている。205・206は壺形の把手付土器の胴部破片であるが、把手が欠損している。石器は削器、石籠、搔器が4点（第57図）出土している。削器は2点で、S 101は縦長剝片の片面の側縁に刃部を作出したもの（I類）である。S 104は、欠損しているが、不整な橢円形を呈していたものと思われ、剝片の片面の側縁に弧状の刃部を作出したもの（II類）である。石籠は1点（S 102）で、平面形が橢円形を呈し、刃部が丸刃・両刃（II類）である。搔器は1点（S 103）で、裏面が反っているもの（I類）である。

遺構の構築時期は、出土土器から、縄文時代中期末葉と思われる。

S K F 70フラスコ（袋）状土坑（第48図）

M J 53グリッドに位置し、S X51を精査中に検出した。S I 69と重複しているが、本遺構が古い。平面形は不整円形を呈する。断面形は頸部が明確に残るフラスコ状を呈する。規模は開口部径1.56m、底部径1.92m、深さ0.96mである。底面は平坦である。

遺物は、土器が33点出土した。土器（第52図）の207は赤色塗彩の土器である。208は縦位に3条の沈線を施文しており、209は頸部～胴部の破片で、頸部は無文、胴部には縄文を施文している。210は胴部破片で、縦位に長楕円形の区画文を施文している。

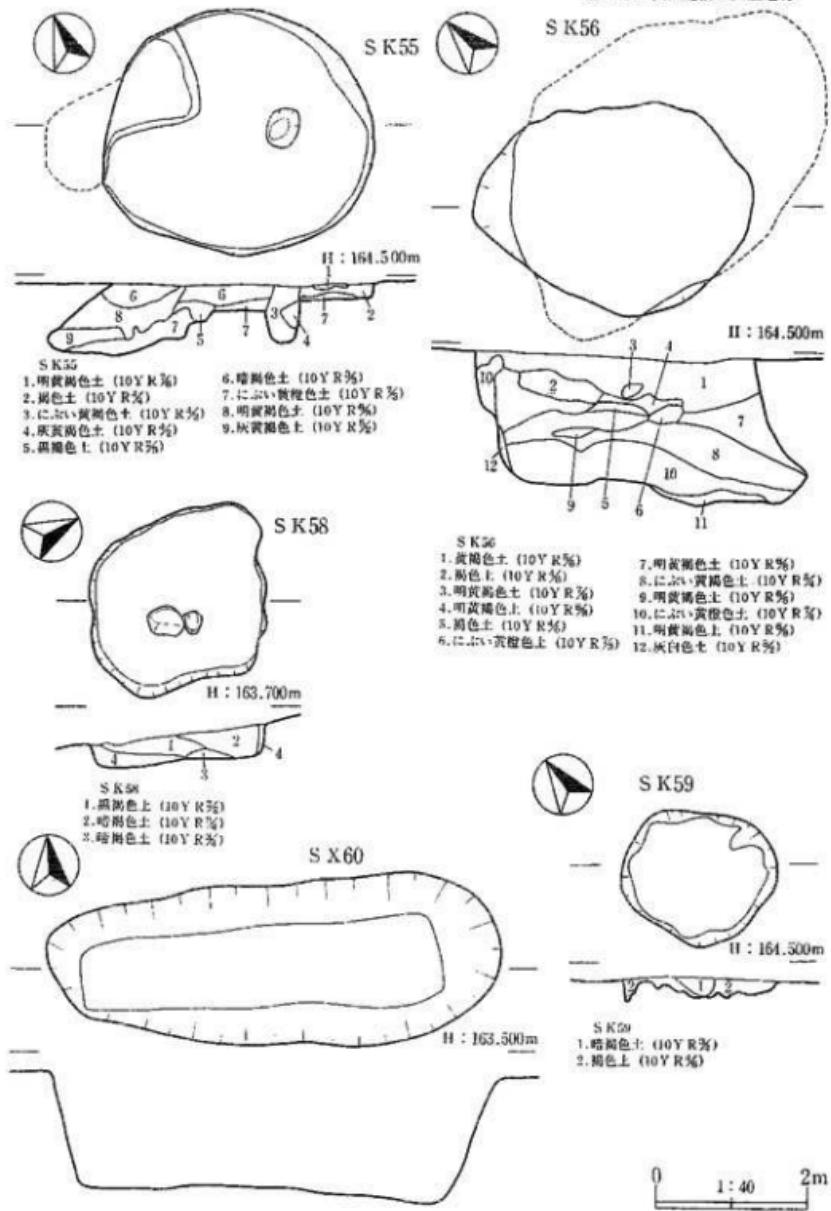
遺構の構築時期は、出土土器から、縄文時代中期後葉と思われる。

④焼土遺構

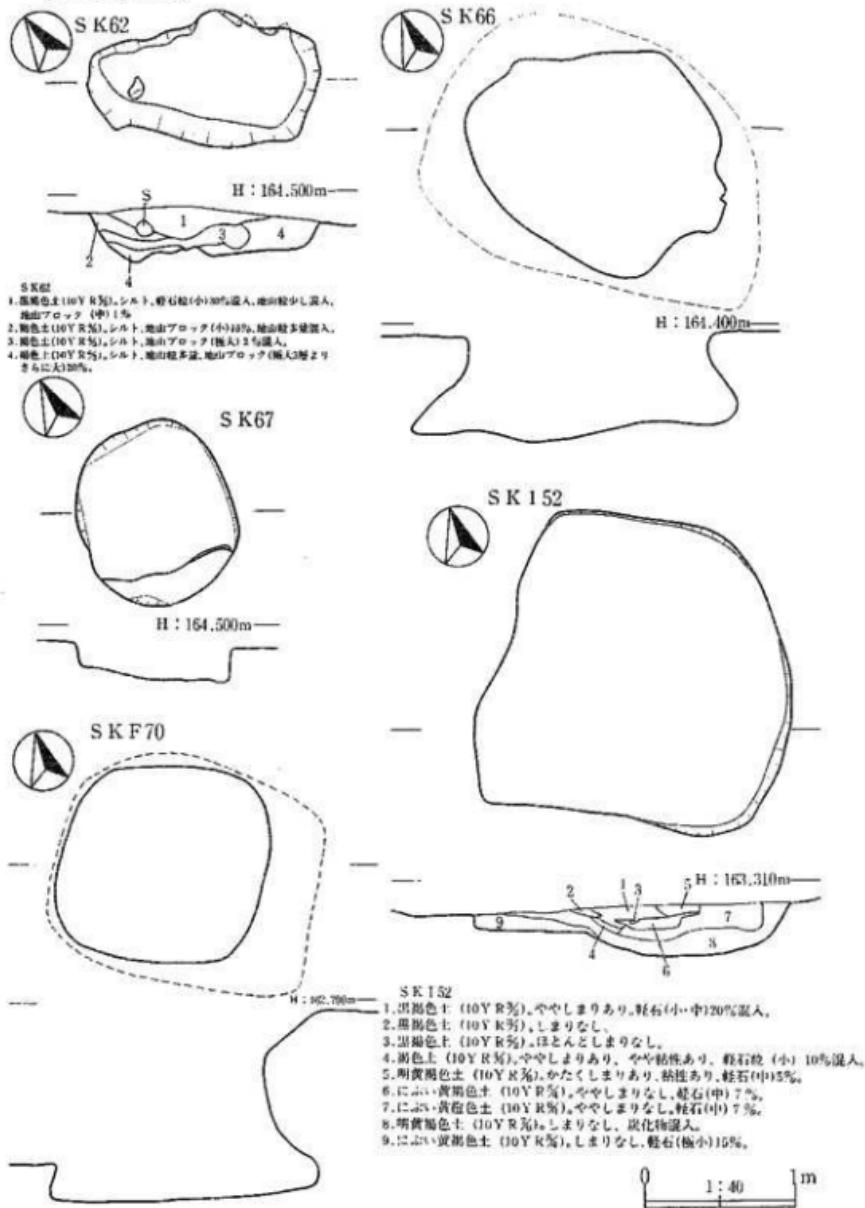
S N61焼土遺構（第15図）

MF 51グリッドに位置する。北側は擾乱されている。平面形は不整長方形を呈し、長軸1.88m、短軸1.18mである。焼土の下に掘り込みがあり、断面形は浅皿状を呈し、深さは0.20mである。

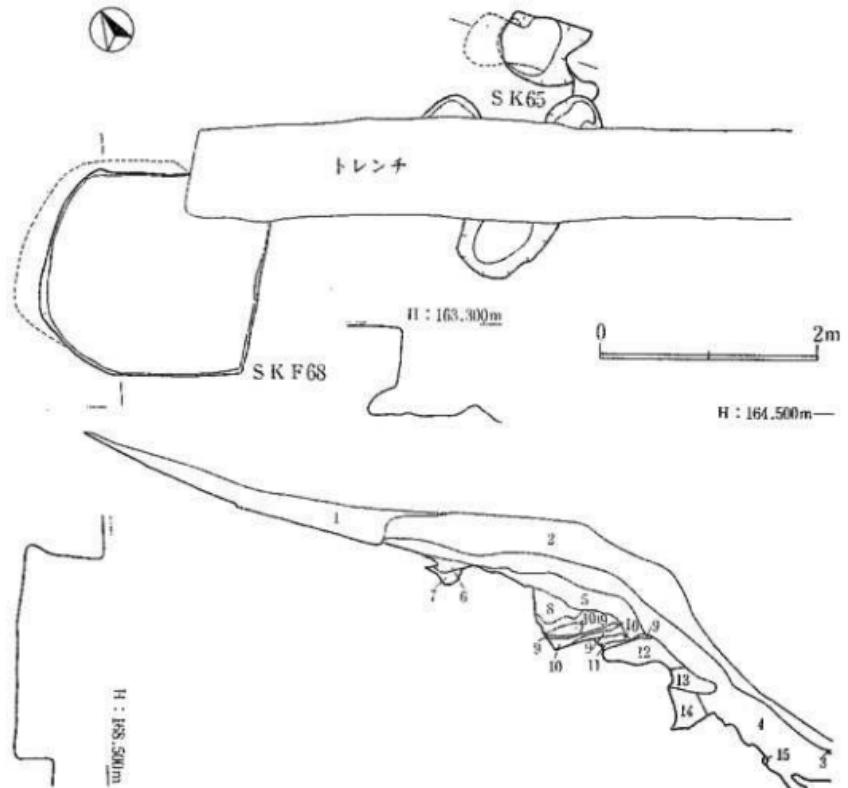
第2節 検出遺構と出土遺物



第47図 B区 SK55・SK56・SK58・SK59・SX60



第48図 B区 SK 62・SK 66・SK F 70・SK 67・SK 152



- SK65**
1. 表土。擾乱、堆山混じりの黄褐色土(10Y R %)。しまりなし。
 2. 表土。暗褐色土(10Y R %)。ややしまりあり。
 3. 明黄褐色土(10Y R %)。
 4. 明黄褐色土(10Y R %)。炭水化合物含む。
 5. 暗褐色土(10Y R %)。ややしまりあり。
 6. 黒色土(10Y R %)。
 7. にじい黄褐色土(10Y R %)。ややしまりなし。
 8. にじい黄褐色土(10Y R %)。やや粘性あり。軽石粒(大・極大)15%含む。
 9. 黄褐色土(10Y R %)10層混在。軽石粒(小・中)25%混入。やや粘性あり。
 10. 黑褐色土(10Y R %)。しまりあり。軽石粒(小・中)5%混入。
 11. 黄褐色土(10Y R %)。やや粘性あり。
 12. 黑色土(10Y R %)。軽石粒(中)70%混入。
 13. 暗褐色土(10Y R %)。しまりなし。
 14. 暗褐色土(10Y R %)。しまりあり。明黄褐色土(10Y R %)混生。
 15. 黑色土(10Y R %)。しまりなし。

第49図 B区 SK65・SKF68

遺物は、土器が1点（第53図211）出土した。口縁部がわずかに外反し、胴部上半には沈線による曲線的な文様を横位に施文している。

遺構の時期は、出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式期と思われる。

S N63焼土遺構（第15図）

MG54グリッドに位置する。平面形はダルマ状を呈し、長軸1.53m、短軸0.93mで、焼土の厚さは0.04mである。焼土の下に掘り込みがあり、断面形は浅皿状を呈し、深さは0.34mである。堆積土の上部に焼土塊が混入している。遺物は出土しなかった。

S N64焼土遺構（第15図）

MF52グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸0.28m、短軸0.13mである。地面上に焼けた痕跡が残っていたものである。焼土下に掘り込みなどはなかった。

遺物は、土器が1点（第53図212）出土した。胴部上半がやや内湾する器形で、横位に曲線的な沈線を施文している土器である。

遺構の時期は、出土土器から、縄文時代中期後葉と思われる。

⑤性格不明遺構

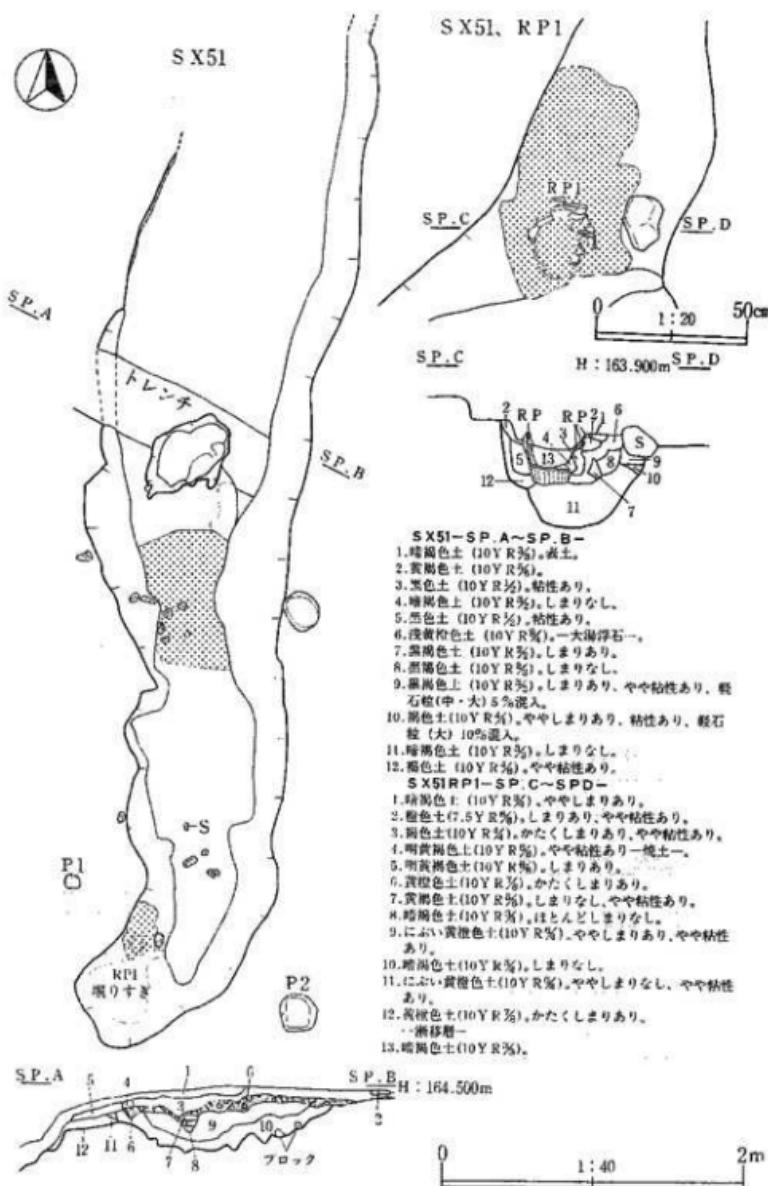
S X51性格不明遺構（第50図、図版9）

MJ48～MJ53グリッドにかけて溝状に東西に伸びる。断面形は浅皿状である。全長14.04m、最大幅2.62m、最深0.84mである。底面にはかなり凹凸がある。遺構中央の最深部には長軸1.40m、短軸1.00m、深さ0.46mの規模をもつ梢円形の土坑があり、その南隣に底面よりやや上に0.92×1.65mの範囲で焼土を検出した。

また、南端部の底面には土器埋設炉を検出した。炉体土器は、径0.49m、深さ0.27mの掘方をもち、正立埋設されていた。その周囲には、0.43×0.97mの範囲で、焼土が広がっていた。

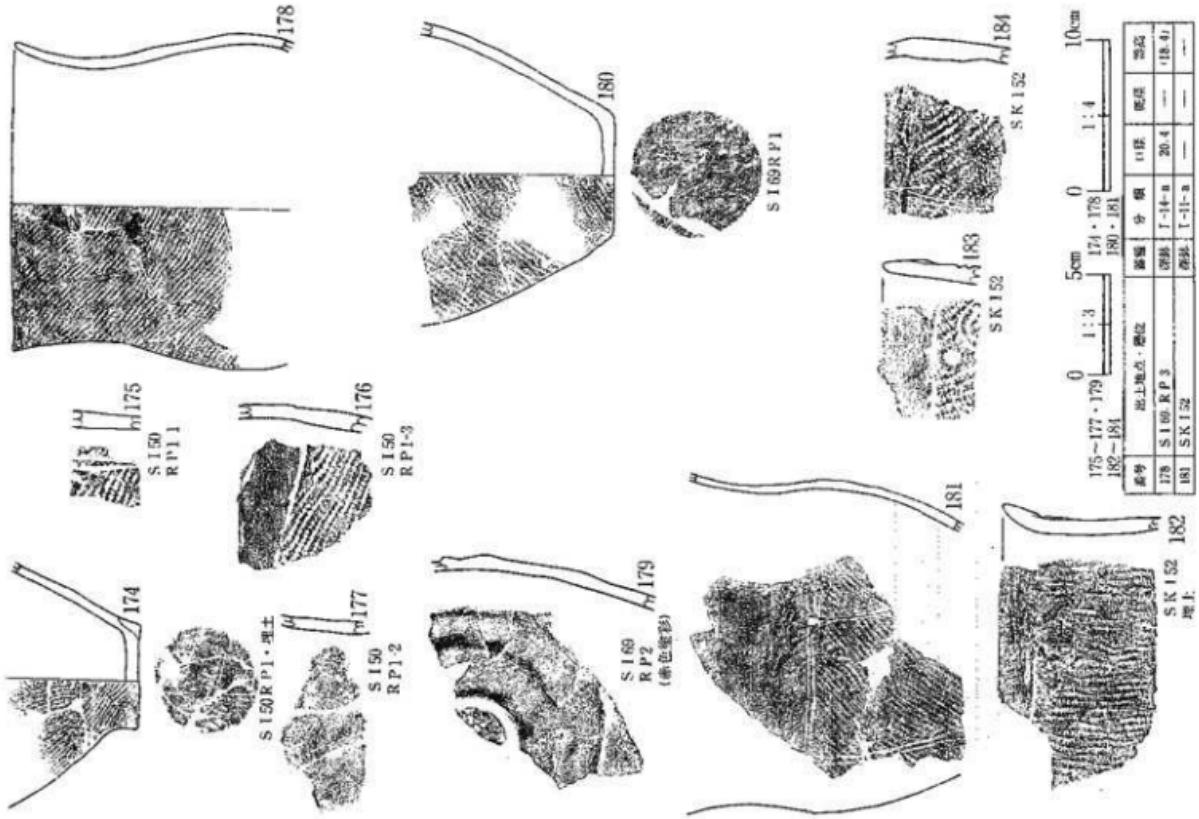
S X51の外には柱穴があり、炉から0.8m西にP1が、1.80m東にP2があり、土器埋設炉と柱穴は堅穴性居跡のものである可能性はあるが、断定しがたいため、ここではS X51の中で扱った。

遺物は土器が888点、石器が43点出土した。土器（第54図）の213は炉体に使用された土器で、胴部下半のみの残存で、底径が小さく直線的に外反して立ち上がる器形である。216・219は沈線による横位の「S」状文を施文している土器かと思われ、216は充填縄文である。217は両側を縦線で画し、内部を無文としたもので、赤色に塗装されている。218・220～222は平口縁の口縁部片で、218・220は口縁部が無文となり、221は沈線による梢円形文の内部に刺突を施文している土器である。222は口縁部直下から長梢円形文を縦位に施文している土器である。石器は石鏃、削器、微小剝離痕のある剝片、磨製石斧、擦石である（第58～59図）。石鏃は1点

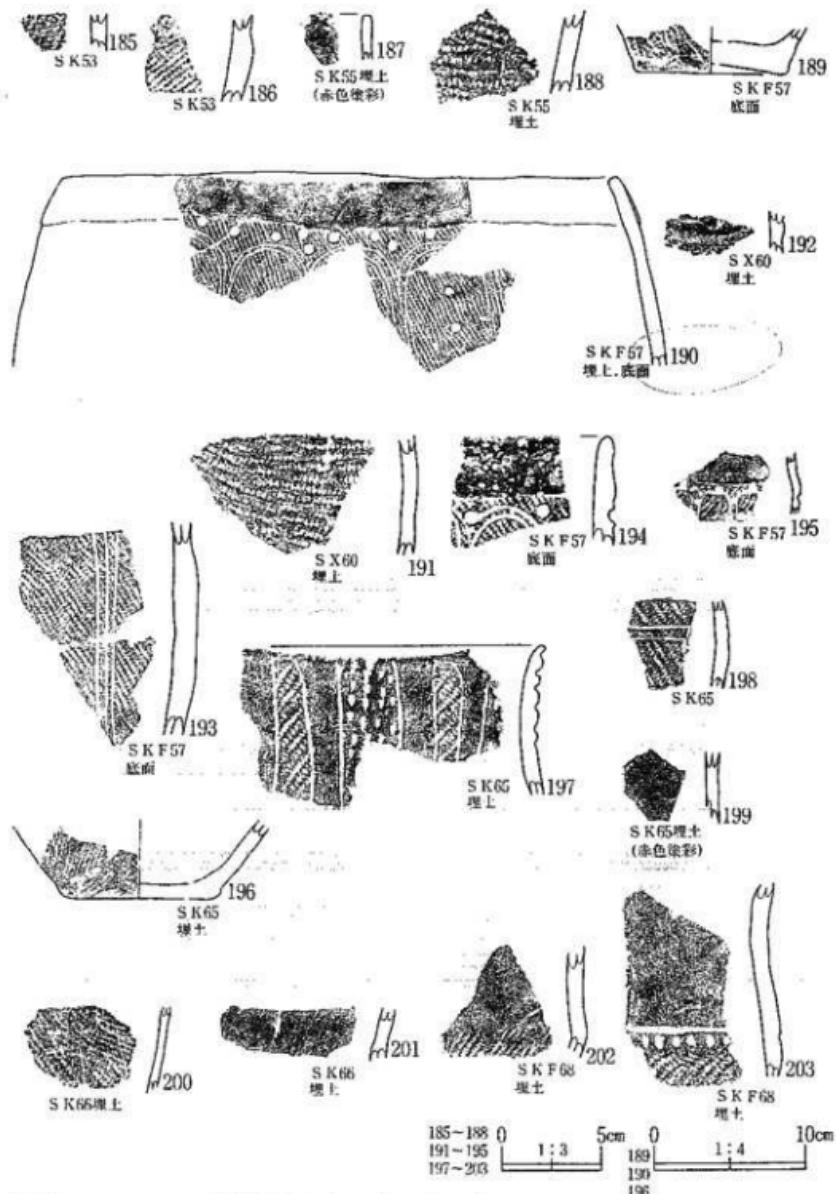


第50図 B区 S X51

解4章 調査の記録



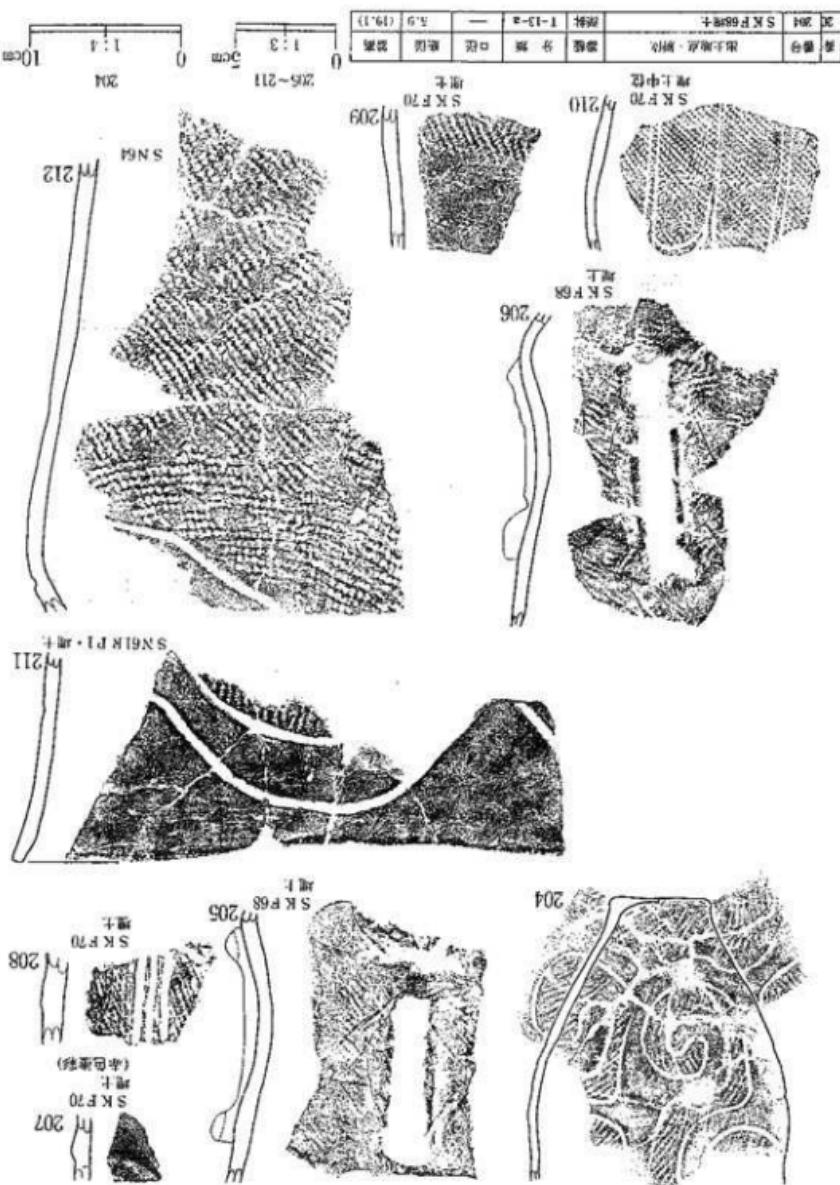
第51図 B区 遺構内出土器(1)



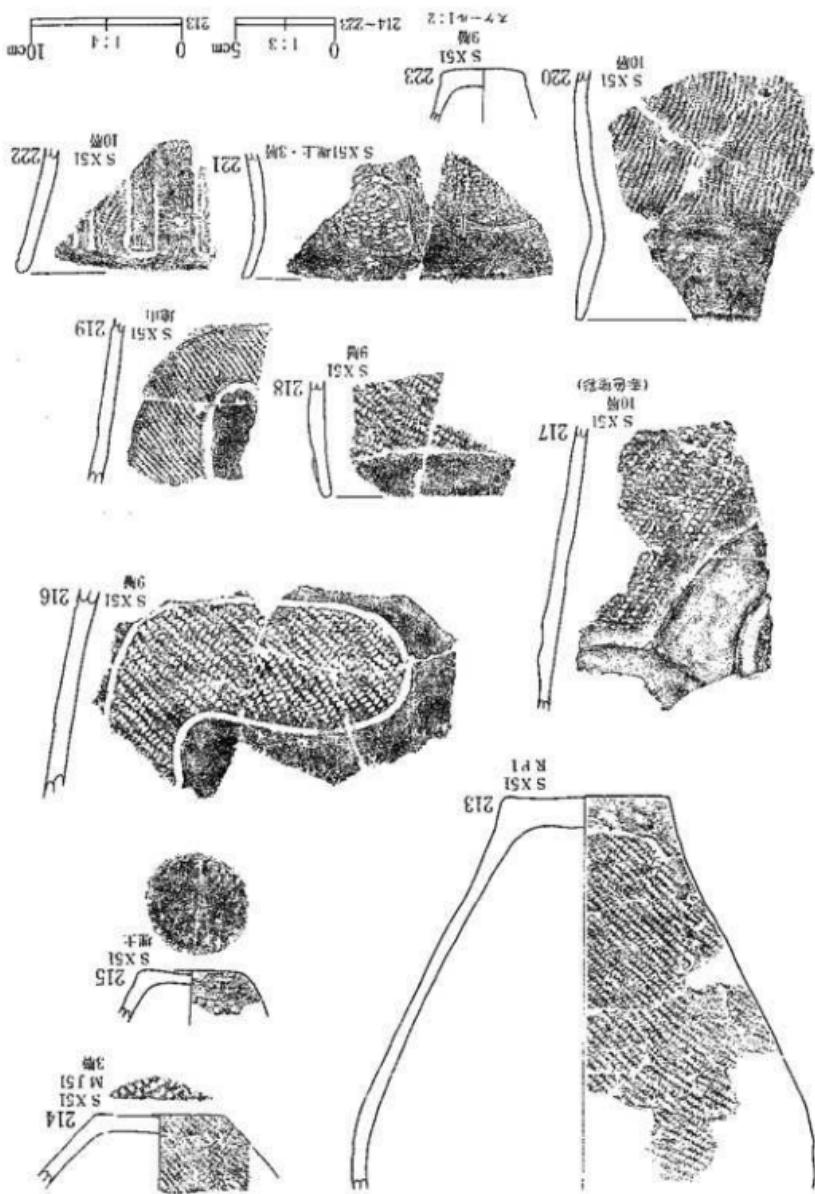
番号	出土地点・部位	器種	分類	口径	底径	器高
190	SKF57 墓土, 底面	壺鉢	1-9-b	(37.0)	—	(12.0)

第52図 B区 遺構内出土土器(2)

第53圖 日本 遺跡出土土器(3)

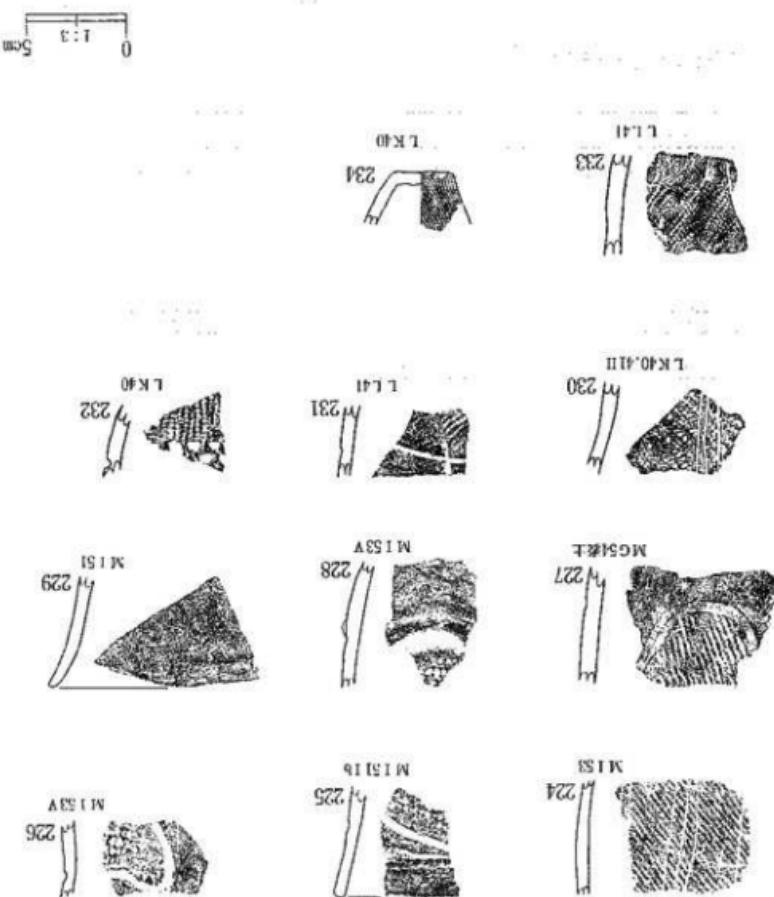


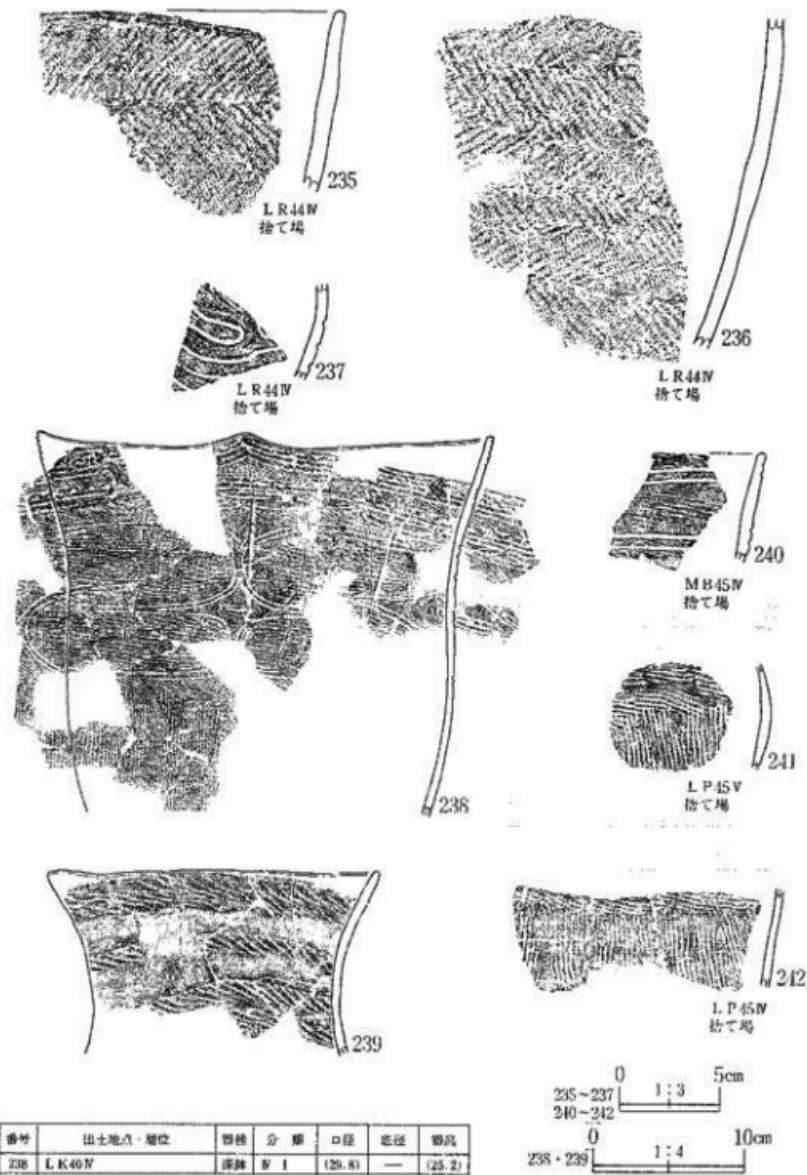
第54圖 B區 遷都內出土土壤(4)



第2圖 掘出土壤之出土土壤

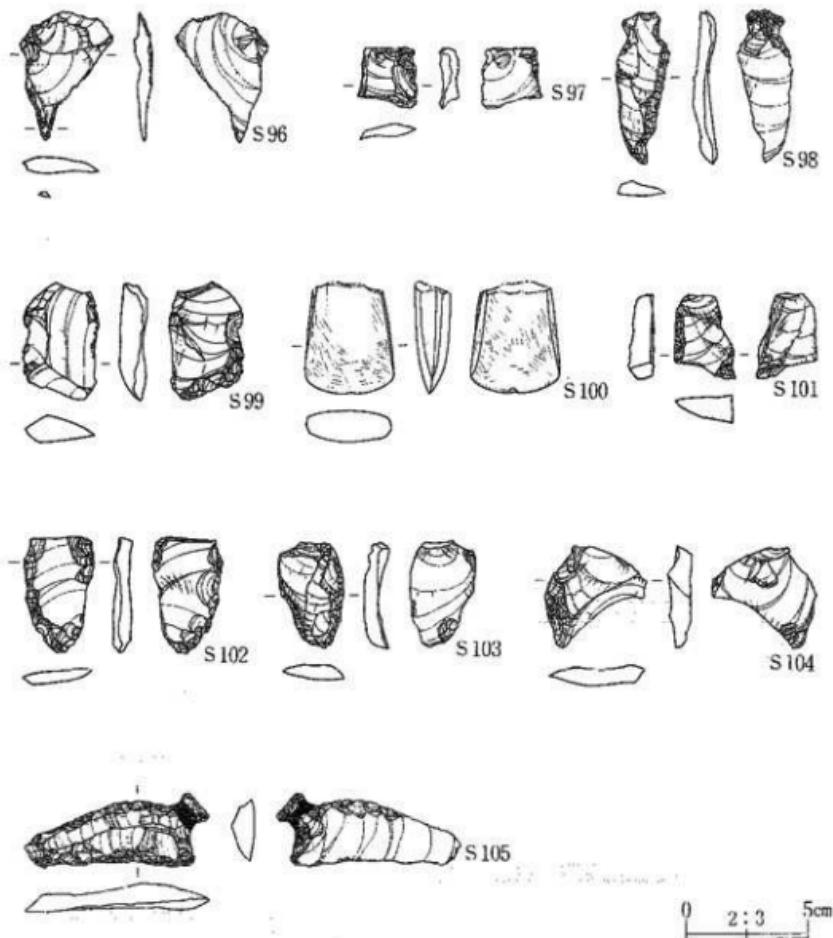
圖554 日本 遺構外出土土器(1)





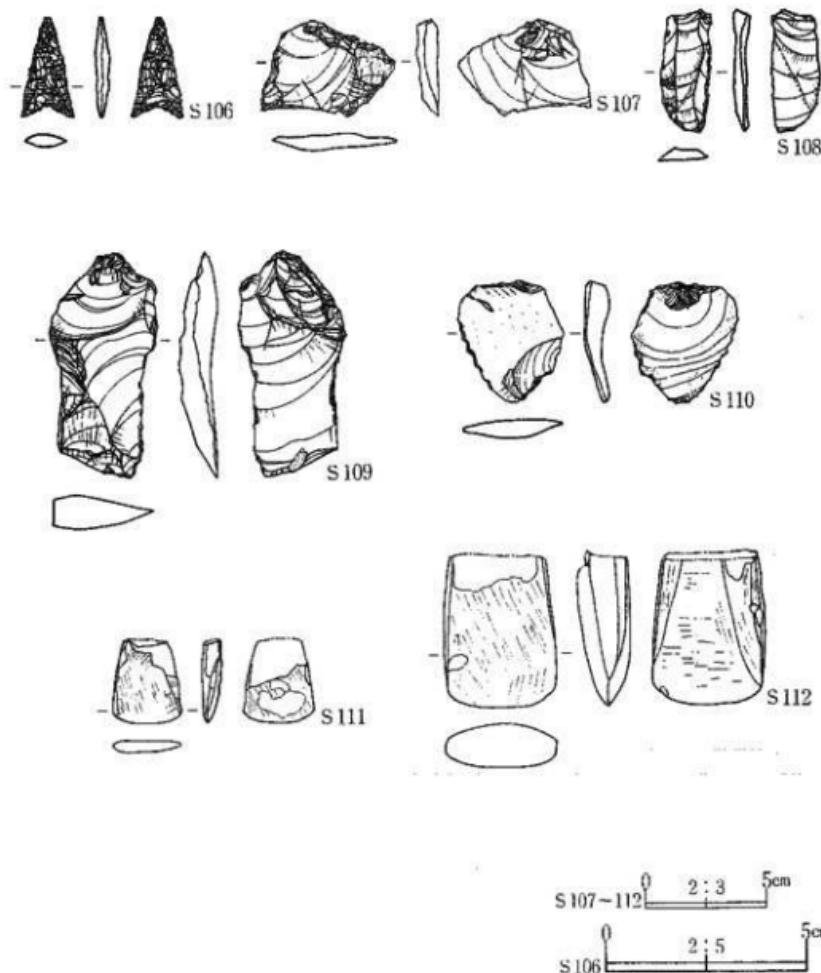
番号	出土地点・層位	器種	分類	口径	底径	高さ
238	LK 40N	壺	N-1	(29.8)	—	(25.2)
239	MJ 50Ⅱ土 MJ 49表土	壺	N-2	21.9	—	(12.0)

第56図 A・B区 遺構外縄文(前期・後期)、弥生出土土器



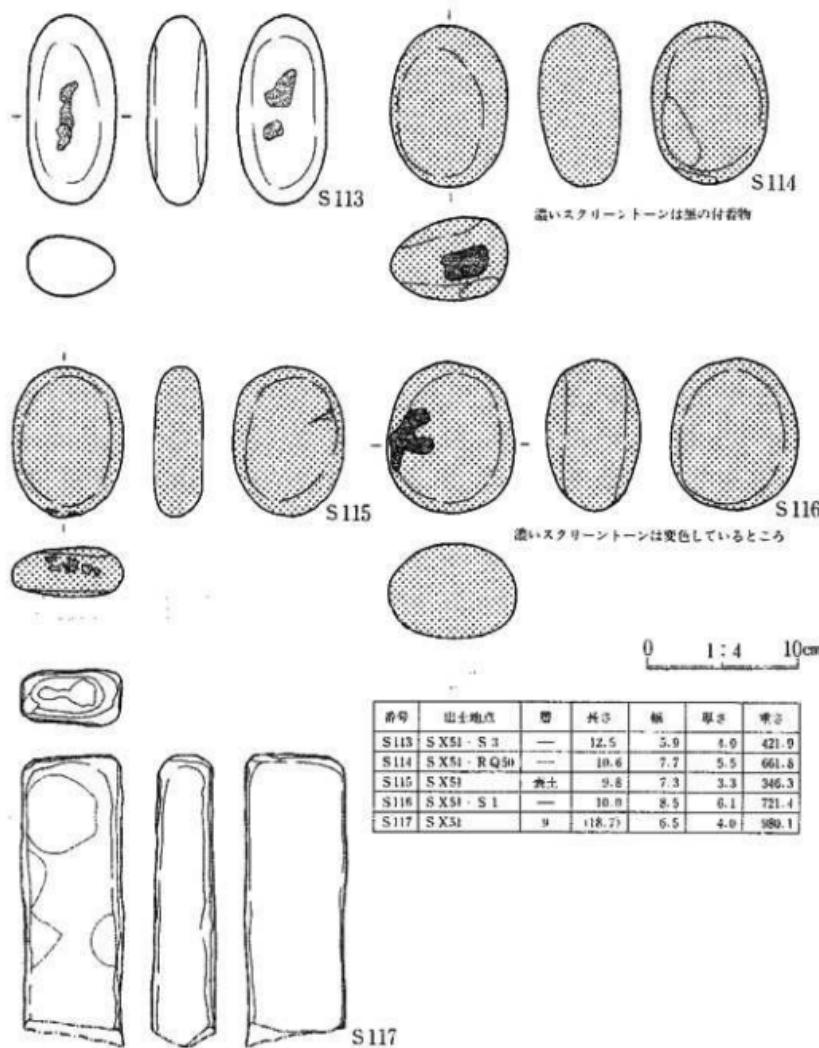
番号	出土地点	層	長さ	幅	厚さ	重さ
S 96	S 150	埋土	5.3	3.9	0.7	7.6
S 97	S 150	埋土	2.5	2.5	0.5	4.4
S 98	S K 152	埋土	6.3	2.3	0.7	8.5
S 99	S K 65	埋土	4.8	3.2	1.0	16.2
S 100	S K 65	埋土	4.6	3.7	1.5	41.2
S 101	S K F 68	埋土	3.5	2.5	1.0	7.8
S 102	S K F 68	埋土	4.8	2.9	0.7	10.8
S 103	S K F 68	埋土	4.4	2.8	0.8	8.9
S 104	S K F 68	埋土	4.2	4.3	1.0	12.1
S 105	S K F 57	埋土	4.6	7.7	1.0	20.5

第57図 B区 造構内出土石器(1)



番号	出土地点	形	長さ	幅	厚さ	重さ
S106	S X51 - R Q 1		2.5	1.0	0.3	0.8
S107	S X51	9	3.9	5.1	0.7	14.0
S108	S X51	10	5.0	2.0	0.5	6.4
S109	S X51	鉢形	9.4	4.3	1.4	59.4
S110	S X51	鉢形	5.1	4.2	0.7	17.5
S111	S X51	9	3.5	2.9	0.5	11.2
S112	S X51 - R Q 3		(6.4)	4.7	1.8	121.6

第58図 B区 構造内出土石器(2)



第59図 B区 遺構内出土礫石器(3)

(S106) で、凹基無茎式 (I類) である。削器は1点 (S107) で、不定形の剥片の片面の1側縁に緩い弧状の刃部を作出したもの (Ⅲ類) である。微小剝離痕のある剥片は3点 (S108~110) である。磨製石斧は2点で、刃部形状はS112が円刃・両凸刃 (I類)、S111が円刃・端凸強凸片刃 (II類) である。凹石は1点 (S113) で、凹面が両面のもの (I-A類) である。擦石は3点で、S114~S116は精円形の素材全面に擦った痕跡をもつもの (I-A類) である。他に長方形の自然石が1点出土している (S117)。

遺構の時期は、出土土器から、縄文時代中期末葉の大木10式期と思われる。

S X60性格不明遺構 (第47図)

MJ 45グリッドに位置する。平面形は長脩円形、断面形は逆台形である。規模は開口部径1.12×2.9m、底部径0.55×2.35m、深さ0.80mである。底面は平坦である。

遺物は土器が3点出土した。土器 (第52図) の191は縄文のみを施文した土器、192は無文の土器である。

(4) B区の遺構外出土遺物

削平されており、地山から上には表土が10cm前後しかなかったので、遺物量は極端に少なかつた。

遺物は土器・石器が出土した。土器 (第55図) の224・230・233は、細く浅い沈線で縦位の平行沈線、もしくは曲線的な文様を施文している。225~228・231は縦位の横円形と思われる文様の中に縄文を施文した土器である。229は口縁部が無文。234は土器の底部である。石器は石錐、凹石、擦石が各1点 (第59図) である。S118は尖基式 (IV類) の石錐である。S119は凹面が両面で、周縁に擦った痕跡をもつ (I-B類) 凹石である。S121は長方形の素材全面に擦った痕跡をもつ (II類) 擦石である。その他に平面・断面形が隅丸長方形の自然碌が1点出土している (S120)。

3 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は、土器が5点、石器が1点出土した。土器 (第56図) の238はA区のSD07の南東端の南側で、239はB区、240~242はA区の捨て場から出土したものである。238は口縁部が波状を呈し、頸部がくびれて胴部が少し張り出す深鉢形土器であるが、胴部下半を欠失している。文様帶は口縁部と頸部に認められる。口縁部文様帶には、右下がりの斜行縄文施文後に、5条1単位と3条1単位の2段の平行沈線を巡らし、各単位の沈線間 (上段は上から2条目と3条目間、下段は1条目と2条目間) に交互刺突による浮線波状文を1条目出している。下段の平行沈線の下位に、空間部を短沈線で充填した変形工字文を施文している。頸部文様帶には、

横走する0段燃りの縄巻繩文を施文後に、2条1組の沈線で連結する幅広なS字・逆S字の区画を巡らし、連結部の空間に沈線による横長な精円文を充填している。胸部には0段燃りの縄巻繩文を縱位に施文しているが、頸部文様帶の境には、右下がりの斜行繩文を施文している（N-1類）。239は、平口縁で口縁部が大きく外反する壺形土器であるが、肩部以下を欠失している。口縁部から頸部にかけて、繩文部と無文部が、それぞれ交互に帯状となって横位に配されている土器である。繩文部は0段燃りの縄巻繩文を施文している（N-2類）。240は深鉢形土器の口縁部破片で、横走する1段燃りの縄巻繩文を施文後、2条1単位の平行沈線を2段巡らしている（N-3類）。241・242は0段燃りの縄巻繩文を斜位・縱位に施文している（N-4類）。

石器は搔器（I類）が1点（第38図S50）出土している。

4 平安時代以降の遺構・遺物

（1）遺構・遺物

①郭（第7図・付図）

B区は舌状に張り出しており、ほぼ平坦で、東と西側の下には階段状の帯郭が見られる。頂部平坦部は調査区内の南端から北端まで36m、東端から西端まで20.5mの広さをもつ。北側と東側斜面では原状を著しく損ねているが、原状が良く残っている西側斜面には郭が2段構築されている。その規模は上段で長さ41m、幅3.3~4.5m、下段で長さ57m、幅6~7mである。東側でも平坦部のすぐ下と斜面中腹に部分的に2段確認でき、前者が長さ41m、幅は3.0~4.3m、後者が長さ25.5m、幅4.0mである。

西側の平坦部から1段目までに設定したトレンチの土層断面観察によれば、旧表土上に0.3~0.7mの黄褐色土を主体に盛土している。東側中腹部分に設定したトレンチでは、大湯浮石粒子を含む暗褐色土などを0.23~1.00m盛土しているのを確認した。

②柱穴様ピット（付図）

B区で47ヶ所検出した。平面形や掘方、深さがまちまちで、柱筋の通るものがない。したがって柱列や掘立柱建物跡を確認できなかった。P9からは鉄製角釘が1点（第67図3）出土している。

③溝状遺構（第60図）

S D07溝状遺構

A区の中央部を南東から北西方向に縱断しており、大湯浮石（第Ⅳ層）降下後に構築されている。規模は総延長32.37m、幅は0.44~0.75m、深さ0.08~0.43mで、南東部が幅も狭くて、浅く、北西部に行くほど広く、深く（第9図 S I 15土層断面図中）なる。縄文時代の遺物（第

36図157、第61図122~127) が出土しているが、外から流れ込んだものと考えられる。

他に、S D07に対して直角方向に、細く短い溝跡を30条検出した。いずれも大湯浮石降下後に構築されているもので、5~15条が1グループで並行し、A区中央部に分布しているものである。規模は長さ0.66~2.59m、幅0.23~0.46m、深さ0.03~0.13mである。

遺物は微小剥離痕のある剝片や半円状扁平打製石器、凹石が出土している。微小剥離痕のある剝片は2点(S122・S123)である。半円状扁平打製石器は1点(S124)で、素材の1縁辺を打ち欠いて刃部を作出したもの(II類)である。凹石は3点で、S125は凹面が両面(I-A類)、S126・S127は凹面が片面のみで、一端に敲打痕をもつ(II-B類)。

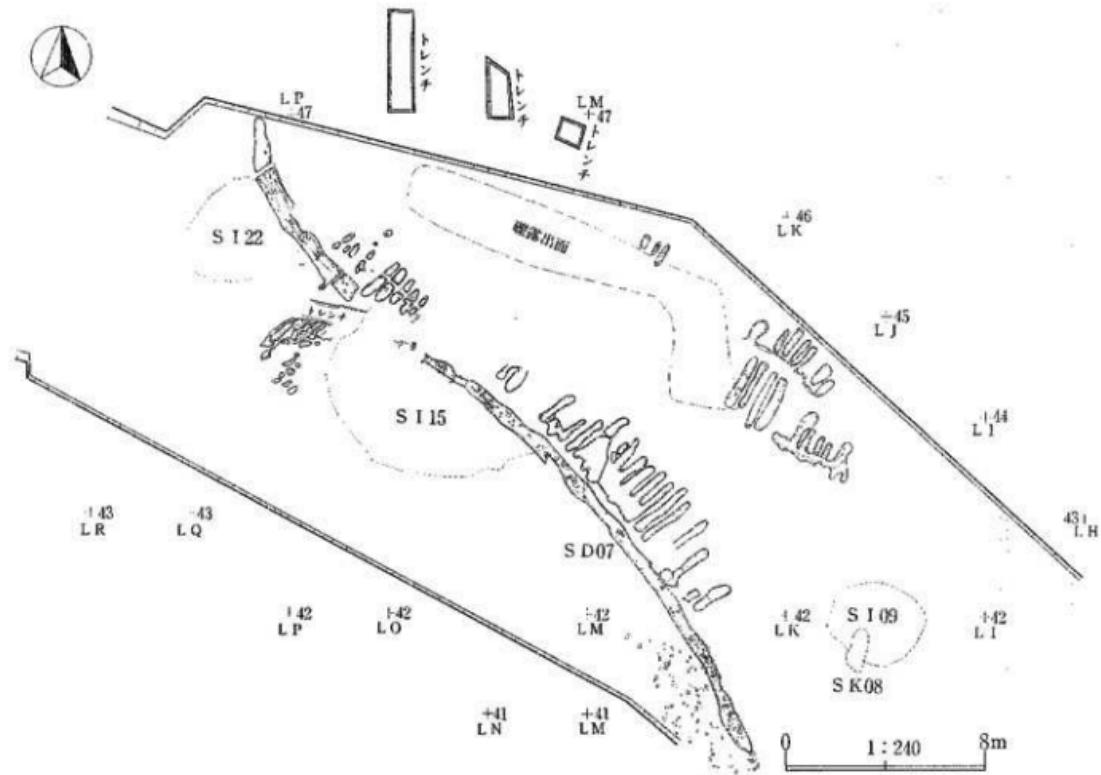
(2) 遺構外出土遺物

陶磁器や鉄釘・鉄滓が出土している。陶磁器(第63・64図1~11、第2表)は小破片を除く11点を図示した。このうち最も古い年代のものは1の鉄釉陶器皿で、16世紀後半のものである。他は江戸時代~現代のものである。陶磁器の產地や器種、特徴、年代の詳細については第2表に記しているので参照していただきたい。なお、法量は挿図中に記している。

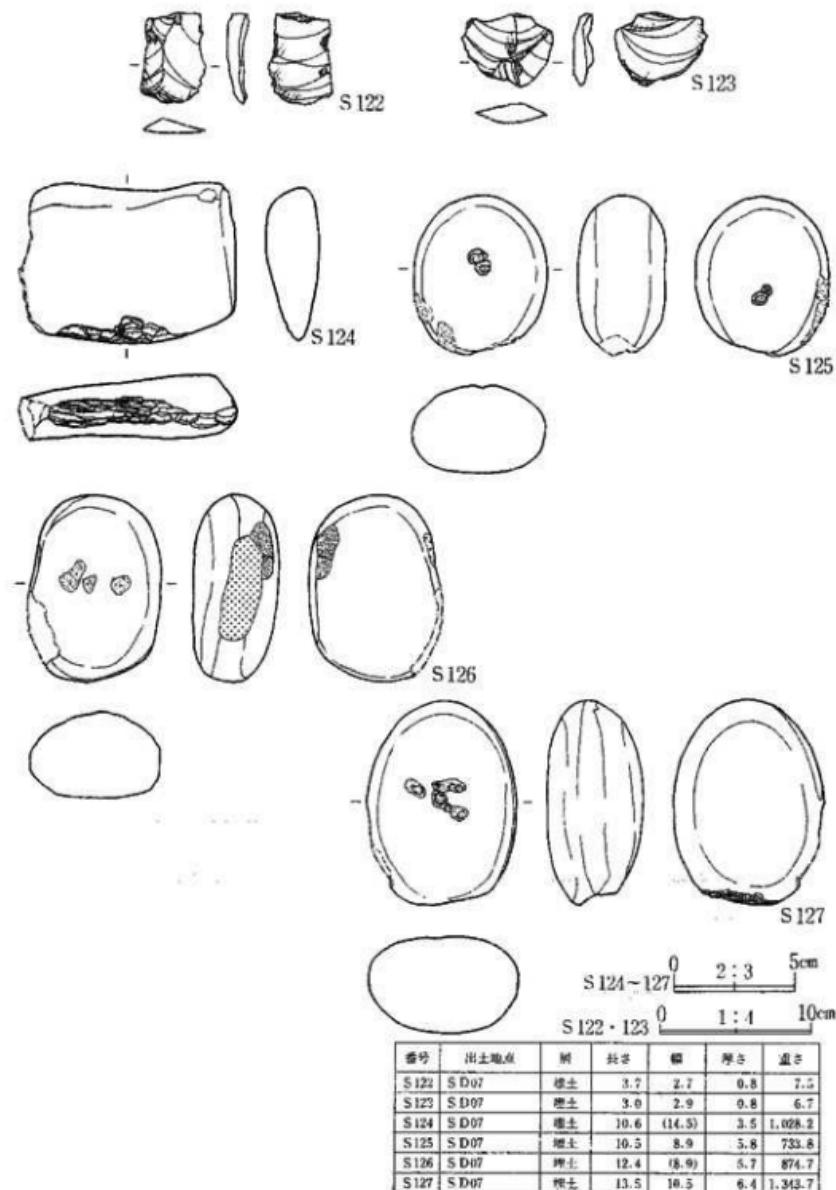
他に鉄製角釘が2点(第62図1・2)、鉄滓が4点(第62図4~6)出土している。なお、法量は挿図中に記している。図示していないが、平安時代の土師器壺口縁部が1点出土している。

第2表 出土陶磁器一覧

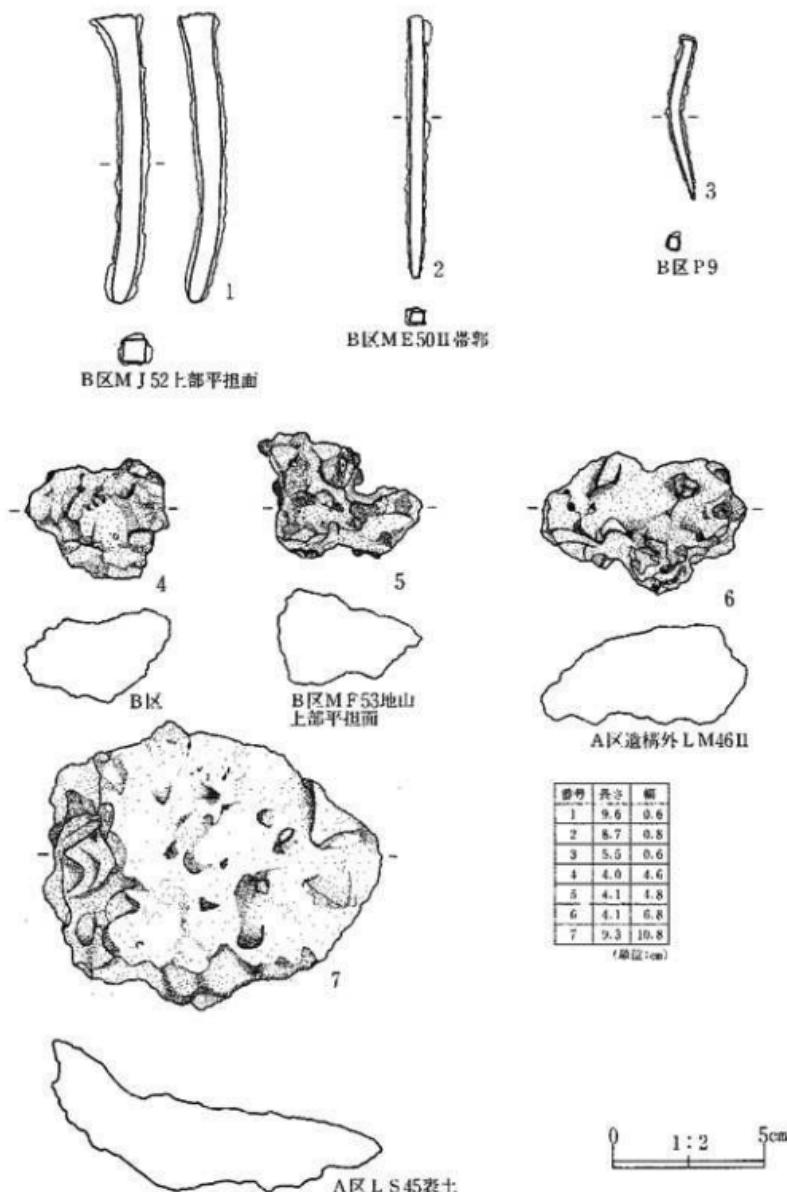
図番号	出土地点・層	種別・器種	産地・年代など
1	A区、L J38グリッド、Ⅲ層	鉄釉陶器皿	美濃・瀬戸系、16C後半、輪ドチによる重ね焼き
2	A区、L R46グリッド、Ⅳ層	鉄釉壺鉢	肥前、17C後半頃、口縁部のみ鉄釉を施す
3	A区、L P45グリッド、Ⅲ層	白磁(?)皿	肥前、18C
4	A区、L Q43グリッド、Ⅳ層	染付皿	肥前、18C中葉~末
5	A区、L L45グリッド、表土	青磁染付深皿	肥前、18C後半、蛇ノ目凹形高台
6	A区、L T45グリッド	鉄釉陶器小杯	相馬(福島)か、18~19C、見込馬文
7	A区、土焼場	燒跡の陶器焼跡	朝系、18~19C
8	A区、M A47グリッド、Ⅲ層	クロム青磁小皿	瀬戸・美濃か、明治~大正頃
9	B区、表様	染付皿	肥前、18C後半、蛇ノ目凹形高台
10	B区、M I51グリッド、平知面層	染付壺	肥前系、19C~暮末
11	B区、表様	染付皿	瀬戸・美濃系、明治~大正



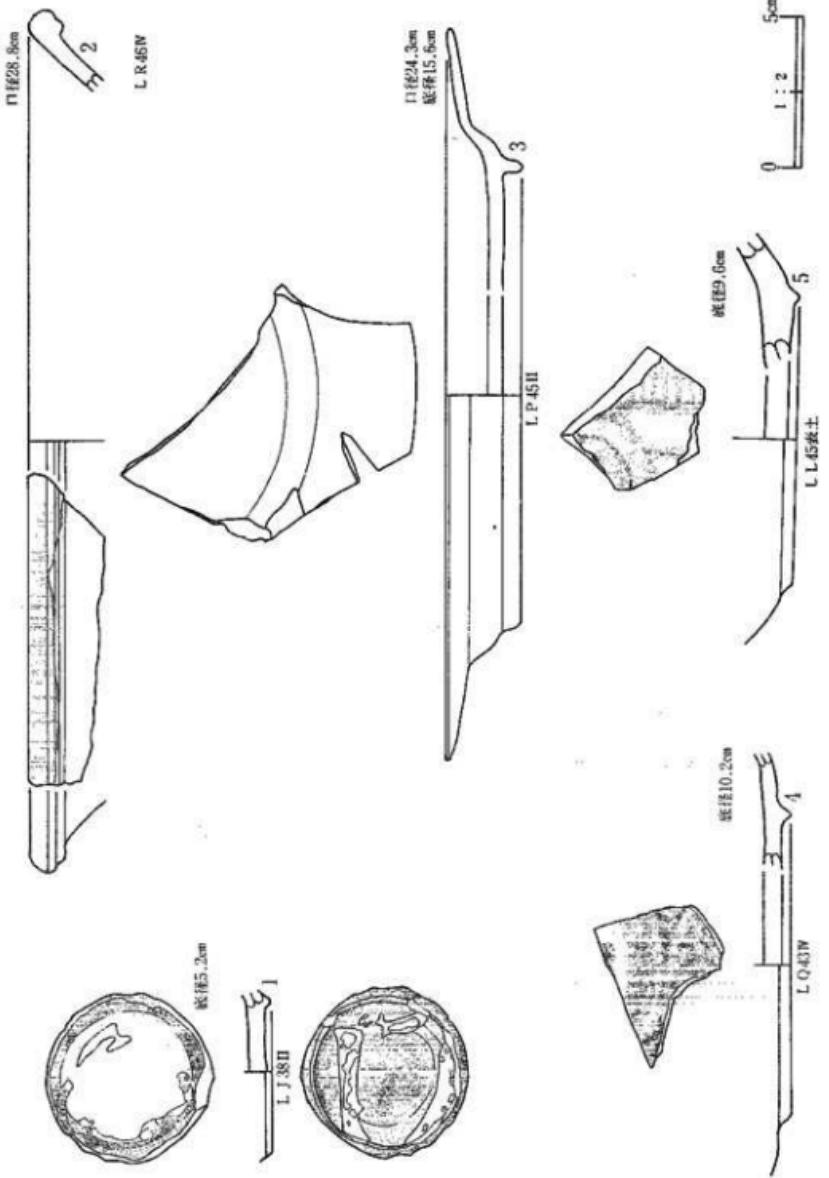
第60図 A区中央部 溝状造構



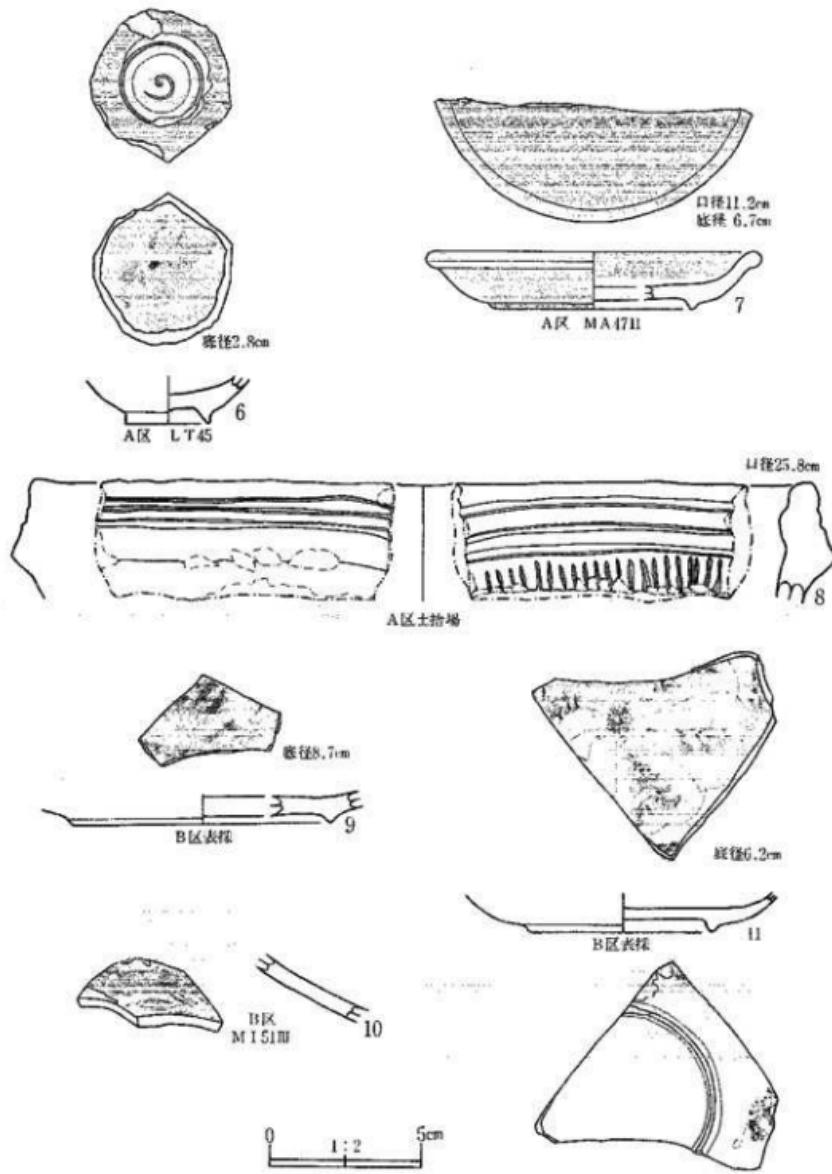
第61図 A区 S D07溝状遺構出土石器



第62図 A・B区 出土鉄製品・鉄滓



第63図 A区 出土陶磁器(1)



第64図 A・B区 出土陶磁器(2)

第5章 自然科学的分析

第1節 放射性炭素年代測定

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1994年1月13日

秋田県埋蔵文化財センター 謹

1993年10月4日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には ^{14}C の半減期として LIBBY の半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代です。また試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値（B. P.）として表示してあります。また試料の β 線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）について計数率との差が 2σ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

Code No.	試料	年代(1950年よりの年数)
GaK-17477	Charcoal from 天戸森遺跡 No. 1 1TTM S I 22埋土上位	4240 ± 80 2290 B. C.
GaK-17478	Charcoal from 天戸森遺跡 No. 2 1TTM S I 22埋土下位	4040 ± 80 2090 B. C.
GaK-17479	Charcoal from 天戸森遺跡 No. 3 1TTM 梱て場 LS 45グリッド V層	380 ± 120 A. D. 1520

第6章 まとめ

天ノ森遺跡は、米代川右岸の通称「陳場平台地」と呼ばれている、標高170mの広大な台地上に立地している。台地上部平坦面は北・東・西の三方向の展望にすぐれ、西に米代川、東に奥羽脊梁山脈を望む。今回の調査区はこの台地上部から、東側斜面下の平坦部までが調査対象となった。調査の結果、縄文時代中期後半の土器が主体的に出土し、後期の竪穴住居跡8軒、土坑20基、配石遺構3基、焼土遺構10基などが検出され、昭和57年に鹿角市教育委員会が実施した発掘調査を追認する形となった。

平成2年の遺跡分布調査結果や、それに基づいた本調査前の現地踏査では、A区は、斜面であるため遺物包含層が厚く、小規模な捨て場の可能性が考えられ、少数の土坑も存在することも予想されたが、調査の結果、竪穴住居跡6軒、土坑7基、配石遺構3基、焼土遺構6基などを検出し、捨て場も確認された。捨て場は、4軒の竪穴住居跡(S I 16・19・22・23)が廃絶された後に形成されていたもので、その層中からは焼土遺構(S N 30~34)や土坑(S K 02)、配石遺構(S Q 18)が検出され、配石遺構(S Q 20)に隣接して捨て場の層の最下部からは石棒が出土しており、この周辺では、祭祀的様相が強く感じられる。B区は既に地山まで削平されていたこともあり、縄文時代中期の集落跡の一部であるが、遺構・遺物数とも概してそう多くはないであろうという予想であった。しかし、B区では遺構の残存状況は比較的良好で、竪穴住居跡2軒、土坑13基など、予想よりもその数は多かった。

また、B区は「陳場平台地」の舌状部の最先端にあたり、北方には柴内館、乳牛館、万谷館などと一望できる地点にある。この斜面には数段の階段(帯)状の平場が構築されている。前述のように「陳場平台地」の南西には黒土館、南には花輪古館が所在しており、この台地の「四周には、2~5段の落郭があげられて、この広大な台地全体が一つの館として構成されていた可能性」が指摘されている。また、この「帶郭」は「花輪古館方面から台地北端にかけて、2~10m幅」で「2~5mの段差をもって・・・構築され」ており、「陳場平台地」の北端地区を黒土館に囲まれる遺構と考える指摘もなされている。

今回の調査では、建物跡や柱列プランを確認するにはいたらなかったが、柱穴様ビットからは鉄製の角釘が出土した。また、A区の遺構外からではあるが、16世紀後半の鉄融陶磁皿が出土している。黒土館が破却されたのは天正19(1591)年であることから、これらが館に伴う「帶郭」であるという1つの傍証になると考えられる。

- 註1 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年
註2 秋田県鹿角市教育委員会『鹿角の館－遺跡航空写真測量調査報告書（5）』 鹿角市文化財調査資料30 1986（昭和61）年
註3 註2と同じ

参考文献

- 青森県教育委員会 『中の平遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第25集 1975
(昭和50)年
- 青森県教育委員会 『三内澤部遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第41集 1978
(昭和53)年
- 青森県階上町教育委員会 『白座遺跡・野場遺跡発掘調査報告書』 1989（平成元）年
- 秋田市教育委員会 『小阿地下堤遺跡・板ノ上遺跡発掘調査報告書』 1976（昭和51）年
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道遺跡発掘調査報告書－居熊井遺跡・湯瀬館遺跡・大地平遺跡・上山田遺跡・堂の上遺跡・上葛岡遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第78集 1982（昭和57）年
- 秋田県教育委員会 『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－野沢岱遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第237集 1993（平成5）年
- 秋田県教育委員会 『頭道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書V－山王岱遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第221集 1992（平成4）年
- 秋田県教育委員会 『杉沢古・竹生遺跡』 秋田県文化財調査報告書第83集 1981（昭和56）年
- 秋田県教育委員会 『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第84集 1981（昭和56）年
- 秋田県教育委員会 『東北縦貫自動車道発掘調査報告書XX』 秋田県文化財調査報告書第120集 1984（昭和59）年
- 福川町教育委員会 『欠上り遺跡発掘調査報告書』 1990（平成2）年
- 岩手県立博物館 『岩手の土器－県内出土資料の集成－』 1982（昭和57）年
- （財）岩手県埋蔵文化財センター 『由代遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第41集 1982（昭和57）年
- 海宮 茂 「複式炉文化論」「福島考古」第15号 福島県考古学会 1974（昭和49）年
- 江坂 錠彌 「石神遺跡」 ニュー・サイエンス社 1970（昭和45）年
- 大館市史編さん委員会 『大館市史』第一巻 1979（昭和54）年
- 鹿角市 『鹿角市史』第一巻 1982（昭和57）年
- 鹿角市教育委員会 『天戸森遺跡発掘調査報告書』 鹿角市文化財調査資料26 1984（昭和59）年
- 鹿角市教育委員会 『天戸森の上器』 鹿角市文化財調査資料41 1990（平成2）年
- 興野 義一 「大木式土器理解のために（II）」「考古学ジャーナル」No.18 1968（昭和43）年
- 縄文文化検討会 『第1回 縄文文化検討会シンポジウム 東北地方北部の縄文時代中期末葉～後期前半の土器編年について』 1986（昭和61）年
- 鈴木 克彦 「円筒土器に後続する土器の編年」「考古風土記 第7号」 1982（昭和57）年

- 鈴木 克彦 「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年考察」『北奥古代文化 第8号』
北奥古代文化研究会 1976 (昭和51) 年
- 鈴木道之助 『國縁石器の基礎知識Ⅲ』 柏書房 1981 (昭和56) 年
- 角鹿 朝三・波辺 兼庸 『角鹿朝三著集考古学資料集』 1980 (昭和55) 年
- 高橋 泰時 「縄文中期の土器－東北地方－」『縄文土器大成2・中期』 講談社 1981
(昭和56) 年
- 中村 良幸 「「復式軸」について」『考古風土記 第7号』 1982 (昭和57) 年
- 日本鉛業株式会社船川製油所 『大畠遺跡発掘調査報告書』 1979 (昭和54) 年
- 丹羽 茂 「中期大木式土器様式」『縄文土器大綱1』 小学館 1989 (平成元) 年
- 丹羽 茂 「大木式土器」『縄文文化の研究4』 堆山閣 1981 (昭和56) 年
- 二ヶ井町教育委員会 『鳥野遺跡第2・3次発掘調査概報』 二ヶ井町埋蔵文化調査報告書第2集
1992 (平成4) 年
- 宮城県教育委員会 『埋蔵文化財緊急発掘調査概報－長根貝塚－』 宮城県文化財調査報告書第19
集 1969 (昭和44) 年
- 宮城県教育委員会 『三神峯遺跡発掘調査報告書－東北電力送電線鉄塔移設に伴う北東部C地点緊
急発掘調査－』 1980 (昭和55) 年
- 宮城県教育委員会 『今能野遺跡Ⅱ－縄文・弥生時代編』 1986 (昭和61) 年
- 村越 龍 『内詩土器文化』 雄山閣 1974 (昭和49) 年
- 日出 吉明 「住居のゆ」『縄文文化の研究第8巻社会・文化』 堆山閣 1982 (昭和57) 年
- 盛岡市教育委員会 『拂ノ木平遺跡－昭和57年度発掘調査概報－』 1983 (昭和58) 年
- 盛岡市教育委員会 『拂ノ木平遺跡－昭和59年度発掘調査概報－』 1985 (昭和60) 年
- 盛岡市教育委員会 『大館遺跡群（大館町遺跡）－昭和56年度発掘調査概報－』 1982
(昭和57) 年
- 盛岡市教育委員会 『聚遺跡－昭和58年度発掘調査概報－』 1984 (昭和59) 年
- 盛岡市教育委員会 『大熊遺跡群－昭和55年度発掘調査概報－』 1981 (昭和56) 年
- 盛岡市教育委員会 『大熊遺跡群（大新町遺跡・大加町遺跡）－昭和60年度発掘調査概報－』
1989 (平成元) 年
- 盛岡市教育委員会 『大熊遺跡群 平成2年度発掘調査概要』 1991 (平成3) 年
- 盛岡市教育委員会 『大熊遺跡群 大越町遺跡 平成3年度発掘調査概要』 1992 (平成4) 年
- 盛岡市教育委員会 『大熊遺跡群（大新町遺跡・大加町遺跡）－昭和58年度発掘調査概報－』
1984 (昭和59) 年
- 弥生時代研究会 『「天王山式期をめぐって」の検討会』 記録集 1990 (平成2) 年



1 空中写真—1993年7月撮影—（上が北）



2 調査区近景（北東→）



1 A区調査状況－B区平坦部より（南西）



2 A区緩斜面－調査後（東→）



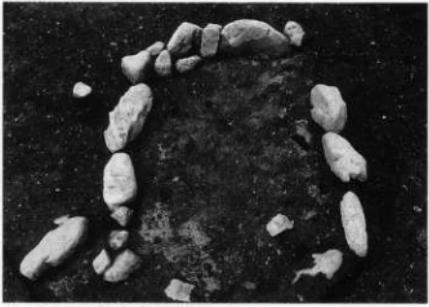
3 A区基本層位断面－調査区南端（東→）



1 A区SI09・SK08 完堀（南→）



2 A区SI15 完堀（南東→）



3 A区SI15炉 完堀（南東→）



1 A区SI16 完堀 (東→)



2 A区SI16炉 完堀 (東→)



3 A区SI19 完堀 (東→)



1 A区SI 22 完堀（西→）



2 A区SI 23 完堀（南→）



3 A区SI 23 遺物出土状況（東→）



1 A区SK25 完掘 (北→)



2 A区SO26 完掘 (北→)



3 A区中央部 清状遗構 (西→)



1 B区平坦部 調査後 (南→)



2 B区平坦部 調査状況 (北→)



3 B区平坦部西端 土層堆積状況 (南東→)



1 SI 50・SKF57 完堀（南→）



2 SKF57 完堀（南→）



3 SI 70・SKF69 検出状況（南→）



1 B区SX51 完堀（南→）



2 B区SX51 中央部土層断面（南→）



3 B区SX51 土器埋設炉断面（南→）



1



5



6



7



8



29



31



34



37



38

出土土器 (1)



39



49



53



70



72



73



74



75



76



91

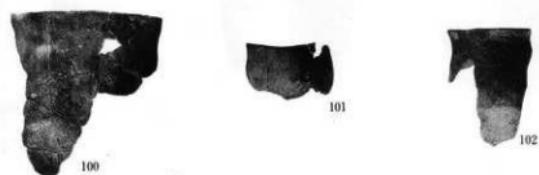


92



93

出土土器（2）



出土土器 (3)



138



142



143



178



181



190



204

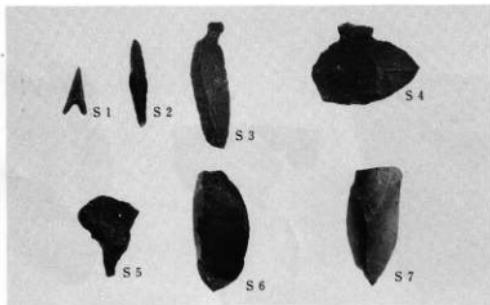


238

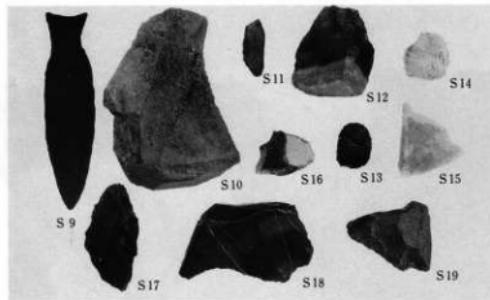


239

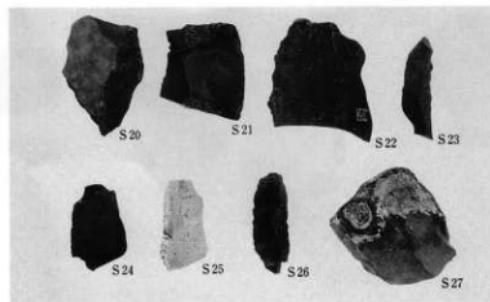
出土土器 (4)



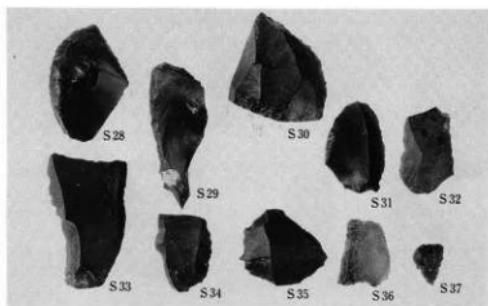
1 A区遺構内出土石器（1）



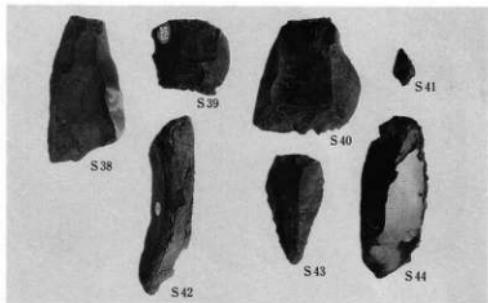
2 A区遺構内出土石器（2）



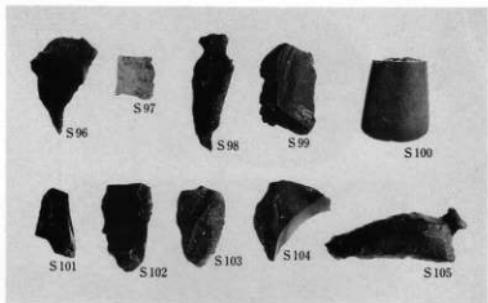
3 A区遺構内出土石器（3）



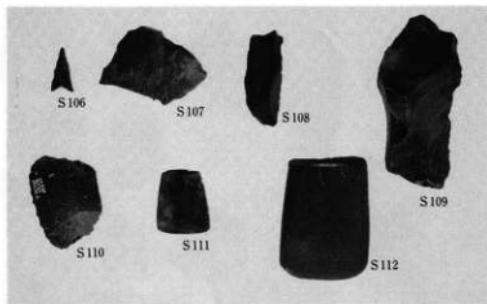
1 A区遺構内出土石器（4）



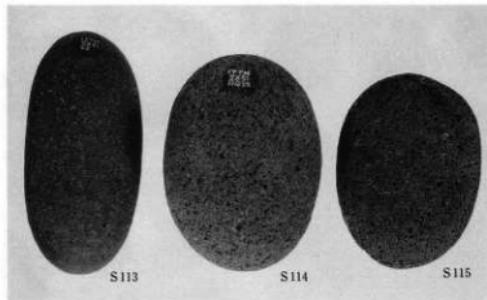
2 A区遺構内出土石器（5）



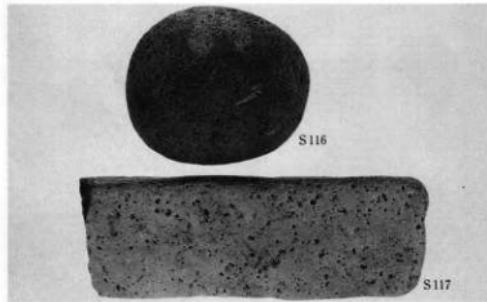
3 B区遺構内出土石器（1）



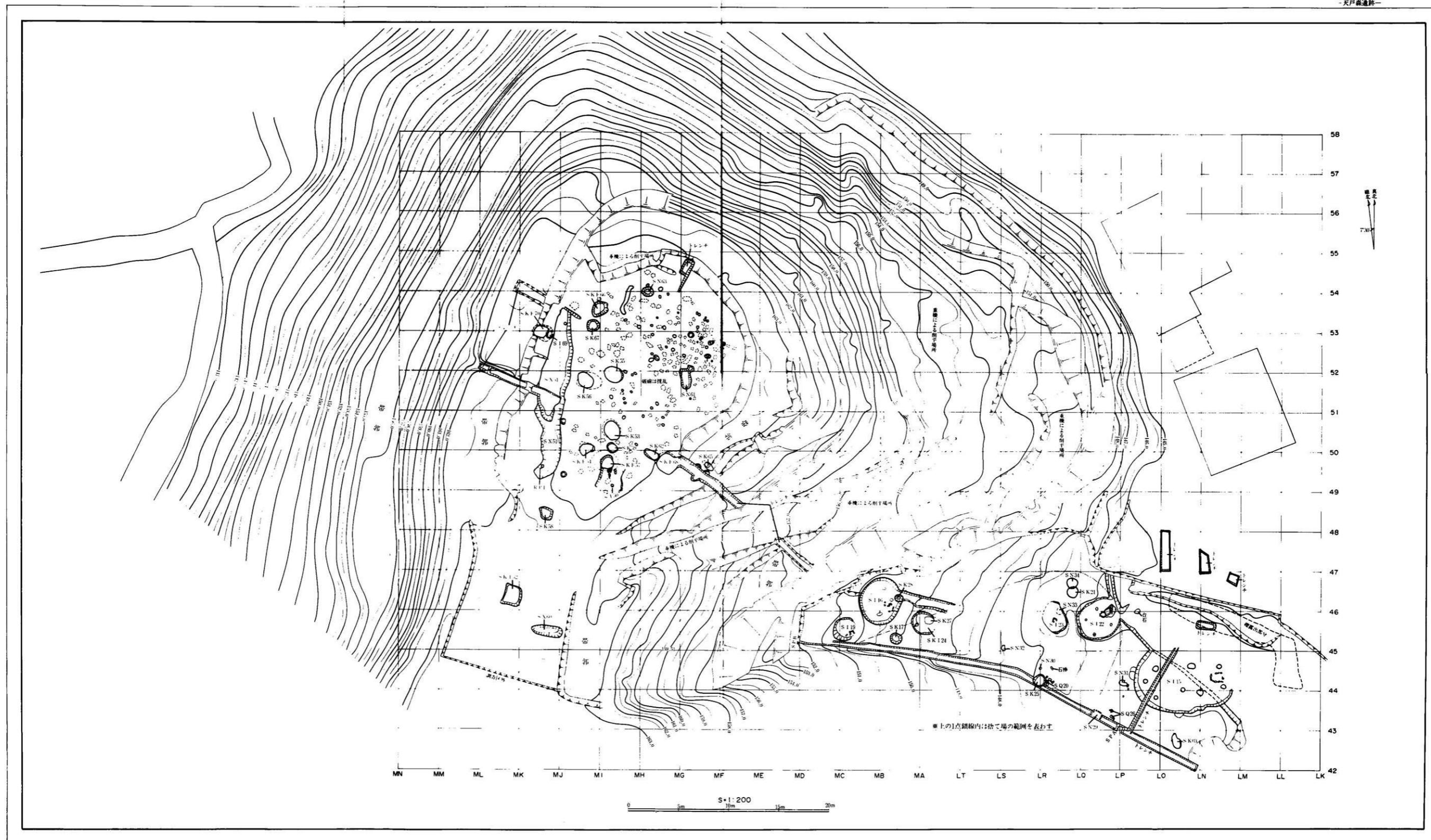
1 B区遺構內出土石器（2）



2 B区遺構內出土石器（3）



3 B区遺構內出土石器（4）



付図 天戸森遺跡遺構配置・地形図